快天山古墳発掘調査報告書

２００４．３

綾歌町教育委員会

快天山古墳発掘調査報告書

２００４．３

綾歌町教育委員会

快天山古墳くびれ部段築：東側（東から）

快天山古墳後円部盛土（西から）

はじめに

快天山古墳は、これまでに香川県教育委員会や京都大学考古学研究室が実施してきた発掘調査によって、県下でもとりわけ貴重な古墳であることが明らかになりました。しかし、それらの発掘調査の主は後円部頂部の主体部であり、墳丘の規模や施設・構造といったところについては確認調査が実施されておらず明確化されていませんでした。

そこで綾歌町教育委員会では、徳島文理大学文学部文化財学科のご協力を得て平成１３年度から墳丘についての測量調査及び確認調査を進めてまいりました。

この結果、快天山古墳は全長１００メートル近い前方後円墳で古墳時代前期に築造されたものとしては四国最大規模であることが確認されました。また、墳丘も段築構造で各段の斜面部には葺石が葺かれ、各段のテラスには円筒埴輪が立て並べられていることも確認されました。

さらに、後円部の上半部は非常に高度な技術を用いた盛土で構築されていることも判りました。

これらは、この地域では他に類がなく快天山古墳で初めて取り入れられた古墳築造技法のようです。このような地域の中でも特に突出した素晴らしい文化財が綾歌町に所在していることは、我々住民の誇りでもあります。

また、調査に関わった方々、ご指導ご協力くださいました方々、またきっかけをくださった地元住民の皆様方に深く感謝いたしております。

この貴重な文化遺産を、後世に伝えるため、今後の整備計画および活用計画が円滑に進められることを心から望んでいます。

平成１６年３月

綾歌町教育委員会
教育長　土岐道憲

凡　　例

1．この報告書は、平成１３年度から平成１５年度に綾歌町教育委員会が実施した香川県綾歌郡綾歌町栗熊東字若狭及び同町富熊字畑田に所在する快天山古墳の発掘調査報告書である。

2．本文第４～６章は、平成１３年度から平成１５年度に綾歌町教育委員会が発行した『綾歌町内遺跡発掘調査報告書第６～８集』の本文から抜粋した。但し、図版等の番号については、本書全体で一貫するように変更した。

3．本文第１～３章、第６章中第４～５節及び第７～８章の執筆は、綾歌町教育委員会主任主事近藤武司が行った。本文第４～５章及び第６章中第１～３節は徳島文理大学文学部助教授大久保徹也氏が行った。本書全体の調整は、近藤が行った。

4．本書実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また、実測図中の方位は、特に記載のないものについては国土座標第Ⅳ系によるものである。

5．出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。

6．今回の報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご協力を得た。ここに記して謝意を表する。
大久保徹也（徳島文理大学文学部助教授）、丹羽佑一（香川大学教育学部教授）、小林謙一（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化財情報研究室長）、渡部明夫（香川県埋蔵文化財調査センター次長）、國木健司（香川県教育委員会事務局高校教育課指導主事）、蔵本晋司（財団法人香川県埋蔵文化財調査センター文化財専門員）、信里芳紀（同主任技師）、乗松真也（同主任技師）、加納裕之（調査技術員）、片桐孝浩（香川県教育委員会文化行政課主任）、松本和彦（同主任技師）、東信男（丸亀市教育委員会副主任）、大野宏和（同嘱託）、阿河鋭二（大川広域行政組合）

目　　次

本 文 目 次

報告書作成に至る経緯 …… 1
第１章　序説 …… 2
第２章　古墳の立地と環境 …… 3
　第１節　古墳の位置 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
　第３節　快天山古墳の現況 …… 5
第３章　調査に至る経緯と経過 …… 6
　第１節　調査に至る経緯 …… 6
　第２節　調査の経過 …… 7
　　１．平成１３年度 …… 7
　　２．平成１４年度 …… 7
　　３．平成１５年度 …… 8
　　４．総括 …… 8
第４章　平成１３年度快天山古墳確認調査概要 …… １２
　第１節　調査の概要 …… １２
　第２節　各トレンチの概要 …… １２
　　１．第１トレンチ（第３図） …… １２
　　２．第６トレンチ（第４図） …… １２
　　３．第２トレンチ（第６・７図） …… １３
　　４．第３トレンチ（第８図） …… １５
　　５．第４トレンチ（第９図） …… １６
　　６．第５トレンチ（第１０図） …… １７
　第３節　出土遺物（第１１・１２図） …… １８
第５章　平成１４年度快天山古墳確認調査概要 …… ２３
　第１節　各調査区の概要 …… ２３
　　１．７トレンチ：前方部前端（第１３・１４図） …… ２３
　　２．８トレンチ：前方部前端（第１３図） …… ２４
　　３．９トレンチ：前方部前面付近の東側面（第１３・１５図） …… ２５
　　４．１０トレンチ：前方部前面付近頂部（第１３図） …… ２６
　　５．１１トレンチ：前方部東面（第１６・１７・１８・１９図） …… ２６
　　６．１２トレンチ（第１６・１７・１９図） …… ３０
　　７．１３トレンチ（第１６・１７・１９図） …… ３２
　　８．３トレンチ拡張部（第２図） …… ３３
　　９．１４トレンチ（第２図） …… ３４

第６節　埋葬施設 …… ９６
第８章　まとめ …… ９８

挿　図　目　次

第１図　快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓（Ｓ＝1/5000） …… ４
第２図　快天山古墳トレンチ配置図（Ｓ＝1/600） …… ９
第３図　快天山古墳墳丘測量図（Ｓ＝1/600） …… １０
第４図　第１トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １３
第５図　第６トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １３
第６図　第２トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １４
第７図　第２トレンチ　葺石平・立面図（Ｓ＝1/30） …… １４
第８図　第３トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １５
第９図　第４トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １６
第１０図　第５トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60） …… １７
第１１図　出土遺物実測図１（Ｓ＝1/4） …… １８
第１２図　出土遺物実測図２（Ｓ＝1/4） …… ２０
第１３図　前方部前面調査区配置図 …… ２３
第１４図　７トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60） …… ２４
第１５図　９トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60） …… ２５
第１６図　前方部東面調査区配置図 …… ２７
第１７図　前方部東面調査区（１１～１３トレンチ）平・立面図（Ｓ＝1/60） …… ２８
第１８図　前方部東面断面図（Ｓ＝1/60） …… ２９
第１９図　火葬墓平・断面図（１１トレンチ） …… ３０
第２０図　円筒埴輪（Ｓ＝1/4） …… ３６
第２１図　円筒埴輪（Ｓ＝1/4） …… ３７
第２２図　壺形埴輪（Ｓ＝1/4） …… ４０
第２３図　火葬墓関連資料他（Ｓ＝1/4） …… ４１
第２４図　１５トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60） …… ５１
第２５図　１６トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/40） …… ５２
第２６図　１７トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/40） …… ５４
第２７図　壺形埴輪（Ｓ＝１／４） …… ５６
第２８図　円筒埴輪１（Ｓ=１／４） …… ５８
第２９図　円筒埴輪２（Ｓ=１／４） …… ５９

第２節　出土遺物の概要 …… ３５
１．快天山古墳関係遺物（第２０～２２図） …… ３５
２．火葬墓関連遺物他（第２３図他） …… ４１
３．その他 …… ４２
第６章　平成１５年度快天山古墳確認調査概要 …… ５０
第１節　くびれ部調査区の概要 …… ５０
１．１５トレンチ：くびれ部西面（第２４図　写真１０） …… ５０
２．１６トレンチ：くびれ部東面（第２５図　写真１１） …… ５２
３．１７トレンチ：後円部北東斜面上位（第２６図　写真１２） …… ５３
第２節　くびれ部調査区出土遺物の概要 …… ５５
１．快天山古墳関係遺物（第２７～３３図　表１　写真１３～１７） …… ５５
第３節　平成１４年度調査成果補遺 …… ６３
１．３トレンチ拡張部（第３４図） …… ６３
２．１４トレンチ（第３５図） …… ６４
第４節　後円部調査区の概要 …… ７１
１．１８トレンチ：後円部南西面（第３９図　写真１８） …… ７１
２．１９トレンチ：後円部南東面（第４０図　写真１９） …… ７５
３．２０トレンチ：後円部南西面（第４１図　写真２０） …… ７７
第５節　後円部調査区出土遺物の概要 …… ７８
１．快天山古墳関係遺物（第４２図　写真２１） …… ７８
第７章　快天山古墳の構築 …… ９３
第１節　立地 …… ９３
１．地形との関係 …… ９３
２．可視領域 …… ９３
３．旧地形観察 …… ９３
第２節　墳丘形状 …… ９４
第３節　墳丘の大きさ …… ９４
第４節　構築 …… ９５
１．立地関係 …… ９５
２．前方部 …… ９５
３．後円部 …… ９５
第５節　外表施設 …… ９５
１．葺石 …… ９６
２．テラス面 …… ９６
３．円筒埴輪列 …… ９６

写真２ …… ２２
図版３　第１トレンチ落ち込み部埴輪出土状態（北から）
図版４　第１トレンチ落ち込み（西から）
図版５　第１トレンチ落ち込み（北から）
図版６　第６トレンチ（西から）
図版７　第２トレンチ葺石（西から）
図版８　第２トレンチ埴輪樹立状態（南から）
図版９　第２トレンチ葺石と埴輪（南から）
図版１０　第４トレンチ傾斜変換点（東から）

写真３　前方部前端調査区・前方部東面調査区１ …… ４３
図版１１　第７～９トレンチ全景（北から）
図版１２　第９トレンチ全景（東から）
図版１３　第７トレンチ全景（北から）
図版１４　第７トレンチ前端区画溝南肩（西から）
図版１５　第１２トレンチ第三段斜面葺石（東から）
図版１６　第１１～１３トレンチ全景（南から）

写真４　前方部東面調査区２ …… ４４
図版１７　第１２トレンチ第一段斜面葺石（東から）
図版１８　第１１・１３トレンチ第一・二段斜面葺石（東から）
図版１９　第１１・１２トレンチ第一・二段斜面葺石（北から）
図版２０　第一段斜面葺石（北から）
図版２１　第１１トレンチ第一段斜面葺石屈折部
図版２２　第１３トレンチ第一段テラス埴輪設置状況

写真５　前方部東面　火葬墓 …… ４５
図版２３　火葬墓壙半砕状況
図版２４　火葬墓壙掘下状況
図版２５　火葬墓壙完掘状況
図版２６　火葬墓壙完掘状況
図版２７　第１１トレンチ火葬墓検出位置（丸印の部分）

第３０図　円筒埴輪３（S=１/４）……６０
第３１図　円筒埴輪４（S=１/４）……６１
第３２図　円筒埴輪５（S=１/４）……６２
第３３図　円筒埴輪６（S=１/４）……６３
第３４図　３トレンチ平・断面図（S＝1/60）……６５
第３５図　４トレンチ平・断面図（S＝1/60）……６７
第３６図　快天山古墳調査区配置図……６９
第３７図　快天山古墳段築・埴輪復元推定図（前方部）……７０
第３８図　前方部東面調査区平面図……７０
第３９図　１８トレンチ平・断面図（S＝1/60）……７３
第４０図　１９トレンチ平・断面図（S＝1/60）……７６
第４１図　２０トレンチ平・断面図（S＝1/60）……７８
第４２図　壺形・円筒埴輪（S＝１/４）……７９
第４３図　快天山古墳からの可視領域（S＝1/100000）……９７

表　目　次

表１　遺物観察表……６８

図　版　目　次

巻頭図版
快天山古墳くびれ部段築：東側（東から）
快天山古墳後円部盛土（西から）

写真１……２１
図版１　第５トレンチ後円部南（南から）
図版２　第３トレンチ：後円部西（西から）

写真６　第３トレンチ拡張区・第１４トレンチ …… ４６
図版２８　第３トレンチ拡張区全景（西から）
図版２９　第３トレンチ拡張区盛土断割状況（東から）
図版３０　第３トレンチ拡張区墳丘上半部の盛土
図版３１　第１４トレンチ全景（西から）
図版３２　第１４トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪（南から）
図版３３　埴輪設置状況
図版３４　第１４トレンチ第一・二段斜面葺石（西から）

写真７　出土遺物１：円筒埴輪 …… ４７
図版３５　円筒埴輪中位（第２０図１）表
図版３６　円筒埴輪中位（第２０図１）裏
図版３７　円筒埴輪中位（第２１図３）表
図版３８　円筒埴輪中位（第２０図３）表
図版３９　円筒埴輪中位　表
図版４０　円筒埴輪中位　表
図版４１　円筒埴輪中位（第２１図１）表
図版４２　円筒埴輪中位（第２０図４）表
図版４３　円筒埴輪中位（第２０図５）表

写真８　出土遺物２：壺形・円筒埴輪 …… ４８
図版４４　壺形埴輪口縁（第２２図１）
図版４５　壺形埴輪頸部（第２２図５）
図版４６　壺形埴輪口縁（第２２図４）
図版４７　壺形埴輪口縁（第２２図３）
図版４８　壺形埴輪口縁（第２２図２）
図版４９　円筒埴輪底部（第２１図５）
図版５０　円筒埴輪口縁（第２０図２）
図版５１　円筒埴輪口縁（第２０図２）拡大

写真９　火葬墓関連遺物 …… ４９
図版５２　蔵骨器（第２３図３）
図版５３　墓壙内出土土師器皿（第２３図２）表
図版５４　墓壙内出土土師器皿（第２３図２）裏
図版５５　八稜鏡

写真１０　１５トレンチ …… ８１
図版５６　推定第二段テラス遺物出土状態（西から）
図版５７　推定第二段テラス遺物出土状態（東から）
図版５８　第二段テラス遺物出土状態（西から）
図版５９　第三段斜面葺石遺存状態（西から）
図版６０　第二段斜面葺石（西から）
図版６１　第二段斜面葺石と基底石掘方？
図版６２　第二段斜面葺石（南から）
図版６３　第二段斜面葺石（上から）

写真１１　１６トレンチ …… ８２
図版６４　第三段斜面葺石残存状態（東から）
図版６５　第三段斜面葺石（北から）
図版６６　第三段斜面葺石（東から）
図版６７　第三段斜面葺石（南から）
図版６８　推定第二段テラス遺物出土状態（東から）
図版６９　第二段テラス遺物出土状況（西から）
図版７０　第二段テラス遺物出土状況（東から）
図版７１　第二段テラス遺物出土状況（南から）

写真１２　１７トレンチ …… ８３
図版７２　１７トレンチ全景（東から）
図版７３　１７トレンチ南壁土層全景（北東から）
図版７４　南壁土層：中央部（北から）
図版７５　南壁土層：西部（北から）
図版７６　南壁土層：東部（北から）
図版７７　１７トレンチ遺物検出作業
図版７８　１７トレンチ葺石実測作業
図版７９　調査説明会風景

写真１３　１５トレンチ出土埴輪 …… ８４
図版８０　壺形埴輪（第２７図－１）
図版８１　壺形埴輪（第２７図－２）表
図版８２　壺形埴輪（第２７図－２）裏
図版８３　円筒埴輪口縁部（第２８図－２）表
図版８４　円筒埴輪口縁部（第２８図－２）裏
図版８５　円筒埴輪口縁部（第２８図－５）表
図版８６　円筒埴輪口縁部（第２８図－５）裏
図版８７　円筒埴輪中位（第３１図－２）表
図版８８　円筒埴輪中位（第３１図－２）裏

写真１４　１５トレンチ出土埴輪２ …… ８５
図版８９　円筒埴輪中位（第３２図－１）表
図版９０　円筒埴輪中位（第３２図－１）裏
図版９１　円筒埴輪中位（第３０図－３）表
図版９２　円筒埴輪中位（第３０図－３）裏
図版９３　円筒埴輪中位（第３１図－４）表
図版９４　円筒埴輪中位（第３１図－４）裏
図版９５　円筒埴輪中位（第３１図－４）拡大

写真１５　１５トレンチ出土埴輪３ …… ８６
図版９６　円筒埴輪中位（第２９図－４）表
図版９７　円筒埴輪中位（第２９図－４）裏
図版９８　円筒埴輪中位　表
図版９９　円筒埴輪中位　裏
図版１００　円筒埴輪基底部（第３３図－１）表
図版１０１　円筒埴輪基底部（第３３図－１）裏
図版１０２　円筒埴輪基底部（第３３図－４）表
図版１０３　円筒埴輪基底部（第３３図－４）裏

写真１６　１６トレンチ出土埴輪１ …… ８７
図版１０４　円筒埴輪口縁部（第２８図－１）表
図版１０５　円筒埴輪口縁部（第２８図－１）裏
図版１０６　円筒埴輪口縁部（第２８図－３）表
図版１０７　円筒埴輪口縁部（第２８図－３）裏
図版１０８　円筒埴輪口縁部（第２８図－４）表
図版１０９　円筒埴輪口縁部（第２８図－４）裏
図版１１０　円筒埴輪口縁部（第２８図－６）表
図版１１１　円筒埴輪口縁部（第２８図－６）裏

写真１７　１６トレンチ出土埴輪２ …… ８８
図版１１２　円筒埴輪中位（第２９図－３）表
図版１１３　円筒埴輪中位（第２９図－３）裏
図版１１４　円筒埴輪中位（第３０図－４）表
図版１１５　円筒埴輪中位（第３０図－４）裏
図版１１６　壺形埴輪底部：穿孔部（第２７図－５）表
図版１１７　壺形埴輪底部：穿孔部（第２７図－５）断面
図版１１８　壺形埴輪底部：穿孔部（第２７図－５）裏

写真１８　１８トレンチ …… ８９
図版１１９　作業風景
図版１２０　置土検出状況（北西から）
図版１２１　置土検出状況（西から）
図版１２２　盛土確認状況（西から）
図版１２３　盛土確認状況（北西から）
図版１２４　盛土検出状況（西から）
図版１２５　埴輪据付壙？検出状況（南西から）
図版１２６　土壙検出状況（北西から）

写真１９　１９トレンチ …… ９０
図版１２７　墳端付近から墳頂を望む（南東から）
図版１２８　トレンチ全景（北東から）
図版１２９　トレンチ全景（東から）
図版１３０　推定テラス付近確認状況（南から）
図版１３１　埴輪裾付壙？検出状況（南から）
図版１３２　埴輪裾付壙？完掘状況（南から）
図版１３３　埴輪裾付壙？検出状況（南西から）

写真２０　２０トレンチ …… ９１
図版１３４　出土遺物検出状況（北東から）
図版１３５　礫等堆積状況（北東から）
図版１３６　土壙検出状況（南東から）
図版１３７　土壙堆積状況（南から）
図版１３８　南東壁土層堆積状況（西から）
図版１３９　南東壁土層堆積状況（北から）
図版１４０　北西壁土層堆積状況（東から）
図版１４１　北西壁土層堆積状況（南から）

写真２１　各トレンチ出土埴輪 …… ９２
図版１４２　１８トレンチ円筒埴輪中位（第４２図－１）
図版１４３　１８トレンチ円筒埴輪口縁部（第４２図－２）
図版１４４　１８トレンチ円筒埴輪中位（第４２図－３）
図版１４５　１８トレンチ円筒埴輪中位（第４２図－４）
図版１４６　１８トレンチ壺形埴輪口縁部（第４２図－５）
図版１４７　１９トレンチ円筒埴輪中位（第４２図－６）
図版１４８　２０トレンチ円筒埴輪中位（第４２図－７）

報告書作成に至る経緯

１９５０（昭和２５）年、地元中学生が地表に露出する石棺の蓋を発見したことにより、香川県教育委員会によって快天山古墳の発掘調査が実施された。この内容は、翌年に『史跡名勝天然記念物調査報告　第１５　快天山古墳発掘調査報告書』として報告されている。また、２００２（平成１２）年には、綾歌町教育委員会によって復刻版が刊行されている。

１９５１（昭和２６）年、京都大学文学部考古学教室によって再調査が実施された。この内容は、２００２（平成１４）年にようやく『岩崎山第４号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』として報告された。

上記２回の発掘調査は、主に主体部の確認調査が主で墳丘構造や外表施設の確認に関するものではなかった。しかしながら、埋葬施設だけ見ても国内最古の刳抜式石棺を３基配列していること、そのそれぞれに銅鏡をはじめとする様々な副葬品を副葬することなどから、本町のみならず全国的に見ても非常に貴重な文化財と位置付けることができる。

以後、半世紀程快天山古墳の墳丘そのものに手をつけることは成されてこなかったが、近年になり文化財愛護に対する声が大きくなってきており、地元住民を中心に快天山古墳の適切な保護及び保存について叫ばれるようになってきた。

これを受けて綾歌町教育委員会では、平成１１年２月に快天山古墳を町史跡として指定するに至った。更に、より良い保護・活用について検討した結果、国史跡として整備するのが適当であるとの結論に結びついた。

しかしながら、遺跡の重要性については申し分ないが、墳丘について説明する資料が整っていなかったため、平成１３年度から平成１５年度までの３ヵ年、墳丘についての確認調査を実施した。実施に際しては、快天山古墳調査検討委員会を編成し、充分な検討・協議を重ねての取り組みとなった。

これらの調査の結果、快天山古墳は古墳時代前期に築造された前方後円墳としては四国最大規模であり築造方法としても地域のものとしては特に秀でたものであることが確認された。

この墳丘確認調査の内容については、年度毎に『綾歌町内遺跡発掘調査報告書』に掲載してきたが、一連の調査が終了したことにより、ここに総括として報告する。

第１章　　序　　説

快天山古墳は、その墳頂部に石棺蓋の上部が露出していたことから、古くからその存在が知られていた。しかしながら、その構造について触れる調査はなされてこなかった。

１９５０（昭和２５）年に、初めて香川県教育委員会内香川県名勝天然記念物調査委員会和田正夫、松浦正一氏らと当時の久栄中学校校長大林秀雄氏と学生達によって主体部の調査が実施され、翌年には京都大学文学部考古学教室梅原末治、横山浩一氏らによって再調査が実施された。

これらの調査によって、快天山古墳後円部墳頂には３基の埋葬施設が計画的に配置されておりそのそれぞれから獣帯方格規矩四神鏡や石釧などの副葬品が出土している。更に、石棺は刳抜式で国内でも最古の部類に属するものであることが確認されている。また、墳丘は簡易測量の結果、前方後円墳で墳長１００m程の規模であることが有力視されていた。

これらのことから、快天山古墳は特に貴重な文化財であることが認識されるようになった。

その後、特に保護措置が成される訳でもなく近年に至ったが、地元住民の熱意ある文化財愛護運動の結果、平成１１年２月に快天山古墳は町指定史跡としての認定を受けた。しかし、それは文化財保護についての網掛けが成されたに過ぎず、活用に向けたものではなかった。そこで、様々な検討を行った結果、有効な活用を図るには国指定史跡の認定を受け、適切な整備を図る必要があるとの結論に達した。

以前の調査によって、主体部の大まかな内容は確認・報告が成されているが、墳丘の規模・構造等についての確認調査は実施してされていなかったことにより不明な点が多かった。そこで、平成１３年度から綾歌町教育委員会によって墳丘の確認調査が実施されることになり、快天山古墳の全貌を解明するための調査に着手した。この調査は、平成１５年度までの３ヵ年で実施された。

この墳丘確認調査の内容は、年度毎に報告されてきたが、新たな調査により新しい見解が生じたりする点もある。ここで、３ヵ年の成果をとりまとめ、快天山古墳の実態を明らかにしたい。

第２章　　古墳の立地と環境

第１節　古墳の位置

快天山古墳は北緯３４°１３′５７″、東経１３３°５３′３０″に位置する。また、国土座標第Ⅳ系で表示すると、後円部中心点がＸ：１３７０７８．２４１ｍ，Ｙ：３６２１３．２８８ｍとなる。

四国北東部の讃岐地域は、燧灘に面した三豊平野、備讃瀬戸に面して東西に並ぶ高松平野・丸亀平野、および播磨灘に面した東部海岸平野群と後背内陸平地群から成り立つが、快天山古墳はこのうち丸亀平野の南部に所在する。平野東縁を画する城山・横山山塊最南端の丘陵上にあって、大束川、綾川のほぼ分水界に位置する。

山塊の南縁は細かく開析され小丘陵が手指状に並ぶが、本古墳はそうした丘陵先端部の一つを利用して築かれた大形の前方後円墳である。

東方の綾川水系上流域に広がる羽床盆地に対する眺望は堤山等に遮られその一部を垣間見るに過ぎないが、南～西方向の視界は概ね開け、大束川上流域の栗熊・富熊地域から岡田台地一帯を広く見渡すことができる。

古墳は後円部を南、すなわち丘陵先端に向け、前方部を北に向ける。後円部頂は標高７５．４ｍを測り、周囲の水田面との比高はおよそ４０ｍで、南方の平地側からは後円部の圧倒的な質感を仰ぎ見ることができる。

第２節　歴史的環境

北方の横山山塊の高所には、横山経塚、奥川内、陣の丸、地神山といった古墳群が分布する。このうち横山経塚古墳群は少なくとも２基の前方後円墳を含む積石墳墓群である。

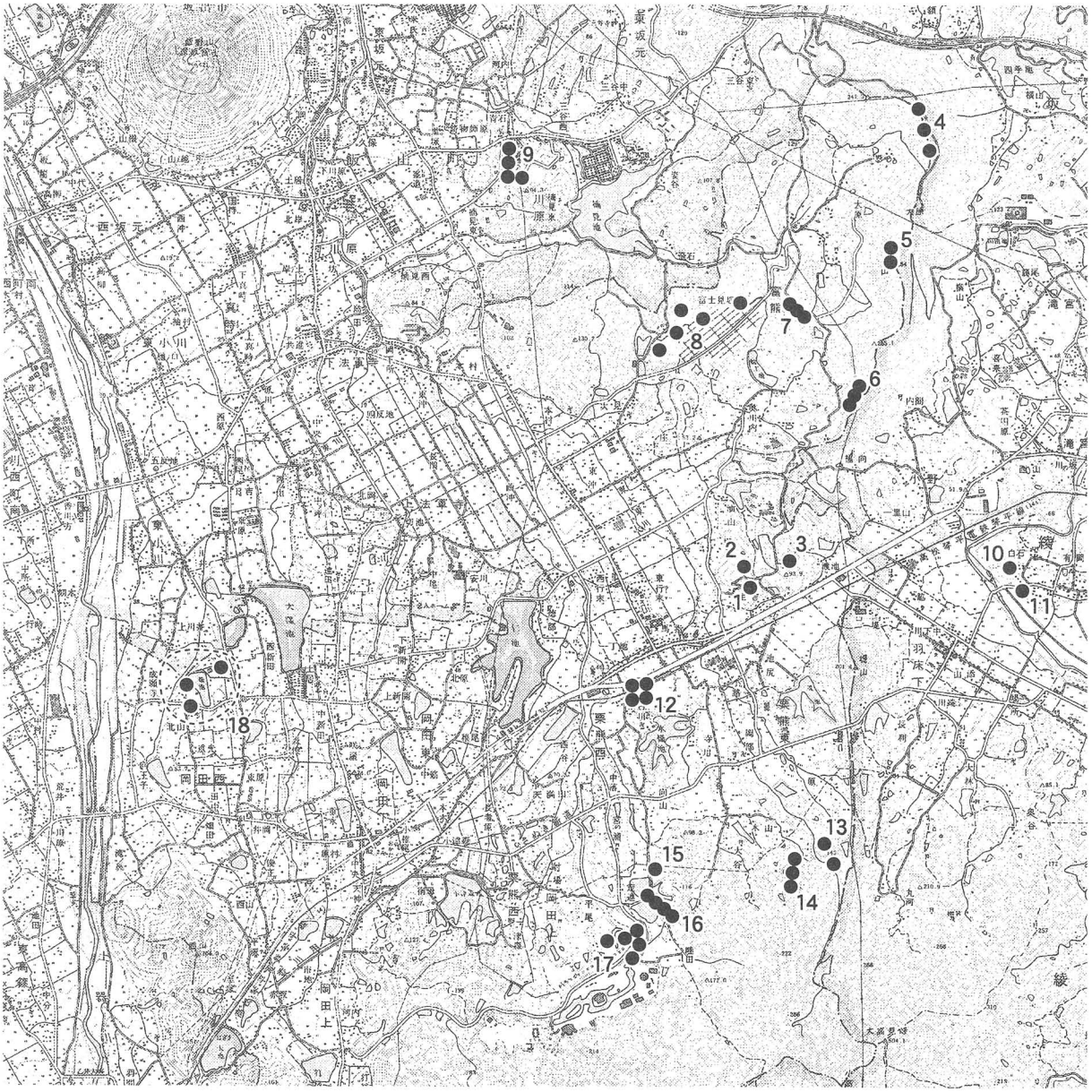
また、陣の丸古墳群では２基、奥川内古墳群では１基の盛土前方後円墳を含む。これらの前方後円墳はいずれも軸長４０ｍ以下で立地等から古墳時代前期に遡ると見られ、快天山古墳に先行する可能性が高い。地神山古墳群は中期後半～後期前半に下ると見られ、小型前方後円墳を含むというが、その内容は未だ報告されていない。

これに対して丘陵南縁にはより劣位の無墳丘箱式石棺もしくは小型古墳が散在する。快天山古墳に近接した尾根伝いの北方約１００ｍの地点には、安山岩板石で構築した精美な竪穴石槨を中心主体とする墳形・規模不詳の薬師山古墳がかつて存在した。東隣尾根先端の住吉神社背後からは箱式石棺が見つかっている。これらに関する情報は乏しいが、その多くは中期前半以前に比定しうるものと見られる。さらに快天山古墳前方部に接して５基の箱式石棺群が開墾時に確認されており、うち一基から小型倭製鏡が出土している。また後円部南斜面の開墾時にも硬玉製勾玉の出土が伝えられており、位置関係からこれらは本墳に従属する埋葬群と位置づけられる可能性が高い。

また栗熊低地を挟んで南方の高見峰山麓には小型前方後円墳を含む石塚山墳墓群・平尾墳墓群や、定連池東丘古墳群・畦田古墳群・休場池東丘古墳群・原竜王山古墳群などの複数の小規模墳墓・古墳群が分布する。これらの形成は古墳時代前期を中心とし、定連遺跡、

平尾墳墓群のように始点が弥生後期に遡るものを含む。現時点では横山山塊の墳墓群より形成開始が早いようであるが、やはり中期後半以降には継続しないようだ。

中期後半～後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊・大高見峰北麓では希薄となる。羽床盆地では段丘縁辺部に円墳が群集し、その中には津頭東・津頭西・末則古墳などの規模・装備の点で他を圧倒するものも認められる。また最近になって３基の小型前方後円墳が確認されており、少なくとも内一基はこの時期に位置づけられる可能性が高い。津頭東古墳の築造が前期に遡るものの、大多数は中期後半から後期前半の所産となる。同様に岡田台地でもその時期に車塚古墳を盟主とする万塚古墳群が形成さ



1．快天山古墳　2．薬師山古墳　3．住吉神社山頂古墳　4．横山経塚古墳群　5．横峰古墳群
6．奥川内古墳群　7．陣の丸古墳群　8．地神山古墳群　9．城山古墳群　10．津頭西古墳
11．津頭東古墳　12．石塚山古墳群　13．原竜王山古墳群　14．休場池東丘古墳群　15．定連遺跡
16．定連池東丘古墳群　17．平尾墳墓群　18．岡田万塚古墳群

第１図　快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓（Ｓ＝1/50000）

れる。

後期後半段階には、宇閇神社古墳などの横穴式石室墳が再び大高見峰北麓に築かれるが、大規模な群集は認められない。

いずれにしても快天山古墳に匹敵する傑出した規模の墳墓は、その前後には認められない。また、快天山古墳の築造時期に小型前方後円墳の築造が停止し、以後も円墳が主体となる点は注意しておく必要があるだろう。

第３節　快天山古墳の現況

快天山古墳背後の丘陵一帯は１９７０年代に大規模な農地開発の対象となり、その影響は残念ながら本墳前方部まで及んでいる。この部分では尾根頂部が削平開墾されると共に農道整備と養鶏場の設置で前方部の中程が切断され、この折に前方部に接した箱式石棺群も滅失したとされる。農道西側の前方部側面は厚い建設残土の堆積に覆われていたが、町教育委員会によって除去された。

また、近年では丘陵西裾に新興住宅地が広がっており、墳丘から旧地形が残っている区域に隣接するところまで開発が進んでいる。しかし、墳頂には本古墳の名称の謂れとなった旧円福寺の僧侶快天以下の墓石が並び、後円部南斜面に住吉神社御旅所が設けられていることもあって、後円部からくびれ部は戦前から戦後の一時期にかけて畑地化されたものの、現在は山林に覆われ、前方部ほどの極端な改変を蒙っていない。

後円部東から南斜面の広い範囲は墳頂平坦面に接する部分まで、かつて開墾されて細かな畝の痕跡が整然と並ぶ。また墳丘裾付近は連続的に切り込まれ、やはり畑地を造成した形跡が残る。西斜面では同様の痕跡は顕著ではないが、上半部の随所に土砂崩落痕跡が認められ、畑地化していない分墳丘の自然崩壊が目につく。後円部斜面のこうした状況に比べ、東西両側面ともにくびれ部から前方部南半部は最も本来的な形状が保たれているようだ。

第３章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

快天山古墳は、１９５０（昭和２５）年に香川県史跡名勝天然記念物調査委員会、翌１９５１（昭和２６）年に京都大学文学部考古学研究室によってそれぞれ発掘調査が実施されている。

それらの調査は、当時の中学生が後円部墳頂に露出する石棺の蓋を確認したことに起因するが、その調査は短期間に実施されたこともあり、墳頂の埋葬施設付近の発掘にとどまっていた。

調査成果としては、非常に良く１００ｍ程の巨大な前方後円墳で古墳時代前期のものとしては四国最大規模であることが確認された。また、後円部頂部の埋葬施設には刳抜式割竹形石棺が３基計画的に配置されており、そのそれぞれから銅鏡や石釧、鉄製品が出土しており当時の相当な権力者が被葬されていることが想定された。更に、当時の研究によってこれらの石棺は、国内最古の部類に属することも明らかになり、この地域のものとしては様々な面で突出していることから各方面から注目を浴びた。

その後、快天山古墳には半世紀ほど何も手をつけられない状態で時だけが過ぎていたが、時代も平成になりバブルが弾けたころから文化財愛護意識が住民の間で高まってきた。特に、平成７年度には町道西行末本村線改良事業に伴う行末西遺跡発掘調査や綾歌町総合会館アイレックスの建設事業に伴う佐古川遺跡発掘調査と、本町で初めて大規模な発掘調査が行われたことや、国道３２号バイパス建設事業に伴う佐古川・窪田遺跡発掘調査でそれぞれ大きな成果があげられたことで住民の意識を大きく動かしたものと考えられる。

そういう背景の中、栗熊東住吉地区の住民たちの中で地元に所在する快天山古墳の保存についての関心が特に高まっていた。その結果として、地元から申請のあった町史跡への指定について綾歌町教育委員では平成１１年２月５日付けで認定した。

住民たちの声は、町指定になったことだけでは収まらず、この貴重な遺跡の適切な整備・活用についての要望と化してきた。行政側としても快天山古墳の保存整備について考えてはいたが、経費面での不安を抱えていたため具体化にまでは至ってなかった。しかし、これらの地域住民の熱望に応えるべく平成１２年度ごろから、快天山古墳の国史跡指定に向けた積極的な検討に入った。

まず、香川県教育委員会事務局文化行政課担当諸氏の指導を仰ぎ、快天山古墳調査検討委員会を編成した。構成は、香川大学経済学部教授丹羽佑一氏、徳島文理大学文学部文化財学科助教授大久保徹也氏、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター次長渡部明夫氏、香川県教育委員会事務局高校教育課指導主事國木健司氏、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化財情報研究室長小林謙一氏、綾歌町文化財保護委員会委員長内藤敏典氏の６名であった。内藤氏については、途中、他界されたため、以後は５名の委員で検討をいただいた。

調査については、昭和の調査時に簡易的な墳丘測量は成されているものの、それをその

まま使用するには、地形が改変を受けていたり、測量当時と状況が変わってしまっており無理が生じていたので、新たに地形測量を実施したうえで以後の調査方法について考えるということに結論づいた。

なお、当時は本町の調査体制が整っていなかったため、快天山古墳調査検討委員会委員でもある大久保氏に協力をいただくことにより調査を進めることが可能となった。

その後、１３年度早期に実施した測量成果に基づき調査方法を検討した。以前の調査は、埋葬施設を主に実施したため墳丘規模を特定するようなものではなかった。地表調査で円筒埴輪が確認できていたことからその辺りで墳端を推定していたもので、発掘による施設等の確認ができていたものではなかった。そこで、まず墳端を確認し墳丘規模を特定する目的で、推定される墳端付近に試掘トレンチを設定していくことにした。その調査結果を検討しながら次期の調査計画を立てていくという進め方であった。

尚、平成１４年度には綾歌町教育委員会に職員を配置し体制を整えた上で、大久保氏の協力を頂きながらではあるが調査に取り組んだ。

第２節　調査の経過

１．平成１３年度

昭和の調査以降、初めて快天山古墳の本体に手をつけるということ、遺跡の内容として非常に貴重なものであるということ、以前の調査以降で畑地への転換等による改変を受けていることがあげられることから、まず４～５月に現況の地形測量調査を実施した。なお、調査地内には測量基準点を数箇所設置した。

測量は、平板測量方式で周辺地形を重視しながら快天山古墳の周囲約南北１５０ｍ×東西１００ｍの範囲で実施した。縮尺は1／１００、コンターラインは２５㎝間隔とした。その成果を十分に検討し、７～８月に第一次墳丘確認調査を実施した。この調査では、後円部南側・西側、前方部西側、北側の４地点に１～６トレンチを設定した。各トレンチは原則として幅１ｍでの設定であり、調査面積は約６０㎡であった。

２．平成１４年度

前年度に実施した前方部前端の再確認を目的とした小規模な第二次調査を４月に実施した。７～１０トレンチの計４本を設定し、調査面積は２５㎡であった。

続いて５月に第三次調査として、夏に計画していた本格的な調査に備えて予備的に前方部東側面に１１トレンチを設定した。調査面積は１６．８㎡であった。

７～８月には、前方部からくびれ部東側面にかけて墳丘構造を試みるための大規模な第四次調査を実施した。１１トレンチの再掘削及び若干の拡張、１２～１３トレンチの設定であり調査面積は４６．５㎡であった。

この調査では、段築構造について確認できる遺構の検出等まとまった成果が得られたので、調査途中で現地説明会を実施した。３５０人ほどの参加者があり盛況であった。

年を明けて２～３月の第五次調査では、後円部墳丘西斜面に移動して昨年度に設定していた３トレンチを大規模に拡張した。また、前方部西側面に盛り付けられていた建設残土

を除去したことによって１４トレンチを新たに設定した。

３．平成１５年度

平成１４年度の調査で最低限の確認調査はできたものと考えていたが、快天山古墳調査検討委員会で検討した結果、少し足りないとのご意見を頂き、改めて調査区を設けることとした。

夏に２班体制で取り組むこととした。まず１班は、両くびれ部の確認を試みるための１５～１６トレンチと後円部の上半部の構造を確認するための１７トレンチ調査区とし、７～８月に第七次調査を実施し、調査面積は５１㎡であった。

もう１班は、後円部墳端の再確認と外表施設の確認をするためのもので、６～８月にかけて、後円部南半部東西斜面に１８～２０トレンチを設定する第六次調査を実施した。調査面積は２８．４㎡であった。

また、調査最終段階ごろに現地説明会を開催し、２００名近くの方々が参集した。

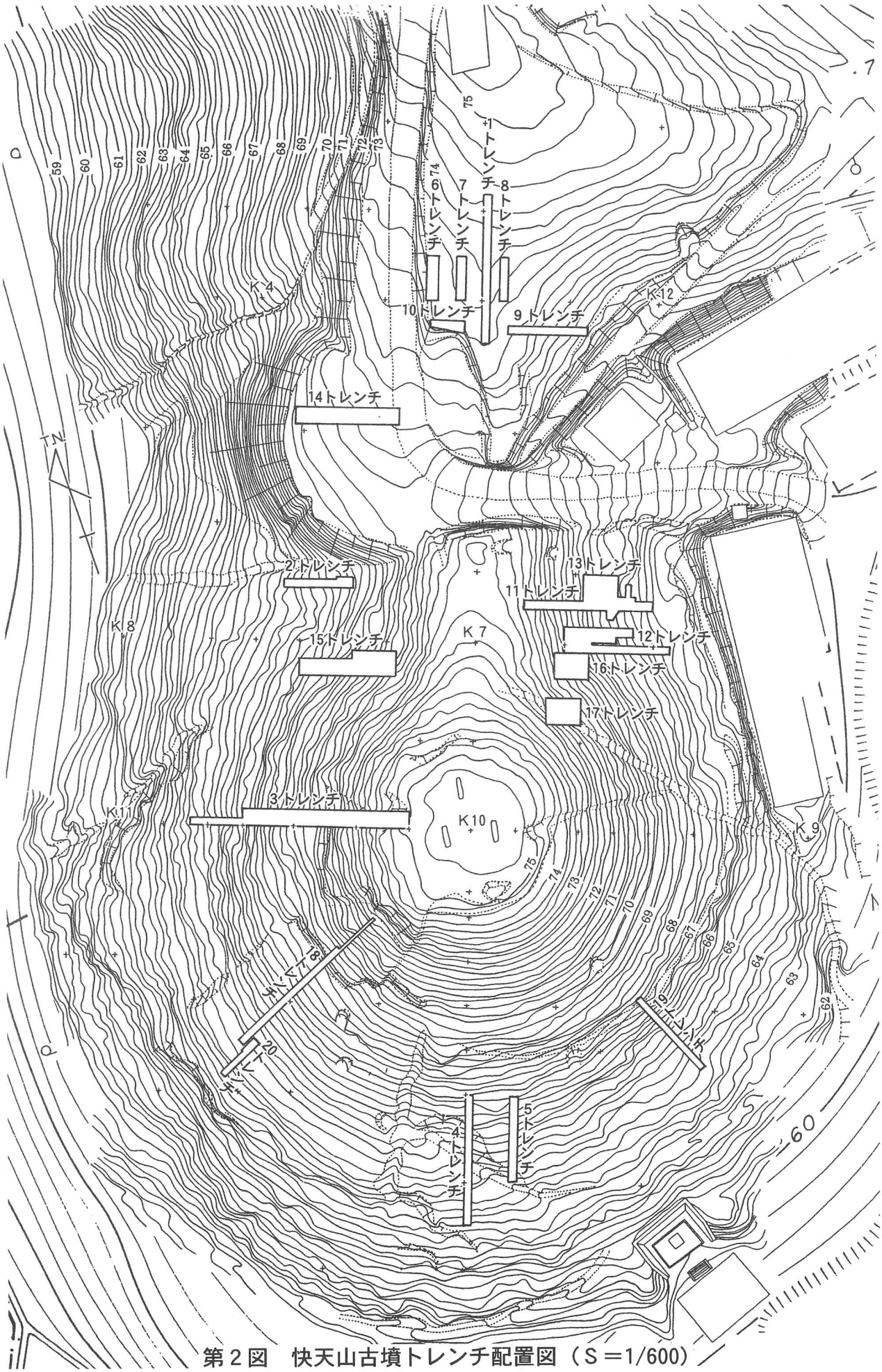
４．総括

平成１３年度から平成１５年度までの３ヵ年計画で、墳丘規模及び構造を確認するための調査を、地形測量を含めると８回に渡り実施してきた。

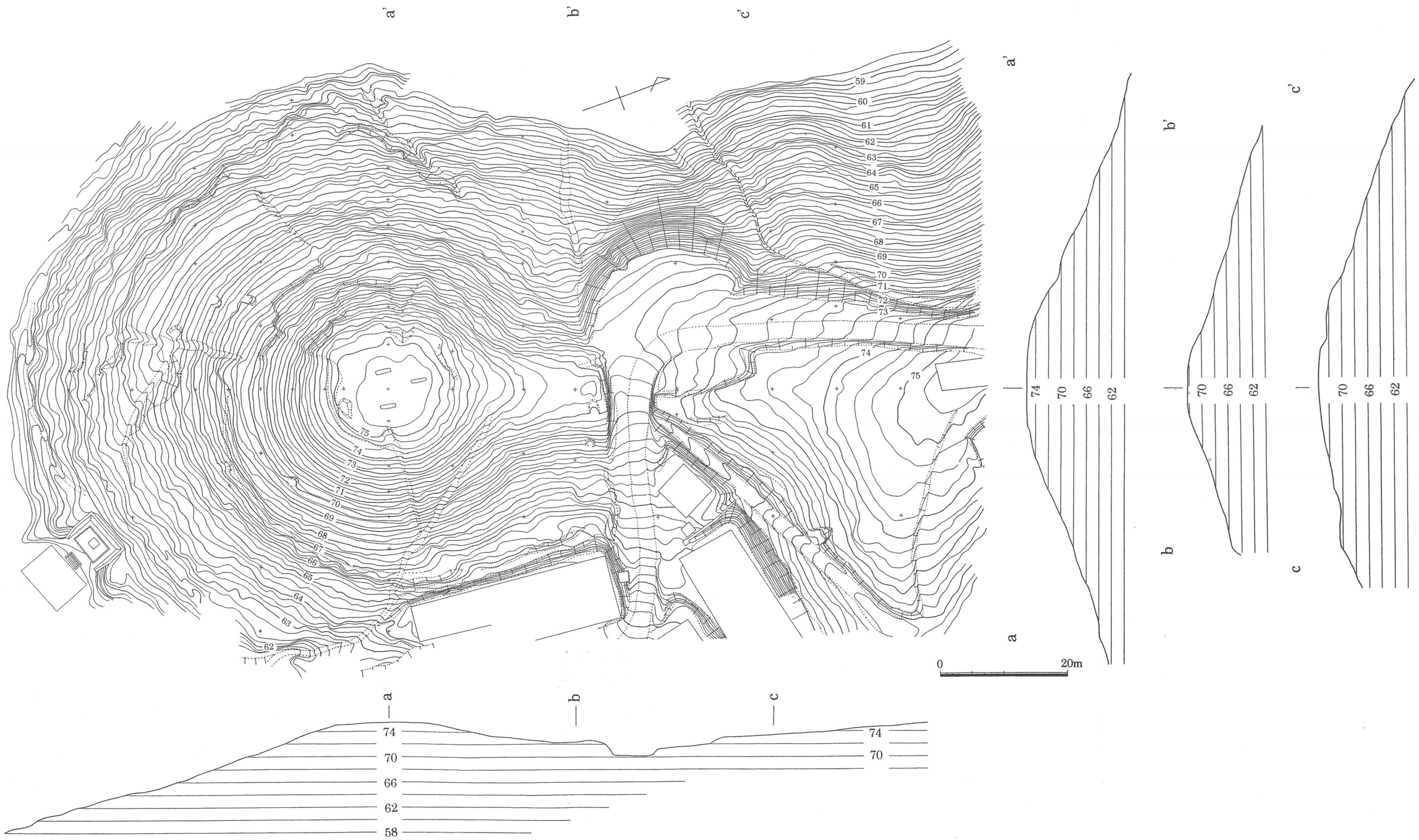
設定したトレンチは、２０本にも及び拡張を含めると更に数は増加する。

結果的にみると、これだけの調査区を設けて調査を実施してきたにも関わらず、期待していただけのデータは取れなかったと思うが、最低限のことは成しえたと思う。

尚、年度毎およびトレンチ毎の調査内容については、第４～６章で報告する。



第２図　快天山古墳トレンチ配置図（Ｓ＝1/600）



第３図　快天山古墳墳丘測量図（Ｓ＝1/600）

第４章　平成１３年度快天山古墳確認調査概要

調査期間　　平成１３年４月２日～８月１０日
調査面積　　６０㎡

第１節　調査の概要

第一次確認調査では当所４本の調査トレンチを設定したが、後世の改変によって充分な目的を達せなかった部分についてさらに２本を追加した。設定したトレンチは次のとおりである。(配置は第２図参照)

第１トレンチ　前方部北　幅１ｍ×延長１７ｍ　前端掘り割り残部（？）
第２トレンチ　前方部西　幅１～１．５ｍ×延長７ｍ　葺石下端および墳端傾斜変換点
第３トレンチ　後円部西　幅１ｍ×延長６ｍ　盛土層末端　墳端傾斜変換点
第４トレンチ　後円部南　幅１ｍ×延長１５ｍ　墳端傾斜変換点
第５トレンチ　後円部南　幅１ｍ×延長１０ｍ
第６トレンチ　前方部北　幅１．２～１．５ｍ×延長５ｍ

以下、各トレンチの調査所見について述べる。

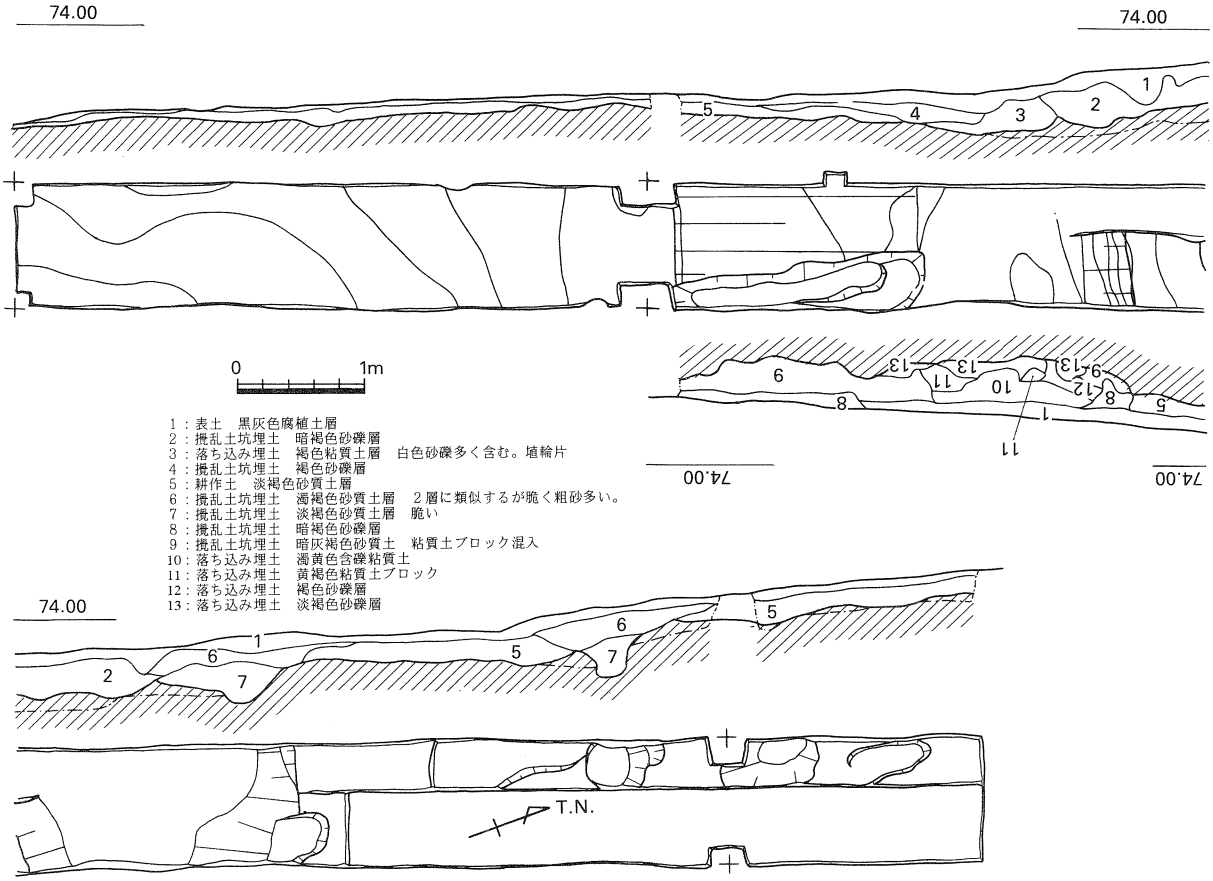
第２節　各トレンチの概要

１．第１トレンチ（第３図）

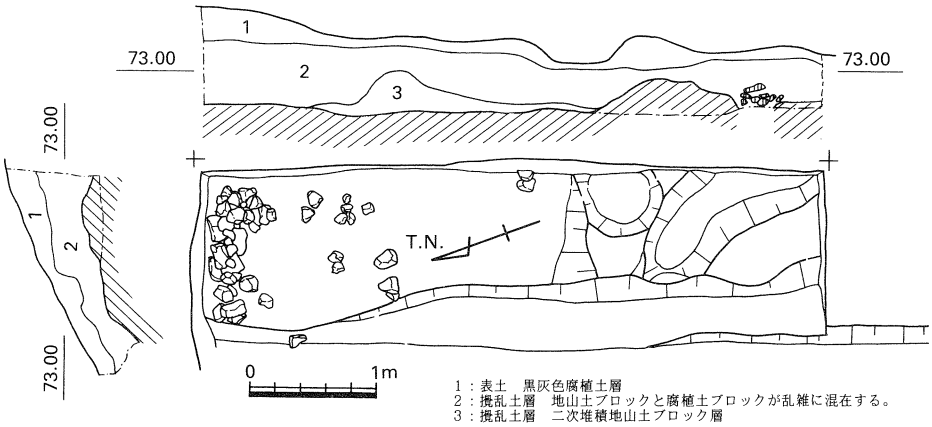
前方部前端の確認を目的として、主軸ライン上で№３杭北２ｍからＫ３杭南５ｍまで延長１７ｍのトレンチを設定した。Ｋ３杭以南では表土直下で風化の進まない花崗岩バイラン土層が検出された。この部分では地山面は、地勢に応じてごくわずかながら南に下がる。ほぼＫ３杭を境にそれより以北では大小様々な不定形な攪乱壙が至る所に見出される。それらの多くではビニール断片なども見出されることなどからごく近年の所産と推測される。特にＫ３杭北３ｍ以内ではそれが甚だしくほとんど旧状をとどめないことが判明したので、この部分では部分的な掘り下げにとどめた。このような攪乱と重複しつつ、Ｋ３杭を南端として幅３．８ｍで深さ２０㎝ほどのきわめて浅い地山の落ち込みをかろうじて確認することができた。多数の攪乱壙と重なり合い、詳細な形状の復元は困難であるが、この落ち込み部あるいはこれに接した攪乱土壙に限って、埴輪片及び葺石様の石材を相当量包含することも留意して、断定しがたいもののこの部分が前方部前端を反映する可能性を想定しておきたい。なお落ち込み最深部は後円部中心点の北６２ｍ、標高７３．１ｍとなる。

２．第６トレンチ（第４図）

第１トレンチで検出した落ち込み部分の延長を確認するためにＫ３杭の西５ｍを起点に北に延長５ｍで第６トレンチを設定した。前方部西半部を削って南北に延びる農道の法面部分に相当する。しかしながらこの部分では農道設置時の削平と残土の再堆積が著しく期待した落ち込みの連続は確認できなかった。ただし本トレンチにおいても再堆積土中に小



第４図　第１トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60）

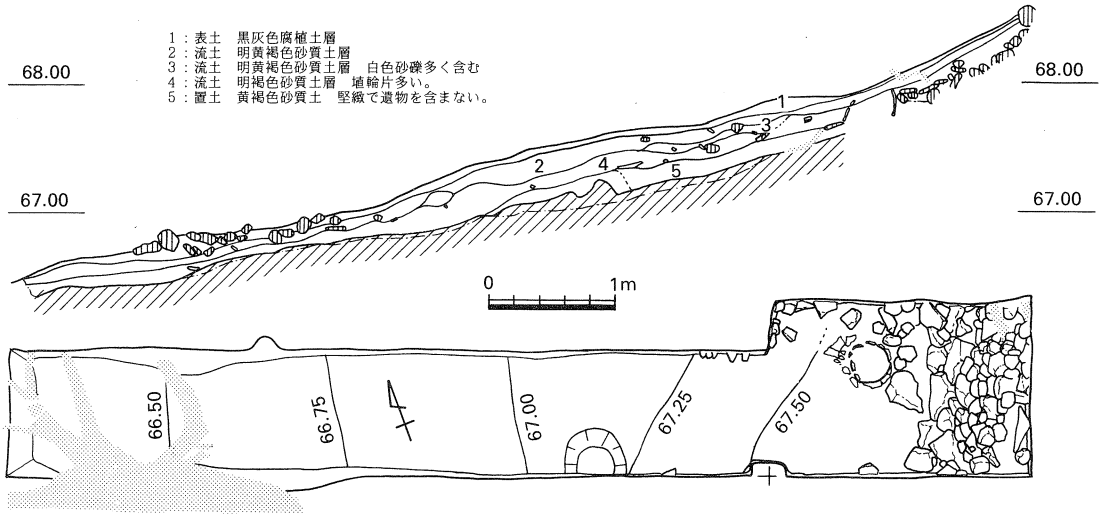


第５図　第６トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60）

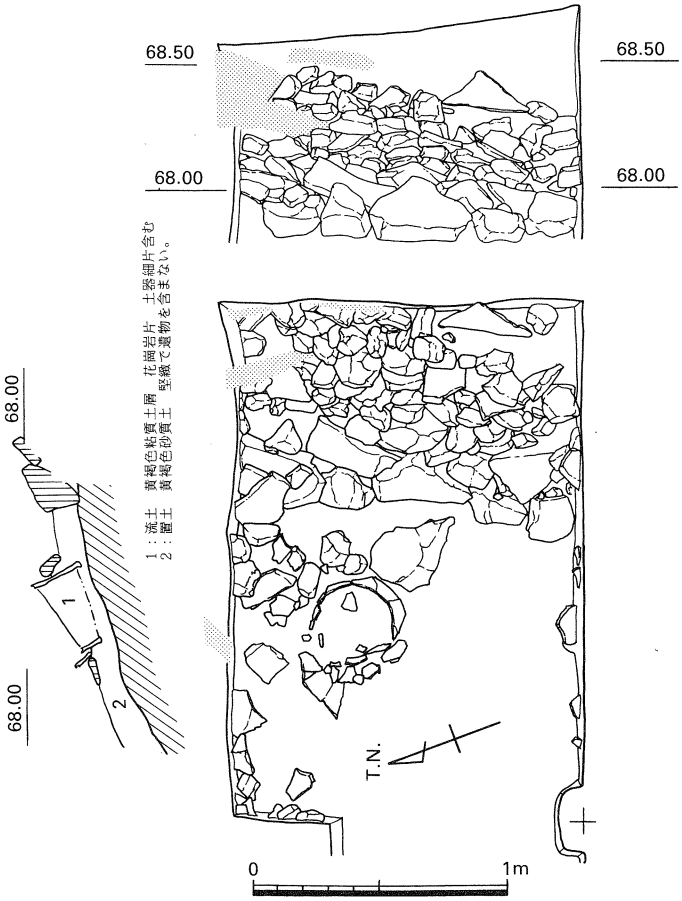
片ではあるが円筒埴輪片と拳大～小児頭大の葺石様石材多数が含まれていた。

３．第２トレンチ（第６・７図）

前方部西側面墳裾を確認するためにＫ７－Ｋ８ラインの北６ｍで主軸ラインの西１４ｍを起点に延長７ｍで設定した東西方向トレンチである。前回調査ではこの付近で円筒埴輪列を検出している。



第６図　第２トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60）



第７図　第２トレンチ　葺石平・立面図（Ｓ＝1/30）

本トレンチでは葺石列とその外方に樹立された円筒埴輪１基、さらに下方で地山傾斜変換点を確認した。葺石はトレンチ東端で、約０．８ｍ幅で検出した。全体として約２５°前後の勾配をもち、礫を斜めに差し込むように並べている。下端には幅４０cm前後の大形の石材を一列に並べるが、それより上方は拳大～小児頭大かそれよりもやや大形の礫を用いている。またトレンチ中央部で一列、縦目地状の整った配列を見ることができる。使用石材種は一様ではない。花崗岩もしくは凝灰岩質の亜円礫が多用されるが、それらに混じって安山岩板石も散見される。葺石列の下端は墳丘主軸から１４．８ｍ、標高６７．８～６７．９ｍとなる。

円筒埴輪は葺石下端列から３０cmほど離れた位置で検出した。底径４０cm強の大型品で底部はほぼ残存するが最下段突帯以上を失っている。トレンチ幅から考慮して少なくとも１ｍ以上の間隔で据えられたものとみられる。検出した埴輪基底部は葺石外方の２０°弱の傾斜を持つ地山面にそのまま置かれており、掘り方は検出できな

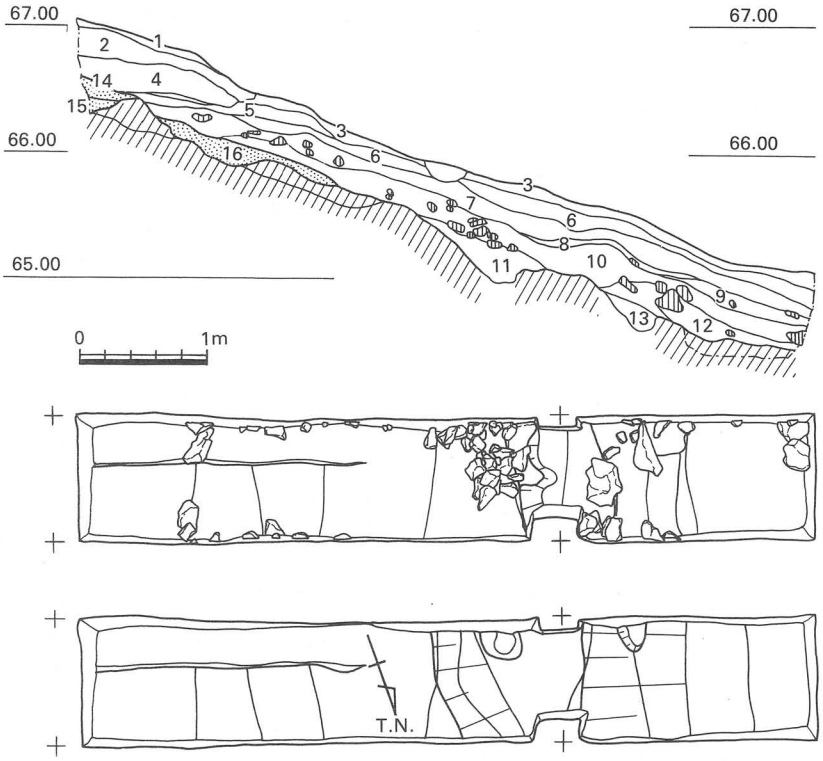
い。この部分には広がる層厚２０cm弱の置き土（第６図－５層）に埋め込まれている。なお埴輪周辺では置き土上面に掌大の板状安山岩が多く検出された。樹立埴輪の根固めの可能性がある。

この埴輪基底部を埋め込む置き土は葺石設置後、その下端を覆うように最大層厚２０cmで３．２mの範囲に広がる。埴輪周辺を除き表面に礫を敷き詰めているわけではない。本層末端付近で地山傾斜の変化を読みとることができる。その位置は墳丘主軸から１８．２m標高６７mとなる。なお第２トレンチでは比較的多量の埴輪片を検出したが、円筒埴輪と共に二重口縁形態の壺口縁部片が認められる。出土状況から円筒埴輪同様に墳丘裾部に配置された可能性が高い。

４．第３トレンチ（第８図）

後円部西側墳裾を追求すべく後円部横断ライン上の３２杭を起点に延長６m、幅１mで設定した。既に述べたように後円部西斜面の墳端位置は地表面観察で明示することは難しい。この部分の墳丘上半部の随所で土砂崩落が生じており、この部分の墳裾は二次堆積土に厚く覆われることが推測された。

本トレンチでは盛土端部と推測される堆積層、墳丘端部の可能性がある地山傾斜変換点および原位置からずれ落ちたと判断される葺石群などを確認した。以上は厚さ４０cm～５０cmの二次堆積層を除去し確認した。二次堆積層には全体に埴輪片・葺石様石材を包含するが、下位ほどに大形片がより多く含まれる傾向があった。



1：表土　黒灰色腐植土層
2：流土　黄褐色砂質土層
3：流土　淡黄褐色砂質土層　非常に脆い
4：流土　明黄褐色砂質土層　ラミナ状薄層の集積
5：流土　黄褐色砂質土層
6：流土　褐色砂質土層　砂礫多く含む
7：流土　暗褐色砂質土層
8：流土　暗黄褐色砂質土層　白色砂礫多く含む
9：流土　暗黄褐色砂質土層　白色砂礫少ない
10：流土　暗黄褐色砂質土層　白色砂礫を含まない。
11：流土　樹根撹乱層
12：流土　暗黄褐色砂質土層　粗粒の白色砂礫多く含む。
13：流土　樹根撹乱層
14：盛土　暗黄褐色砂質土層　かなり堅緻
15：盛土　褐色砂質土層　砂礫含み堅緻
16：盛土　褐色粘質土　白色砂礫を多く含み堅緻

第８図　第３トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60）

トレンチ東端から２mの範囲では地山直上部分に最大層厚３０cmの堅緻な堆積層（１４～１６層）を確認した。その一部を裁ち割ったが埴輪片その他はいっさい包含していなかった。

またその表層に葺石様の石材が散発的に噛み込んでいることを確認した。これらの点と層序から同層を墳丘盛土と判断した。盛土末端のレベルは標高６５．７

m、後円部中心点(Ｋ１０杭）から２８ｍとなる。

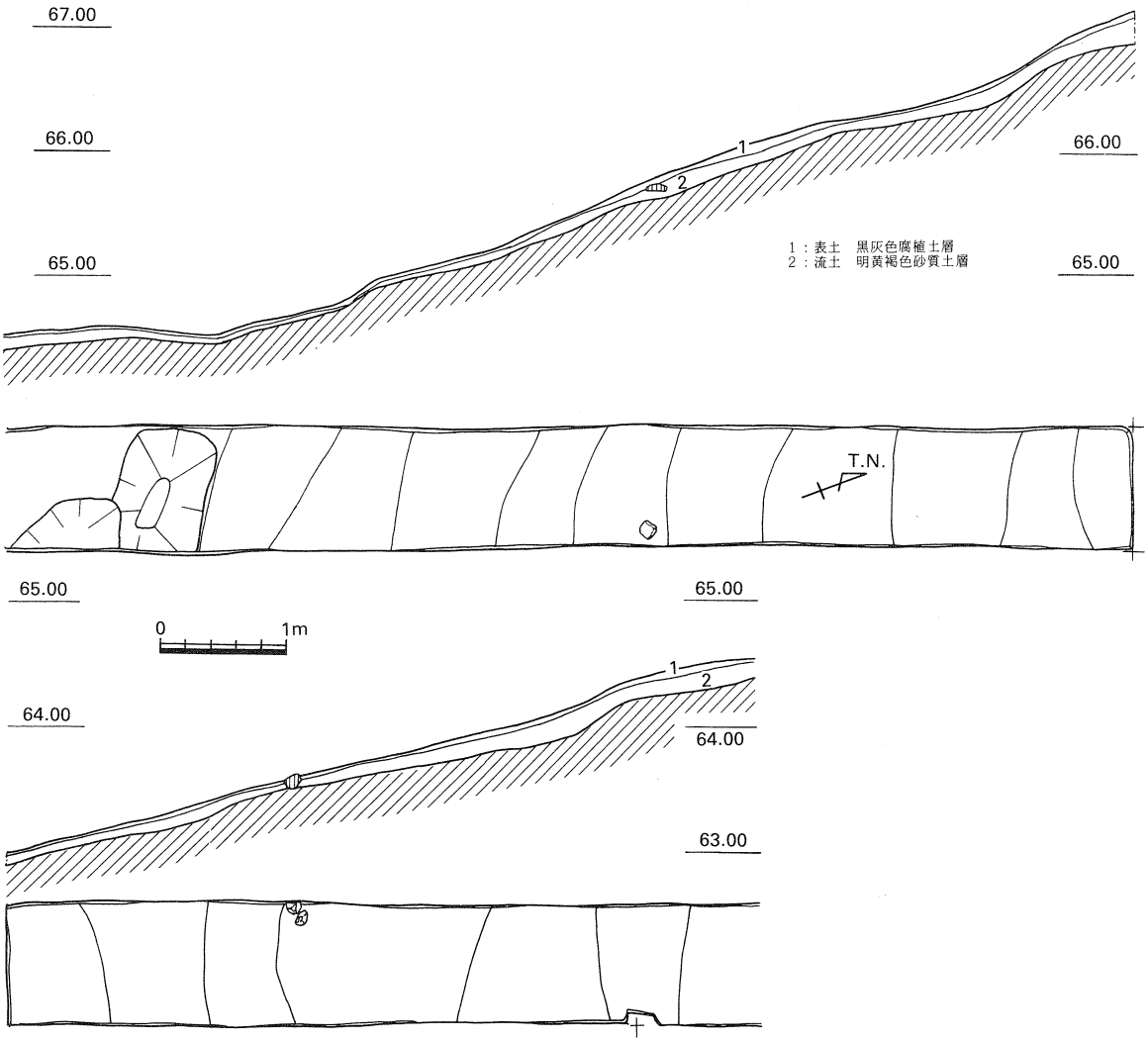
地山上面は上記の盛土部分を含めて、樹痕の影響と思われる不規則な凹凸が多く、トレンチ幅の調査で墳丘構築時の成形痕跡を確定することは容易ではなかったが、東端から３．２ｍの地点にやや明瞭な傾斜変換点を指摘することができる。その位置は標高６５ｍ、後円部中心点から２９．２ｍとなる。

トレンチ西半部で図示したように葺石様石材の集積を認めた。これらはいずれも地山面より５～１０cm程度浮いており下位より埴輪細片も検出しているので、原位置ではあり得ない。しかし集積部分下端に人頭大の大形礫が集中するなど、第２トレンチで確認した本来的な葺石配列の様態をある程度とどめている様に見受けられる。さほど隔たらない位置から地滑り状に葺石がずれ落ちたものと推測する。

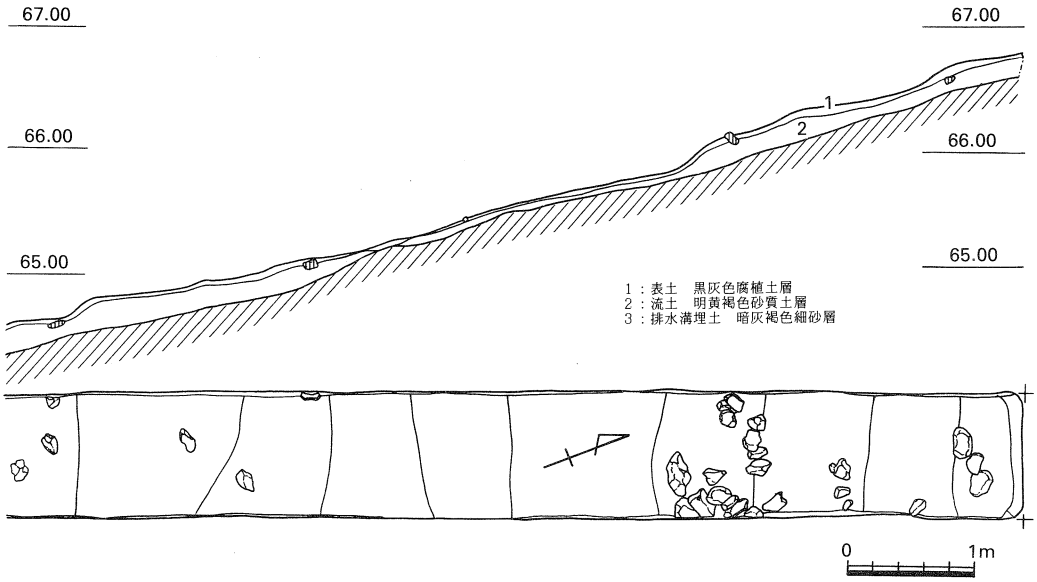
またトレンチ東端から２ｍの地点で盛土末端部の上面にほぼ相当する位置より、壺形埴輪底部片を検出した。この地点に据えた確証は得られなかったが、埴輪や葺石の配置を検討する上で注意する必要がある。

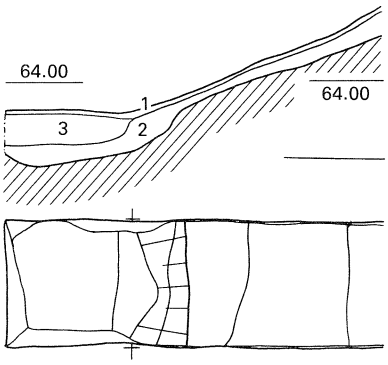
５．第４トレンチ（第９図）

後円部南斜面は全体が開墾され、墳頂部まで畝が連続しており、本来の墳丘表層部分は



第９図　第４トレンチ　平・断面図（Ｓ＝1/60）





第１０図　第5トレンチ　平・断面図（S＝1/60）

残存しない可能性が予測されたが、地山成形痕跡などの確認を目的として調査をおこなった。本トレンチは墳丘主軸上の４７杭を起点に延長１５ｍで設定した。

表層の薄い腐植土層を除去すると、若干の流入土を介してすぐに地山面が現れた。およそ１～１．５m間隔で地山面が規則的に階段状に整形された開墾形跡がほぼ全体にわたって見出され、当初の予測どおり葺石その他の本来的な墳丘外表設備は遺存していなかった。

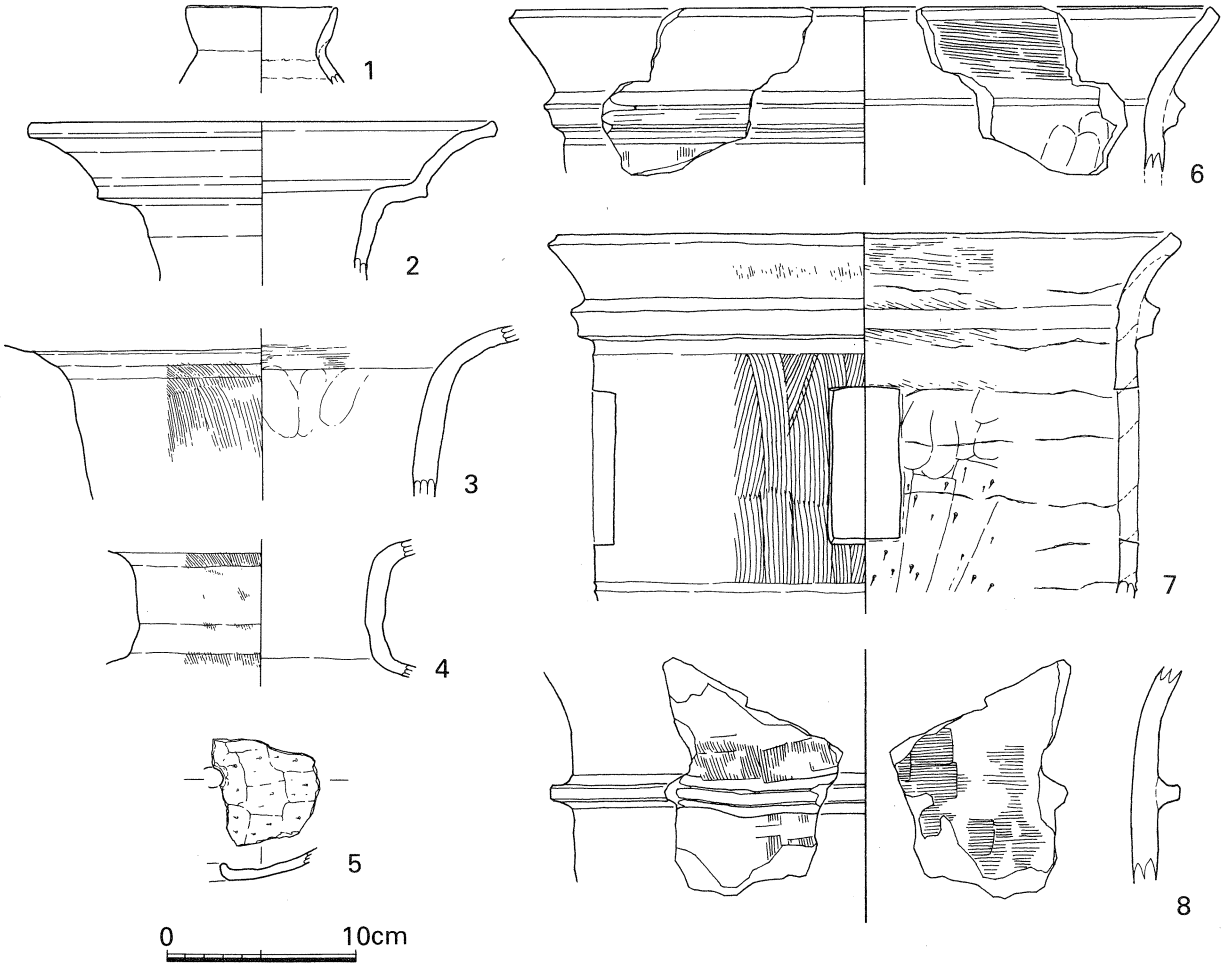
しかしながらトレンチ中程で上記の開墾段とは識別可能な、比較的明瞭な傾斜変換点を検出した。もとより全体の改変状況を考慮すれば厳密な墳端とは言い難いが、それを反映する可能性はさせるものである。変換点北側の地山面の勾配はほぼ２０°前後となる。また変換点位置は後円部中心点（Ｋ１０杭）から３７．２m標高６４．５m付近である。

なお本トレンチではごく僅かな埴輪細片しか出土していない。

６．第5トレンチ（第１０図）

第４トレンチの所見を補足すべく、それと５mの間隔で並行する延長１０mの第５トレンチを設定した。この部分では後円部南斜面としては珍しく地表面に葺石様石材が散見されたこともあって、葺石の部分的な遺存をも期待した。

第４トレンチ同様に表層直下の浅い位置で地山面が検出された。予想以上に開墾時の改変が甚だしく、全体的に均されており本来的な墳丘外表設備は全て失われていた。第４トレンチで検出した墳端を反映すると推測した傾斜変換点も本トレンチでは見出すことはできなかった。また葺石様の石材はトレンチ北半部で一定量見出されたが、いずれも地山面から浮いており、二次堆積と推測すべき内容であった。本トレンチでもごく僅かな埴輪細片以外の出土遺物はなかった。



第１１図　出土遺物実測図１（Ｓ＝1/4）

第３節　出土遺物（第１１・１２図）

第１１図－１は小型丸底土器（第２トレンチ）。明橙色で砂粒は多くない。短い口縁部はわずかに内湾して開きが弱い。口頸部横ナデ調整。体部内面には粘土帯接合痕をとどめる。２～５は壺形埴輪である。２は第２トレンチ出土の二重口縁部片。外面に赤色顔料を塗布する。口縁立ち上がり部は外反して長く引き延ばされている。端部は小さく肥厚する。頸部はやや外傾し中程が鈍く膨らむ。内外面全体に横ナデ調整が及ぶ。二重口縁壺としてはやや後出的な形態であろう。３は外傾する頸部から鈍く屈曲して口縁部は強く開く形体となりそうだ。単口縁壺でもよいだろう。４は短く直立する頸部から強く屈曲して口縁部は大きく開き赤色顔料の塗布を認める。外面縦ハケ調整の後に頸部を強く横ナデする。以上のように壺形埴輪口頸部では多様な形体が含まれている。５は第３トレンチ出土の底部片。接合未了のため焼成前穿孔部片のみ掲載した。底部中央に外側から径１０mm前後の小円孔を穿つ。前期前半段階に本地域で壺形埴輪等の墳墓供献土器に多用される穿孔形態である。鶴尾神社４号墳・猫塚古墳で典型的に観察される方式で、本古墳壺形埴輪にも踏襲されている点は非常に興味深い。なお壺形埴輪の体部片では実用的な中形壺の形態と調整手法がそのまま観察され、製作手法上の省略はいささかも認められない。

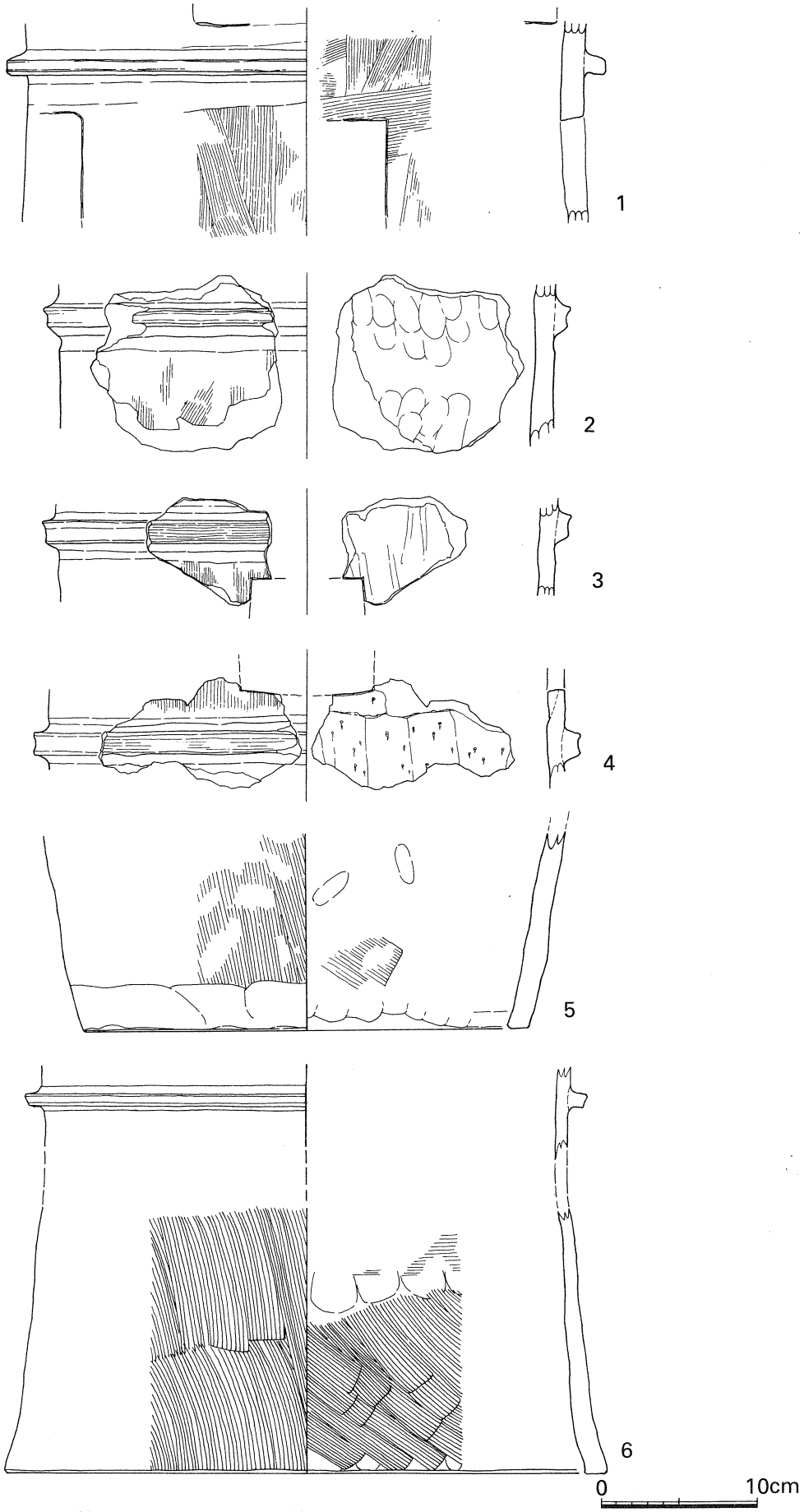
６～８は円筒埴輪口縁部片である。いずれも第２トレンチ出土。６・７ではごく短く外

反する口縁部が特徴である。また７では４方１段の長方形透かし孔がみられる。８は口縁部が多少長く外反も弱いが、中間段に比べ口縁部は短い。

第１２図１～４は円筒埴輪中位部片である。１では各段で互い違いに５方の長方形透かし孔が配されている。３・４も配置関係は不詳ながらやはり長方形透かしが観察できる。５・６は底部片である。いずれも自重で底部付近が多少潰れるが、底部調査はおこなっていない。６は第２トレンチで樹立状態で検出した資料である。最下段突帯の高さは一応の目安として図上推定したものである。

いずれも小片のため円筒埴輪の段数などは明らかにしにくいが、底径は３０cm強とほぼ揃っている。また詳細は実測図に譲るが、明らかに突帯形状や内外面の調整手法には一定のバリエイションが認められる。色調や砂粒混和状況も一様ではないが、それらと形態上のバリエイションとの対応関係についてはまだ充分な検討が行えていない。

以上・今次調査で採集した代表的な遺物を図示・説明した。円筒埴輪・壺形埴輪と少数の土師器小型器種が存在する。朝顔形円筒埴輪や形象埴輪、更に前回調査で採集されたような小型土製品は確認できていない。現時点で確認できるこのような組成は石清尾山姫塚古墳・同石船古墳と基本的に共通しそうだ。また円筒埴輪の形状、特に短口縁部形態や多方透し孔配置は、形象埴輪を伴う段階の岩崎山４号墳、中間西井坪遺跡、今岡古墳よりも古い様相といえるだろう。



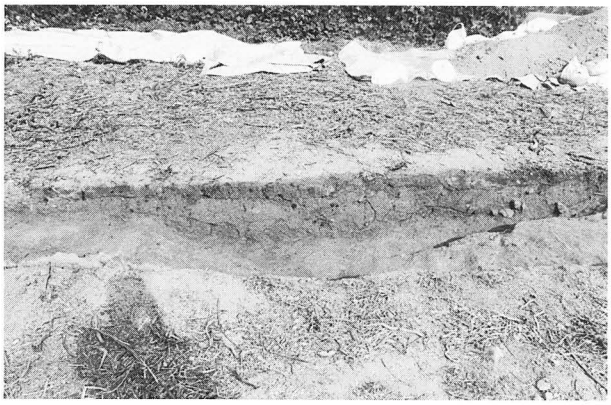
第１２図　出土遺物実測図２（Ｓ＝1/4）

図版１　第５トレンチ後円部南（南から）

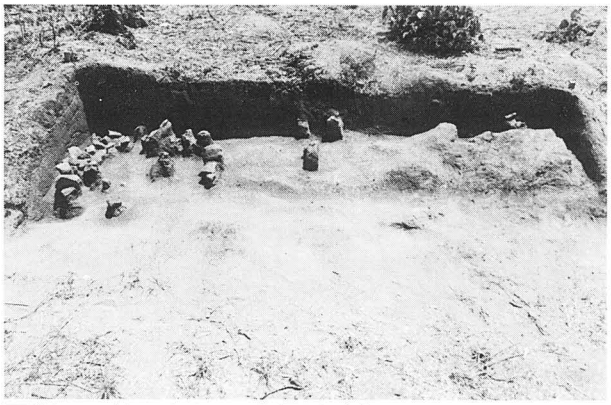
図版２　第３トレンチ：後円部西（西から）

写真１

図版３　第１トレンチ落ち込み部埴輪出土状態(北から)


図版４　第１トレンチ落ち込み(西から)

図版５　第１トレンチ落ち込み(北から)


図版６　第６トレンチ(西から)

図版７　第２トレンチ葺石(西から)

図版８　第２トレンチ埴輪樹立状態(南から)

図版９　第２トレンチ葺石と埴輪(南から)

図版10　第４トレンチ傾斜交換点(東から)

写真２

第５章　平成１４年度快天山古墳確認調査概要

調査期間　　平成１４年４月２日～平成１５年３月２５日
調査面積　　１４２㎡

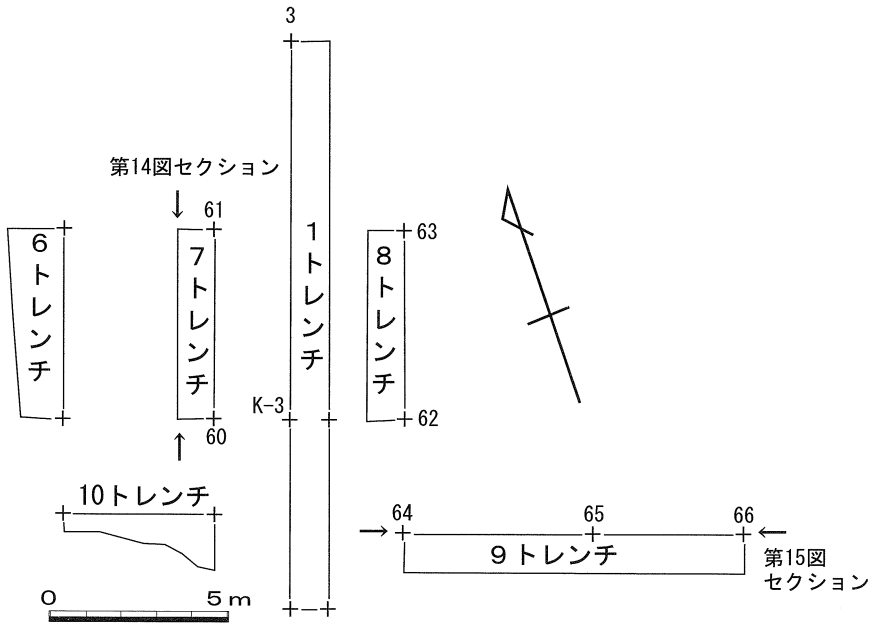
第１節　各調査区の概要

１．７トレンチ：前方部前端　（第１３・１４図）

設定の意図：先年の調査で前方部前端ラインを確認するために第１トレンチと第６トレンチを設定した。これらのトレンチから墳端位置について一定の推測をおこなったが、攪乱が甚だしく確証を得るには至らなかった。そのため前端ラインの再確認を目的として設定した調査区である。

設定位置：昨夏に設定した墳丘主軸上の１トレンチと並行して、西側で農道に接する６トレンチの中間、Ｋ３杭西３ｍを南西隅とする南北延長５ｍ、幅１ｍのトレンチである。

成果：前方部前端を画すると見られる、主軸に直交して東西に伸びる浅い落ち込みを検出した。落ち込みは幅３．４ｍ深さ０．４ｍを測り、底面の標高は７３．１ｍ前後となる。落ち込みの南肩はトレンチ南端から１．２ｍに位置し、ほぼ平坦な底面は幅２．４ｍ程と

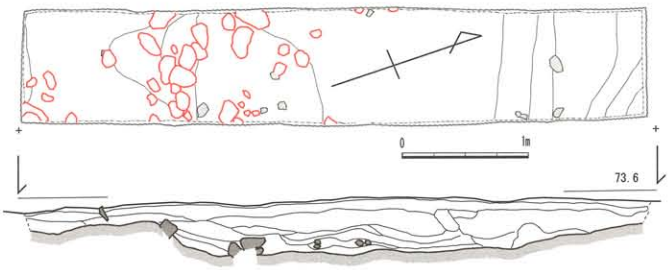


第１３図　前方部前面調査区配置図

なる。落ち込みの北肩に比べ、南肩つまり墳丘側の勾配が僅かにきつい。南肩から底面にかけて地山面直上に暗褐色～黒褐色のシルト・細砂が堆積し、北に向けて次第に薄くなり落ち込み中央付近で途切れる。同層が広がるおよそ幅１．５ｍ程の範囲、とくにその南肩寄りでは掌大～小児頭大の亜円礫が比較的まとまってみられ、その間に埴輪片も多いが、

須恵器などより新しい時期の遺物は含まない。こうした点から、この落ち込みは快天山古墳前方部前端を区画する溝と考える。南肩付近に包含される礫は葺石材であろうが、それらの間には明らかに埴輪片を噛み込んでおり、また規則的な配列も見出せないので、いずれも上方から転落したものと推測する。この理解が正しければ葺石は全面の区画溝基底まで葺き下ろしていないことになる。また原位置ではないがある程度の埴輪片が出土していることから前方部前端部分に埴輪列が巡る可能性は高いであろう。

さて、この区画溝が褐色砂などでほぼ埋没した後に中央から北半部にかけてあらためて幅１ｍ弱の東西方向の掘り込みが設けられ、この部分には須恵器などより新しい時期の遺物ごく少数が含まれる。1950 年調査時の平面図に記された前方部前面を横切る小径ないしはその前身の可能性がある。



第１４図　７トレンチ平・断面図（S=1/60）

出土した埴輪はいずれも円筒埴輪で大部分が細片化し全形を窺えるものはないが、破片各部の形状や製作技法などは快天山古墳他地点出土埴輪と異なるところはない。また壺型埴輪・土師器類と判断できる資料は本調査区では見出せない。

２．８トレンチ：前方部前端（第１３図）

設定の意図：７トレンチと同様に前方部前端ラインの追求を目的とする調査区である。

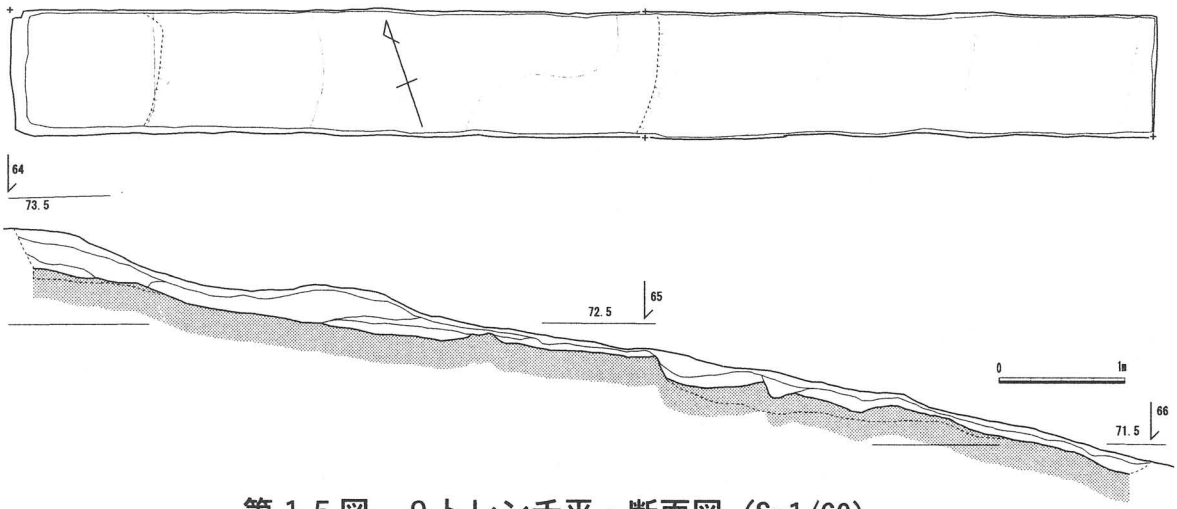
設定位置：昨夏に設定した墳丘主軸上の１トレンチと並行に、１ｍの間隔を空けて東側に設定した。これより東寄りでは地形的に緩やかに東に下り始めかつ畑地の造成痕跡が見て取れるので、墳丘前端線が既に消失している可能性が高いと考え、あえて１トレンチに近接した地点を選んだ。Ｋ３杭東２ｍを南西隅として南北延長５ｍ幅１ｍの調査区となる。

成果：昨年の１トレンチと同様に一面に攪乱が重複する。錯綜する攪乱部分の間に先行する浅い落ち込みが存在するようにも見えるが確定的ではない。トレンチ中央の幅２ｍ余りの範囲では、南北に比べ全体に地山面が不規則に窪む。この上部の堆積層の観察で断定することは難しいが、底面は凸凹が著しくこれ自体攪乱の累積である可能性は高い。しかしこの窪みでは周囲より多めに埴輪小片が出土していることは注意しておきたい。度重なる攪乱によって旧状の把握が困難であるが７トレンチから続く前端区画溝の残欠か、少なくともそれがこの地点まで連続することを間接的に反映する可能性がある。こうした状況も昨年度調査の１トレンチと全く同じである。なお本トレンチ中央部の攪乱もしくは区画溝残欠の可能性がある窪み底面は最深部でも標高７３．２ｍを測り、７トレンチ区画溝底面よりわずかに高い。この典も区画溝による前方部前面の遮断が、相当に簡略的であることを示唆するであろう。若干の埴輪片と破砕された葺石材が出土したが、形状を詳細に観察できる資料はない。

３．９トレンチ：前方部前面付近の東側面（第１３・１５図）

設定の意図：１・６～８トレンチで前方部前端ラインを確認したことを承けて、前端寄りの前方部側面遺存状況を確認することを目的とした。前方部西面は農道によって削平されるか残土を積み上げているため、とりあえず前方部東面の残存状況の確認を先行した。この部分も標高 71m以下は農道と鶏舎の設置で大きく削られるが、比較的旧状をとどめると見られた頂部寄りの高い位置で、側面施設の残存、および前面区画溝との関係追求を期待した。

設定位置：8 トレンチ南端から南２m、１トレンチから東２mを北西隅としてそこから両トレンチと直交して東に延長９m幅１mで設定した。この地点では前方部頂の平坦面東縁から緩やかに下降する東斜面部に相当する。トレンチの東端は斜面中位を巡る農道にほぼ接する。



第１５図　９トレンチ平・断面図（S=1/60）

成果：地表面観察でも畑地区画と見られる低い段が確認できたが、表土下の浅い位置で階段状に整えられた地山面を検出し本地点は比較的近年に畑地に開墾されていることが判明したが、その形状から大幅な地形改変は蒙っていないことが推測される。遺物は遊離状態の埴輪片少数が出土したにとどまる。

墳丘測量図に照らせば明瞭であるが、７トレンチ他の所見から推測される前方部前端と、１１トレンチ他で確認した前方部東側面墳裾ラインを結べば、本トレンチ設定位置が前方部墳丘の西側面に該当することは明らかであるが、この部分で前方部の形状を直接的に反映する材料は得られなかった。しかしこの地点で検出した地山面レベルが予想以上に高く、かつその勾配が緩やかであったこと、つまり東にやや張り出した形状であることを確認できた点は、前方部前端付近の形態復元に一定の示唆を与える。１１～１３トレンチで確認したくびれ部より前方部東側面の形態とこの点を整合的に捉えようとすれば、一つは、前方

部前半少なくとも東側面は外に強く開く、いわゆる撥形を呈する可能性を示すことになる。あるいは逆に東側面の加工が前端付近では大幅に省略されて自然地形の張り出しをそのまま残していると推測することも可能であろう。今回の調査成果からはいずれとも決しがたいが、少なくとも前方部前端がシンメトリーな柄鏡形を呈する可能性は排除できるであろう。

４．１０トレンチ：前方部前面付近頂部（第１３図）

設定の意図：この地点は農道の東面に接して前方部頂の高まりを不規則に抉った部分の北面にあたる。大幅な改変が予測されたが、７トレンチの成果を承けて前端部付近頂部から西側面に至る部分の遺存状況を確認するために設定した。

設定位置：７トレンチの南２ｍ、１トレンチの西２ｍを起点に西に東西延長４ｍ、最大幅１．５ｍで設定した。

成果：トレンチ東半部では表土直下にごく薄い間層を介して地山面を検出したが、西寄り１．５ｍ部分では地山面が一段下がり、その上部には撹拌された花崗岩ばい乱土などがきつく突き固められブロック上に堆積する。地山上面で鉄釘が出土したことなどから地山面の削り込みとブロック土の堆積は明らかに近年の所産である。位置関係からみて６トレンチ前面に及んだ攪乱部と後述する１４トレンチ上部の客土層に連続するものである。したがって残念ながら、農道周辺つまり前方部前半部の頂部西縁～上半部は比較的近年の攪乱によって見た目以上に損なわれていることが推測される。

５．１１トレンチ：前方部東面（第１６・１７・１８・１９図）

設定の意図：前方部東斜面の墳丘構造の確認を目的としてほぼ前方部頂から墳丘外に向けて設定した。立木により１ｍほど設置地点をずらしたが、墳丘中軸を挟んで、先年度調査で葺石・埴輪列を検出した２トレンチを折り返した位置にあたる。

設定位置：農道切断部の南約１０ｍで前方部東斜面裾の方形壇の南側に接する位置にあたる。墳丘主軸ラインの東５ｍ、Ｋ５杭南３ｍを起点に幅１ｍで主軸ラインと直交して設定。前方部墳丘頂部平坦面東縁から墳端傾斜変換点に至る東西延長１５ｍ幅１ｍの調査区である。なお調査区東端付近では、後述するように検出した平安後期火葬墓を確認するために若干調査区を拡張した。また夏期調査では１３トレンチの設定にあたり本トレンチを再掘削して一部を拡張した。そのため調査面積は全体で１７．４㎡となる。

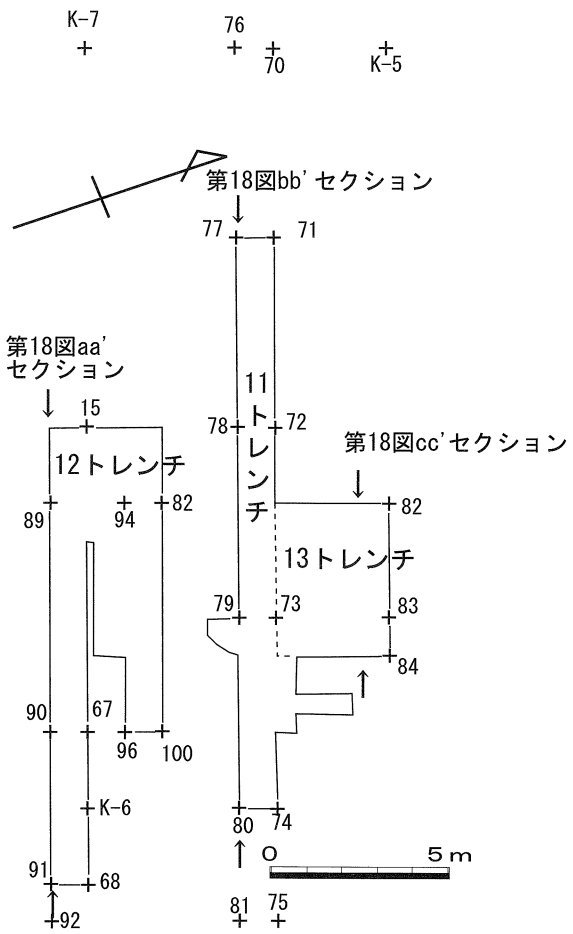
成果：当初予想したほどに墳丘外表設備の遺存状態は良好ではなかったが、葺石残部や埴輪樹立状況から、墳丘斜面に二段のテラスを設けていること、つまりこの部分が見かけ上三段に整えられていることが確認できた。なおこの部分では墳丘は頂部に至るまで大部分を地山削り出しで整形し、若干の置き土を盛ってテラス部分を整えている。ただし置き土部分は大部分崩壊し、葺石も基底石の一部が残るにすぎなかった。

第一段（墳端）石列

標高６７．４ｍ、主軸から１５．９ｍの位置で墳丘規定を画する小段を検出した。掌大もしくは小児頭大のやや扁平な円礫を立て、あるいは２～３段で横積みする。積み方は揃

わず使用礫のサイズに合わせて任意に積み上げて高さ２０ｃｍ内外の低い段をこしらえる。段基底ラインは厳密には墳丘主軸に並行せずに南に開き気味に延びている。なお１２トレンチ拡張区南端付近で石列が屈折している。肝心の部分で１～２石が脱落しているが、後で述べる１２トレンチの所見と合わせて、この部分がくびれ部に相当すると見られる。ただし屈折角度は非常に緩い。

石組は地山面を浅く削って据えられ、裏面に若干の置き土を詰める。これより外方は緩やかに自然地形に連なり古墳築造に伴う整形痕跡は認められない。この石列を墳丘基底とすれば本地点で前方部墳丘高は５ｍとなる。この小段の上面が下段テラスとなるが、その勾配から推測して本来的には上部にもう１～２段配されていたものと見られる。



第１６図　前方部東面調査区配置図

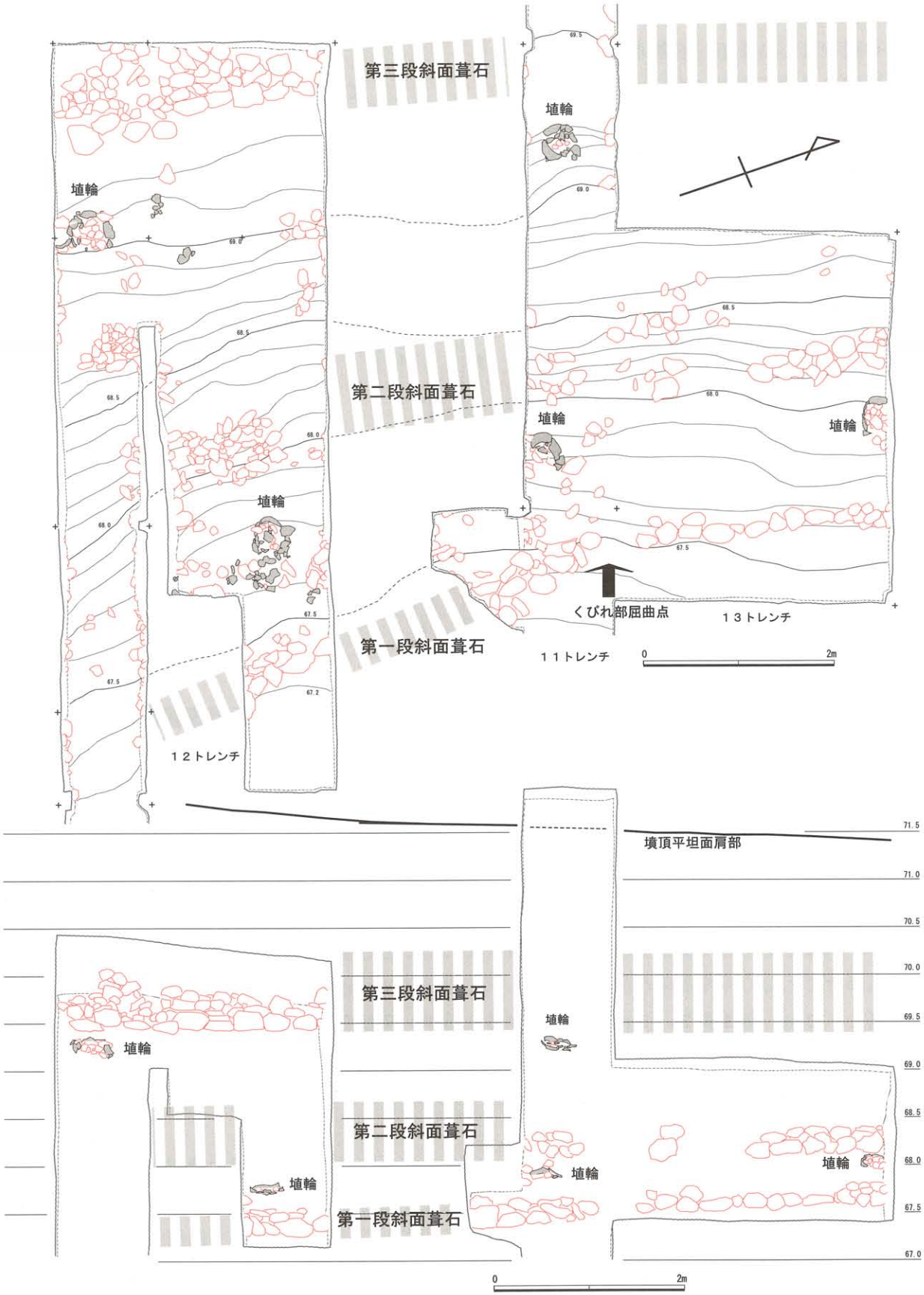
石列外方では葺石材と共に比較的多量の円筒埴輪・壺形埴輪片が出土したが、いずれも上方からの転落と見られ、石列にそれらを立て並べた形跡は乏しい。

第二段葺石（葺石）

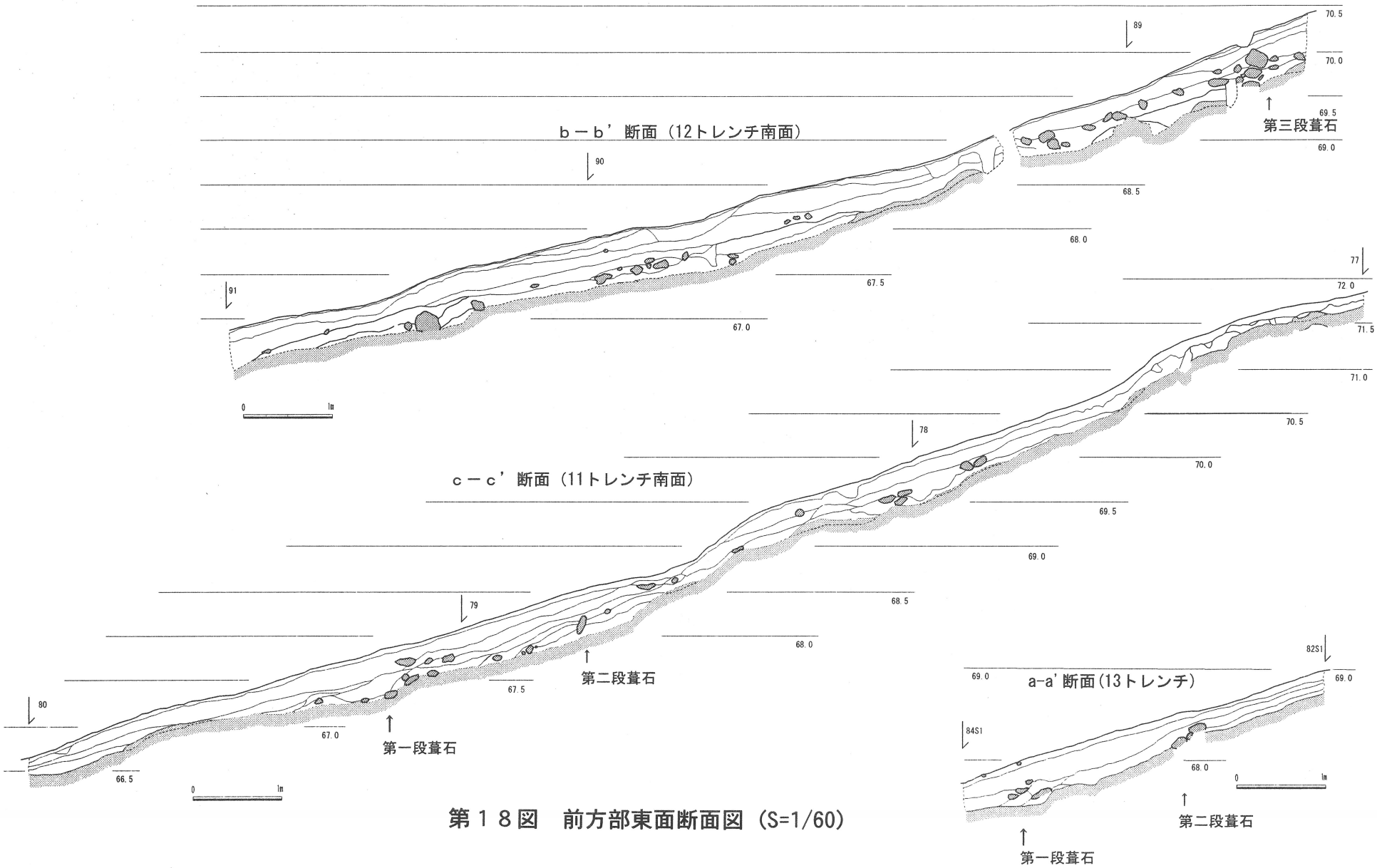
標高６８．１ｍ、主軸から１３．８ｍの位置で第二段斜面葺石の基底残部を検出した。墳丘第一段との比高０．７ｍ、前方部頂との比高は４．３ｍとなる。拳大かそれよりも小さい円礫を使用して墳丘表層の若干の置き土に差し込むようにして据えるが特に面を揃えるわけでもなくやや乱雑な配置となる。第二段斜面は後述する上段テラスとの関係から比高１．２ｍ、斜面長２．５ｍ前後と推測されるが、やはり地山を削り出して若干の置き土で整えたものと見られる。なお墳丘西面の２トレンチで検出した葺石下端が標高６７．９ｍ、主軸から１４．８ｍを測り、東面の第二段斜面葺石とほぼ対応する関係にある。

下段テラス

第一段・第二段斜面間の標高６７．６～６８．１ｍ比高０．５ｍ弱の緩斜面部分が下段テラスとなる。地山削り出し整形の上、うすい置き土で整えるが、上面は流出していると見られる。テラス面のやや奥寄りで第二段葺石基底から０．４ｍ離れて円筒埴輪１基の樹立を確認した。テラス上面の置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を詰めて安定を図っている。



第１７図　前方部東面調査区（１１～１３トレンチ）平・立面図（S=1/60）



第１８図　前方部東面断面図（S=1/60）

上段テラス

地山面の傾斜変化と、半ばずり落ちた状態で検出した円筒埴輪基底部の存在から第一段テラス同様に若干の置き土で整形したテラス面の存在を推定したが、現状ではほぼ流出している。標高６９．３～４ｍ前後、主軸ラインから１１ｍ前後をはかる。規模・形状の詳細は不明である。円筒埴輪はテラス上面の置き土ごと第二段斜面に半ばずれ込んだ状態で検出した。やはり置き土に基底部を埋め込み内部に小礫を充填したものと見られる。

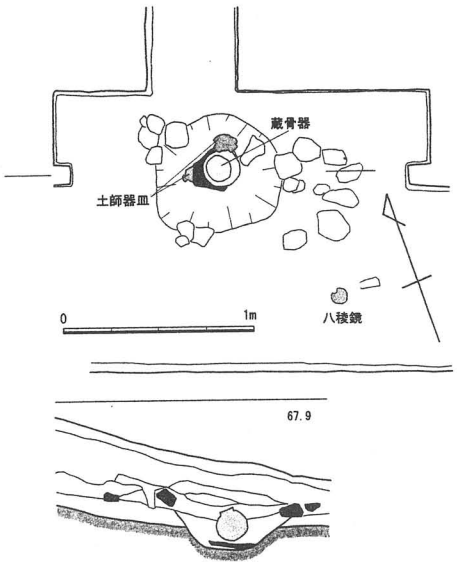
第三段斜面

上段テラスから墳頂までの間が第三段斜面に相当する。比高３ｍ前後となる。上段テラスに転落した石材の存在から葺石施行は推定してよいだろうが、原位置にとどまるものはなく、どの程度充実していたかは不詳である。

火葬墓（第１９図）

調査開始直後、トレンチ東部（東端から約２．５ｍ）の表土直下で八稜鏡一面が裏返しで出土した。墳端の第一段石列の外約２ｍの地点で墳丘から転落した埴輪・石材が多く含まれる層序の上面付近であった。周囲を精査したが、土杭など八稜鏡が何らかの遺構に伴う徴証は見いだせず、全く遊離した状態であることが推測された。

その後、八稜鏡出土地点の北西０．５ｍ付近で半ば１１トレンチ南壁にかかるように須恵器壺を蔵骨器とする火葬墓を検出した。墳丘東裾野の方形壇の南側面に近接する位置である。この周辺を拡張して墓壙の検出を進めた。墓壙は墳裾に堆積した流入土を切り込んで穿たれ平面形は東西０．６５ｍ南北０．６ｍのいびつな楕円形で、深さ０．２ｍのボウル状を呈する。底面中央に安山岩板石を据え、その上に口頸部を打ち欠いた須恵器壺を倒置して、掘り込み内に炭細粒を充填する。蔵骨器内には砕いた焼骨を詰める。少なくとも歯・頭骨・指骨や大型の四肢骨骨幹部が認められる。調査範囲では周囲に被熱痕跡や骨片の散乱はみられない。また掘り込み内の中位に土師器杯４枚を伏せて配列する。逆位で据えられた須恵器底部は土坑上面から突き出す。これを覆うように若干の炭片を交える層が掘り込みより一回り大きく堆積する。また掘り込みの周囲には拳大の円礫が配されるようにも見えるが、もとより墳裾で転落石材が多く確証はつかめないがこれらの点から墓壙上部に若干のマウンドが存在した可能性は高いであろう。本火葬墓の年代は遺物の項で後述するように、蔵骨器と共伴する土師器杯の型式から平安後期１１世紀前半代と考えられる。



第１９図　火葬墓平・断面図（１１トレンチ）

６．１２トレンチ（第１６・１７・１９図）

設定の意図：１１トレンチで検出した二重の葺石・石列が後円部に向けてどのように展開するのかを確認するためにくびれ部寄りの部分に調査区を設定した。

設定位置：当初は１１トレンチの北４ｍ、主軸の東１２ｍを起点に幅１ｍ延長１０ｍで東西方向に設定したが、遺存状況が思わしくなく、１１・１３トレンチからの連続を理解しにくかったため、木立を避けつつ南・西方向に順次拡張して、延長最大１２ｍ幅最大３ｍ調査面積２６㎡となった。

成果：１１トレンチ同様に上下二段の狭いテラスを挟んで三段に整えられた墳丘斜面を検出した。第二段斜面葺石はほとんど流出していたが、第一・第三段斜面では比較的旧状を保っていた。この地点では第二・第三段斜面は墳丘主軸とほぼ平行して前方部から直線的に延びるが、墳丘基底を画する第一段は１１トレンチ部分から緩く弧を描いて連続することが確認された。また上下二段のテラスでは各々円筒埴輪の樹立を検出した。

第一段石列

１２トレンチ拡張部東端で１１トレンチから連続する第１段石列を検出した。基底に人頭大以上の大型の石材を置き、その上には小礫を１～３段積む。石の据え方は不揃いだが３０ｃｍほどの高さを保つ。やはり地山面を多少削り込んで石材を据え裏面に置き土充当するようだ。１１トレンチ部分の基底石よりも大型の石材を使用しているようだが、狭い範囲での検出のため、そのまま後円部と前方部の差異とは言い切れない。緩やかに弧を描きながら南東―北西に延び、拡張区南壁で主軸との水平距離は１８ｍとなる。基底レベルは標高６７．２～６７．３ｍで北に向かってわずかに上がる。１１トレンチ拡張部と１．５ｍの間隔が開くがこの間で基底レベルは１０～２０㎝ほど低くなる。

第二段斜面・葺石

後述する上下二段のテラス面の間で、散漫に葺石材が残存する部分が墳丘第二段斜面であるが、葺石はほとんど原位置をとどめず脱落している。またこの部分では第一・第三段斜面のように葺石基底に大型石材を据えた形跡はない。検出した葺石材はいずれも拳大の小振りなものばかりである。墳丘表層もかなり流出しているため正確な規模は復元できないが、上下のテラス面残部から推し量って第二段斜面は標高６７．９～６９ｍ、主軸から１２．５～１５ｍのあたりとなるだろう。

第三段斜面・葺石

本トレンチでは第二段斜面が大部分流出していたのとは対照的に第三段斜面葺石はかなり良好な状態で検出できた。人頭大以上のやや横長で枕状の亜円礫を横向きに並べて基底とし、それより上には拳大～小児頭大のやや小振りな礫を斜めに差し込むように積み上げる。幅最大１．２ｍ高さ５０㎝ほど、おおよそ５～６段分を検出している。基底は標高６９．４ｍを測り、前方部頂（Ｋ７付近）との比高３．４ｍとなる。葺石基底ラインは厳密には墳丘主軸方向よりわずかに南南東―北北西に斜行し、主軸からの水平距離は１１．２～１０．６ｍとなる。

下段テラス

上述のように第二斜面基底が確定的ではないのでテラス幅の計測は困難だが、先の推測に照らせば、幅２ｍ弱程度と見られる。原状では０．５ｍ内外の比高をもった緩斜面であるが本来的には地山整形の後に若干の置き土でテラス面を整えたものと見られる。基底部を置き土に埋めて据えた円筒埴輪１基を検出した。やはり基底内部に小円礫を詰めて安定を図っている。これに隣接して壺形埴輪の口頸部および体部片がまとまって検出された。

一部は上段テラスからの転落片と見られるが、下段テラスで円筒埴輪と共に壺形埴輪を併用した可能性が高い。

上段テラス

やはり第二段斜面の流出が著しいため規模の推測は難しいが、第三段斜面葺石基底と樹立埴輪基部の検出によって存在が推測できる。おおよそ幅１．５～２ｍ程度と復元できる。円筒埴輪の樹立状況からテラス面は地山整形の上若干の置き土を盛って整えられたと推測される。円筒埴輪の樹立状況は本トレンチ下段テラスや１１トレンチの状況と異ならない。円筒埴輪片に伴って一定の壺形埴輪片を確認している点も下段テラスと同様である。

７．１３トレンチ（第１６・１７・１９図）

設定の意図：１１・１２トレンチの成果を承けて、１１・１２トレンチで検出した石列・葺石が前方部方向にどのように展開するか確認するために設定した調査区である。１１トレンチの所見から、この部分では第三段斜面の良好な遺存を期待できないと判断して第一段～第二段斜面の追求を主目的とした。

設定位置：１１トレンチの南側に連続して主軸から東１２ｍを起点に東西延長４ｍ幅３ｍで前方部墳丘東側面下半部に調査区を設けた。

成果：本調査区では隣接地点よりは多少良好な状態で墳丘第一段・第二段斜面葺石・石列と下段テラスを確認している。

第一段斜面

１３トレンチの南端で一部が脱落しているが、１１トレンチ拡張部までほぼ連続して、墳端を画する第一段斜面石列を検出した。全体で延長約４．５ｍに達する。基底石としてやや大型の亜円礫を多くは横積みするが、北端部では拳大の小振りな礫で代用している。現状では部分的に２段、小型礫を使用した部分では３段分の高さ２０㎝内外が残る。１３トレンチ範囲では基底レベルは標高６７．５５～６７．６ｍとほぼ水平に延びる。主軸からの水平距離は１５．２～４ｍでほぼ並行するが厳密にはごくわずかだけ西に振れる。もっとも基底ラインは必ずしも直線的ではなく中途にわずかな曲折が見られるので、このズレを積極的に評価することは難しい。

肝心な部分が脱落しているが、基底ラインを１１・１２トレンチから追いかけると、どうやら本トレンチ南端以南では緩く弧を描いて続き、これより北ではほぼ直線的に延び、ちょうど脱落部位あたりで緩く屈折するものと見られる。屈折角度はおよそ150°とひどく鈍いがこの部分を墳端くびれ部に相当する箇所と推測しておく。

第二段斜面

１３トレンチ北端から約１．５ｍでは比較的良好な状態で第二段葺石基底部を検出できた。本トレンチ南半部では流出が著しく、若干の石材が遺存するものの明瞭な基底ラインを連続的に追うことは難しい。基底レベルは６８．１ｍでほぼ揃い、１１トレンチの所見と合致する。前方部頂との比高は４．３ｍとなる。主軸から水平距離で１３．５～６ｍで主軸ラインとほぼ並行するが、厳密にはやや北北西に振れるようにも見える。検出範囲では基底に人頭大のやや大振りな亜円礫の横に据え、その上にはやや小振りの礫を多く横積

みするが、この地点でもさほど整ったものではない。葺石は地山削り出し面を薄く被覆する盛土に差し込まれるよう配されたか、あるいは石積みと並行して裏面に土砂を充填したものと推測できる。他の地点と同様である。ただし１１・１２トレンチでは第二斜面葺石基底にこのような大型礫の使用は認められない。このように葺石施行は地点によって非常にむらがある。確実に原位置をとどめる葺石は基底から２～３段分高さ３０㎝程度にすぎないが、少なくとも標高６８．６ｍ、主軸から１２．５ｍまでの幅１ｍ比高０．５ｍの範囲には散漫に拳大～小児頭大の亜円礫が認められる。これらの多くは多少滑落したものと推測するが、第二段斜面の葺石をある程度は反映するであろう。

下段テラス

１２トレンチでは他と違い第一・二段斜面の石列・葺石が比較的残るのでテラス幅の推測が可能である。現状で幅１．５ｍ弱、比高０．３ｍほどの緩斜面をなすが、やはり表層は多少流出していると思われる。トレンチ北壁に接してテラス奥寄り部分（第二段基底石から０．３ｍ）で樹立状態の円筒埴輪基底部を検出した。他地点と同様に内に小礫を詰め基底部を置き土に埋め込む。

下段テラス面から第１段石列外方にかけて円筒埴輪・壺形埴輪片多数を検出したが、第一段石列の外側に埴輪を樹立した形跡はない。

８．３トレンチ拡張部（第２図）

設定の意図：後円部墳丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畑地開墾の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した３トレンチ東端から墳頂平坦面西縁までの間（３２杭～１１２杭間）に、東西延長１５ｍ幅２ｍで３トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅緻に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも３トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凸凹が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅緻な盛土面が検出できたが、墳丘下半では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から10.8m（中心点から17.8m）まで標高７０ｍ以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んでも後円部墳丘では４ｍ内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているように見えるが、本来的には今少しは盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えているが、現状では上記したように局部的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からややまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確実に原位置をとどめると判断されるものが全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

さて確認した盛土層の大部分では、ａ炭片を多く混入する砂礫混じり黒灰色粘土、ｂ明橙色粘土、ｃ多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の３者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩バイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局部的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅緻に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層にしかれた置き度とは全く異なっている。

なお、昨年度の３トレンチ東端において地山直上で盛土層の可能性がある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので訂正しておきたい。

９．１４トレンチ（第２図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存することを期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と７トレンチで確認した前方部前端区画溝との中間地点にほぼ相当する主軸上に設定した１１８杭の西９ｍを南東隅として幅２ｍ東西延長１２ｍの調査区を設定した。昨年度設定した２トレンチと１８ｍの間隔で並行し、トレンチ北壁は前方部前端区画溝から約１２．５ｍ南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を４ｍ幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前方部前半部ではおおよそ標高６９．５ｍ以高の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

成果：したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高６９．５ｍ以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

第一段石列

主軸から水平距離１６．４ｍでほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から１．５ｍほどが遺存する。基底レベルは６８．０～６８．１ｍとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅５０㎝大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね２０～３０㎝大の段を形作る。

第二段斜面葺石

主軸から水平距離１４．４～５ｍでほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出した。トレンチ南端から約１．２ｍほど遺存し基底レベルは６８．６５～６８．７５ｍと、第一段石列と同程度にわずかに北に向かって迫り上がる。基底石は第一段石列よりやや小振りな人頭大の大型石材を概ね横向きに並べ、その上には小児頭大～拳大の礫を斜めに差し込むように重ねる。最大５段分幅６０cmほどが残存する。なおこの地点では第一段石列を含め

使用石材は安山岩自然礫ばかりであった。

下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅１．５ｍ比高０．４ｍほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレンチ北半で第二段葺石基底と２０cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り窪めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小礫を詰めていない点も相違している。

円筒埴輪片の他、壺形埴輪体部片などが出土しているが量は多くない。

第２節　出土遺物の概要

１．快天山古墳関係遺物（第２０～２２図）

今年度調査で確認した快天山古墳に直接伴う遺物には円筒埴輪・壺形埴輪および若干の土師器小形器種がある。昨年度の調査所見で存在を否定的に捉えた朝顔形円筒埴輪については後述するように判断を保留する必要が生じてきた。ただし器財形埴輪は今回も確認していない。

円筒埴輪（第２０・２１図）

（第２０図１）

最上段（口縁部）から最上段突帯片。口径２８cmを測る。淡橙色を呈し１～２mm大の比較的細かい石英・長石粒を含む。長さ約６cmのやや短い口縁部は鈍く外反して端部内面をわずかにつまむ。やや低めの突帯は上端を強くつまみ出す。外面一次タテハケ調整の後、口縁部は横ナデで仕上げる。内面は第二段相当部上端付近まで横ケズリ。最上段部はヨコハケ調整の後、軽く横ナデを加えるが、粘土帯接合痕を顕著に残す。

（第２０図２）

突帯は剥落するが最上段（口縁部）から第二段に至る破片。口径３９cmを測る。明橙色を呈し、口縁部外面に黒斑がある。約１／６周を残す。３～５mm大の粗粒の石英・長石粒の他、細かな赤色粒含む。突帯剥落位置から測って最上段幅は約９cmと本墳出土資料の中では長めの部類といえる。鈍く外反して端部内面を鈍く摘む。突帯貼付位置には約１２cmの間隔で浅い方形刺突２ヶ所が確認できる。外面は一次タテハケ調整後、最上段には丁寧な横ナデを加える。内面は横方向の指ナデの後に、最上段部分には細かなヨコハケ調整を施す。

（第２０図３）

最上段突帯部片。突帯部分で経３８cmを測る。黄白色を呈し２～４mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。突帯は単純な台形を呈し、下端の貼付がやや甘い。第二段では突帯から２cm離れて方形透かしが穿たれる。外面一次タテハケ後、最上段は丁寧な横ナデ調整を加える。内面は第二段相当部分まで横ケズリ、最上段はヨコハケで仕上げる。

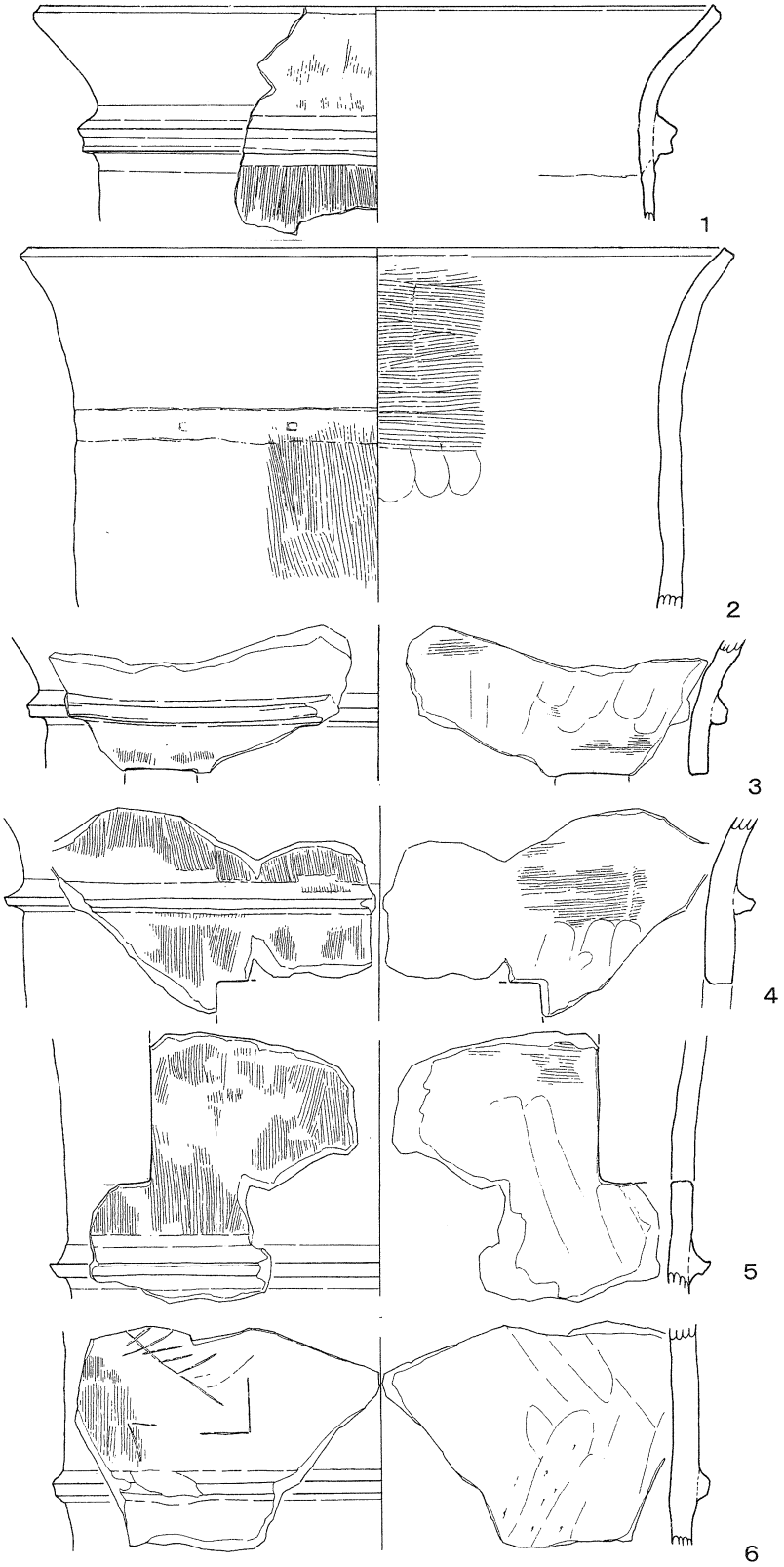
（第２０図４）

最上段から第二段片であるが、口縁部を欠く。突帯部分で径４１cmを測る。赤橙色を呈し２～４mm大の石英・長石粒とやや細かい赤色粒を多く含む。細身で突出度の高い台形突

帯を付す。器壁はやや肉厚となる。第二段部に突帯から３．５㎝離れて方形透かしを穿つ。外面は一次調整タテハケの後、最上段を含め二次タテハケ調整を施す。内面は指ナデ調整の後、最上段部はヨコハケ調整を加える。（第２０図５）

中間段片であるが、内面調整から勘案して上方第二段・第二段突帯部片であろう。突帯部で計３６㎝を測る。明褐色を呈し突帯部分に黒斑が付く。突帯はさほど突出しないが上端を強く張り出す形状となる。突帯から約３cm 離れて方形透かしを穿つ。外面は一次調整タテハケ仕上げ、内面は縦方向の指ナデ仕上げの後上端にはヨコハケ調整が及んでいる。（第２０図６）

中間段片。透かし孔と内面調整から見て中位以下の部位であろう。黄白色を呈し細粗粒の石英・長石粒を多く含む。台形を呈する突帯は小振りで突出度も弱い。外面には二次タテハケ調整が認められる。内面は斜位の指ナデ調整の後に粗く縦に削るが器壁はやや肉厚である。さて本品には箆描の細沈線によるやや複雑な記号的表現が認められる。上に開く「へ」字状の刻線一条と、それに交差する５～６条の不揃いな短刻線が見られる。いずれも鋭利な刀子状の工具で刻まれる。半ば以上を欠損するため全体の構図は不明であるが、線刻文と重なるように穿たれた透かし孔の一部が残存する点が注意される。



第２０図　円筒埴輪（Ｓ＝１／４）

（第２１図１）

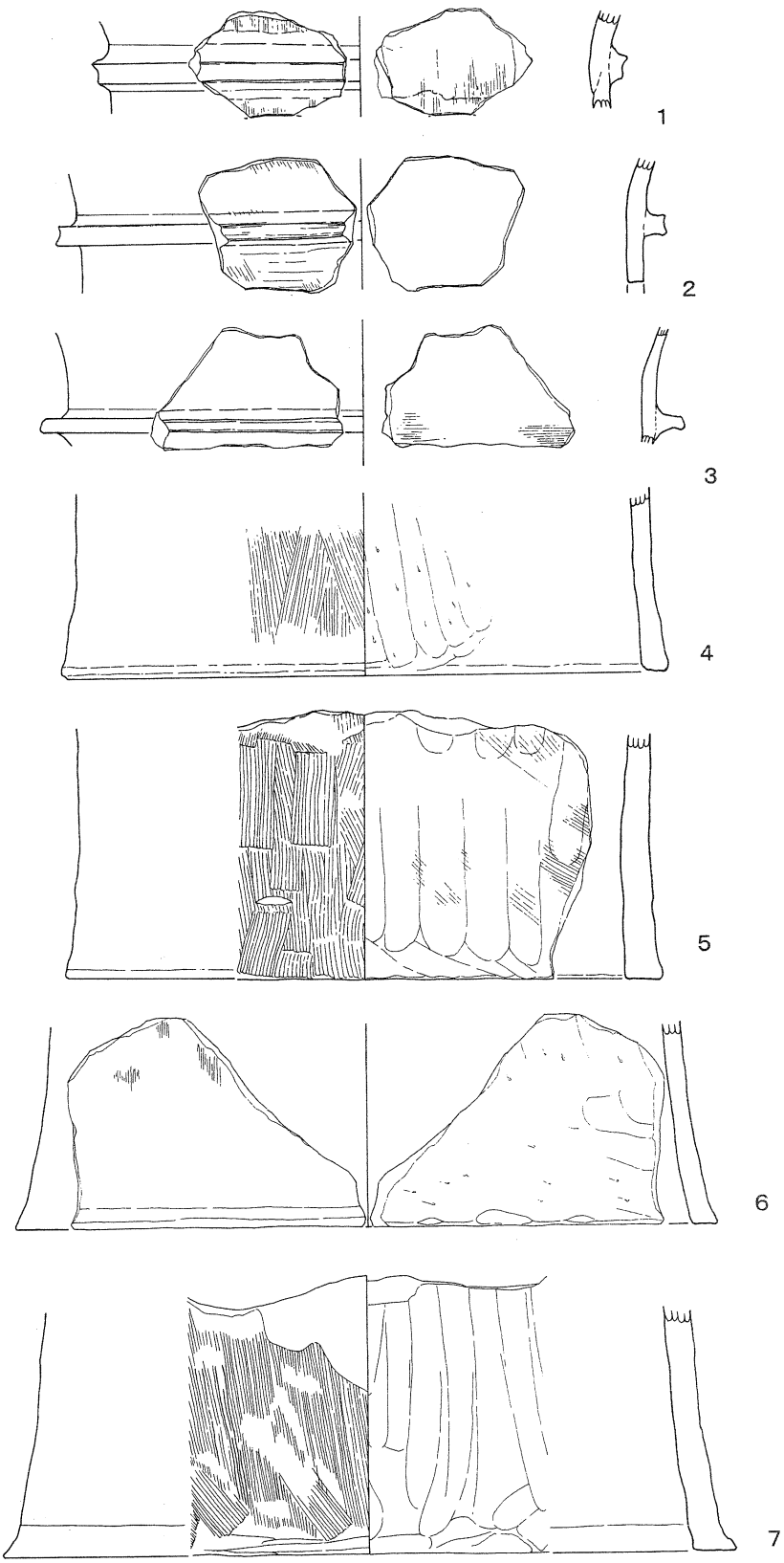
最上段突帯部片。復元計測では突帯部径３０cmとなるが小片のため不安が残る。明橙色を呈し１～４mm大の石英粒を少量含む。やや低めの台形突帯は上端を強くつまみ出す。第二段部に突帯から２cm弱離して方形透かしを穿つ。外面一次調整タテハケ。最上段部の下端付近では二次調整の横ナデが認められない。内面は突帯部分まで軽く縦ケズリを施す。上端にヨコハケ調整が僅かに見える。

（第２１図２）

最上段突帯部片。外面黄橙色、内面鮮橙色を呈し、３～４mm大の粗粒の石英粒を多めに含む。外面に赤色顔料（ベンガラか）の塗布を認める。復元計測では突帯部径３４cmとなるが、小片のため不安が残る。矩形で突出度の高い突帯は下端をやや強くつまみ出す。第二段に突帯から約２cm離して方形透かしを穿つ。一次タテハケ調整の後、最上段は丁寧な横ナデ仕上げ、第二段ではヨコハケ調整が確認できる。外面ヨコハケ調整を確認した資料は現時点ではこの一点のみである。内面は丁寧なナデ仕上げとなる。

（第２１図３）

最上段突帯部片か。相当に薄く仕上げると共に突出度の高い鍔状突帯をもつことから通有の円筒埴輪と見なすには躊躇する資料である。突帯部分で径３５cmを測る。橙色を呈し２～３mm大の石英粒・赤色粒を多量に含む。突帯は細身ながら鍔上に強く突出し下端を引き延ばす。外面は磨耗のため調整不明、内面横ナデ仕上げとなる。



第２１図　円筒埴輪（Ｓ＝１／４）

（第２１図４）

基底段片。基底部径３４cmを測る。黄白色を呈し、２～４mm大の石英･長石粒を多く含む。外面に黒斑をとどめる。内面ヘラ削りにより器壁は厚さ１cm内外と薄く仕上がる。外面はタテハケ調整。やや内傾気味に立ち上がるが、やはり自重で下端が潰れ内外に粘土がはみ出した形跡がある。内面は下端まで及ぶ縦ケズリ調整時にその部分も掻き取り、外面は最終段階に板状工具で押さえつけている。

（第２１図５）

基底段片。基底部径３４cmを測る。また本片では基底段は少なくとも１９cmの高さを持つことが判る。全体に橙色を呈し１～３mm大の石英・長石粒を含む。器壁は厚く最大２cmを越える。ほぼ垂直に立ち上がるが自重で下端がやや潰れ、内外に不規則に粘土がはみ出す。そうした部分の処理は特に行っていない。外面はタテハケ調整、内面は粗く縦方向に指ナデする。基底面の観察から、幅広の粘土板を二重に巻き付けて基底部を整形したことがうかがわれる。

（第２１図６）

基底部片。淡黄色を呈し２～４mm大の石英・長石粒を比較的多めに含む。基底部径は約４０cmを測る。自重で下端が潰れた形跡があるが、外にはみ出した粘土を板状工具で器壁に押さえつけているようだ。僅かに内傾気味に立ち上がる。外面はかなり磨耗しているがタテハケ調整が読みとれる。上記の「底部調整」はハケ仕上げ後と見られる。内面は丁寧に横ケズリを施し、この結果器壁は厚さ１cm内外とかなり薄く仕上がっている。

（第２１図７）

基底部片。黄橙色～明橙色を呈し２～４mm大の石英・長石粒少量と赤色細粒を多量に含む。基底部径は４１cmを測る。自重で下端は潰れ外方に粘土が不規則にはみ出したままとなる。僅かに内傾気味に立ち上がり器壁は２cm前後と厚い。外面タテハケ調整、内面は粗い縦方向の指ナデ仕上げとなる。

今年度の調査でも円筒埴輪の全形を推測しうる資料を得ることはできなかった。樹立状態のまま検出した基底部の一部を除き全周する資料はなく、透かし孔配置の詳細や段構成の復元は今後の課題となる。しかし今までの資料を通して円筒埴輪の基本形状にはさほどの差異はない。昨年度報告で紹介した点を含めてあらためて全体に共通する特徴を以下にまとめておこう。

①口縁部は最上段基底段や中間段に比べ短めとなる。多くは中間段の１／２以下の高さとかなり短いが、まれに２／３程度に達するものも含まれるが、この部分でかなり外反することには変わりがない。

②口径は概ね３５cm前後、基底部径は３０～３３cmでかなり揃っている。

③透かし孔は口縁部（最上段）と基底段を除く中間段全てに穿たれる可能性が高い。

④透かし孔の圧倒的大部分は縦長の長方形を示し、縦方向はほぼ段幅一杯となる。昨年度調査資料では三角形透かし孔の可能性をもつ細片若干が認められたが、今年度資料では今のところ三角形、その他の長方形以外の透かし孔形状は確認していない。

⑤透かし孔の間隔から配置をある程度推測しうる若干の資料では、各段に四方～五方を穿つものと見られる。また透かし孔位置は縦方向に揃っている。もっともこうした状況を

確認できる資料が限られるので、全体に共通するとは断定できない。

⑥突帯は概ね突出度が高く貼付は非常に念入りであるが形状は一律ではない。また突帯貼付位置の器壁に一定間隔で浅い方形刺突痕が連続する例がある。

⑦少数の資料では赤色顔料（おそらくベンガラ）の塗布が確認できる。また基底段にそれが及ぶ資料も存在する。

これまで確認した快天山古墳出土円筒埴輪では、一応は上記した①～⑦の共通点を持つが、その全体は発色及び胎土の特徴から二群に大別することができるし、この区別はある程度整形技法の差異とも関連している。まず発色では黄白色系統を呈するグループ（ａ群）と橙色系統を呈するグループ（ｂ群）がある。前者ａ群では３㎜前後の粗粒の長石粒、石英粒が目につくが、混入度合いはさほど多くない。後者ｂ群ではａ群と同様の胎土が観察されるグループ（ｂ－１群）と、全体に混入砂粒がひどく多いグループ（ｂ－２群）が見られ、その一部では加えて２～３㎜大の摩滅した赤色粒を多く含むものがある。ｂ群、とくにｂ－２群は今少し細分できる余地があるが、現時点ではこの程度に大まかに捉えておきたい。さて黄白色系統のａ群では例外なく最上段を除く内面の大部分にケズリ調整を施し、その結果器壁は薄く仕上がっている。外面は突帯貼付前に全体をタテハケで整え、後に口縁部（最上段）に限り丁寧な横ナデでそれを消す。口縁部内面にはヨコハケ調整を加えている。また快天山出土の円筒埴輪はいずれも正位置に据えて基底部から順次粘土帯を積み上げていくとみられるが、その結果、自重で基底部が潰れ不規則に粘土がはみ出したものが多い。しかしａ群の一部では最終段階でそうした部分を板状工具で器壁に押しつけ整形する例がある。

さてｂ群のうち、ｂ－２群と一括したグループのもっとも目に付く特徴は内面のケズリ調整を全く欠く点にある。中間段で内面第二段以下は指ナデで仕上げている。この結果、器壁はａ群より厚く全体に鈍重な感を与える。底部整形を除く外面調整と口縁部内面のヨコハケ調整は多くの場合共通するが、一部では突帯貼付後にあらためて外面に二次タテハケを加えるものがある。

一方ｂ－１群では調整技法の点で全くａ群と一致するものが多い。実際同一固体で部位により明確に発色を違え縞模様を呈する固体もまれに認められ、両者の緊密な関係を示している。少数例では外面に二次ヨコハケ調整が認められるが、小片のためその充実の度合は不詳である。

壺形埴輪（第２２図）

（第２２図１）

口径４１㎝を測る大型の二重口縁壺口縁部片。約１／３周を残す。黄白色を呈し口縁端に黒斑が見える。４㎜以上の粗粒石英粒を少量含む。やや丸みをもって開く受け部を持ち、立ち上がり部は強く外反して開く。端部はごく僅か肥厚した面を持つ。屈曲部には断面蒲鉾形の小突起が巡る。器面は荒れているが内外面横ナデ仕上げと見られる。二重口縁壺の中では一際大型の固体で、同時期の日常的な壺形態をそのまま埴輪化したと見られる他個体とは様相を異にするものである。

（第２２図２）

口径約３２cm を測るやや小振りの二重口縁壺口縁部片。淡黄色を呈し２～３㎜大の石英

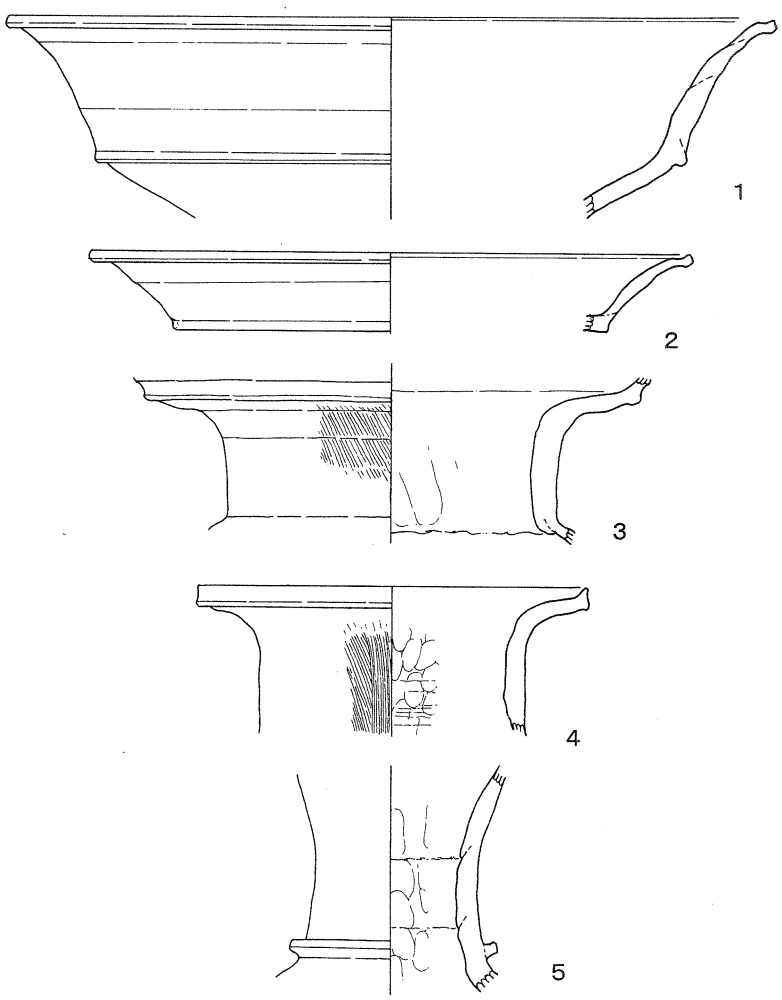
粒少量を含む。強く折り返して大きく開く口縁部は薄手。上端付近でやや屈曲して端部は小さくつまみ出す。内外面横ナデ仕上げ。

（第２２図３）

二重口縁壺口径部片だが、口縁立ち上がり部を欠く。黄白色を呈し２～３㎜大の石英粒をやや多めに含む。推定口径は３０～３５cm程度であろう。短めの直立する頸部から強く折り返して口縁受け部は水平に開く。立ち上がり部は薄手で強く外反するようだ。屈曲部は強く張り出す。頸部外面に斜位のハケ調整をとどめる他は横ナデ仕上げ。

（第２２図４）

口縁端が磨耗しているため厳密には二重口縁壺の疑いも捨てきれないが、単口縁広口形態と見た方が素直であろう。その場合口径は２１cmとなる。



第２２図　壺形埴輪（S＝１／４）

約１／６周強を残す。淡黄色を呈し２～３㎜大の石英粒を少量含む。直立する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短い。端部は小さく垂直につまみ上げ、下端も小さく張る。口縁部内外面は横ナデ仕上げだが、頸部外面には緻密なタテハケ調整をとどめる。頸部内面には指押さえ痕をよく残し下端は粗い横ナデが加わる。

（第２２図５）

他の中大形壺とは胎土・形状を異にし、壺形埴輪に分類することには躊躇する資料である。暗橙色を呈し２～３㎜大の石英粒を多量に含む。外反気味に立ち上がる頸部片で基部に突出度の高い細身の矩形突帯一条が巡る。外面横ナデ仕上げで内面は指押さえ痕を残す。こうした特徴の中形壺は兵庫県西条５２号墓や香川県尾崎西ST２４号墓、弁天島積石墳などどちらかといえば播磨灘沿岸地域で見られるが、製作地を細かく限定することは困難だ。また奈良県箸墓古墳にも類例がある。ただし以上の諸例は弥生後期後葉～古墳前期前葉に位置続けられ、本墳の年代観には合致しない。

その他土師器

いずれも細片のため、図化できなかったが、埴輪類とは区別できる少数の土師器類が出土している。うち少なくとも一点は、直立する頸部から口縁折り返し部にさしかかる部分

と推測しうるので、小形の広口壺と見られる。他の多くは細片化した体部片であるが、比較的張りが強くかつ薄手で外面ハケ調整、内面はケズリないしは顕著な指押さえ痕が観察できるものが多い。小形の壺もしくは甕であろう。今のところ高杯・鉢類など飲食器類は確認していない。

以上の資料は、昨年度提示した編年観＝集成編年３期と矛盾するものではない。

２．火葬墓関連遺物他（第２３図他）

八稜鏡（図版５５）

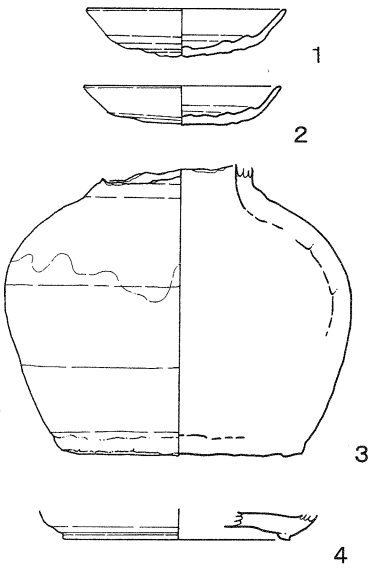
面径８３㎜を測り、内区厚２㎜、外区厚２．５㎜と小形かつ薄手の八稜鏡である。「へ」字に折れ曲がり外区・外縁の一部を欠損する。多くの亀裂が走り相当に劣化が進んでいる。また錆化が進行し表面に細かな砂粒を多く固着させているが、繊維あるいは木質痕などは観察できない。

外縁では鈍く断面三角形に隆起するが、頂部はやや丸みを帯び、この部分で厚さ４㎜を測る。外郭は八角形を呈するが長３２～３３㎜を測る各辺は僅かばかり弧を描き、稜部の突出は強くない。稜間（各辺）中央では外縁隆起部がごく鈍く内側に突出する。幅８㎜の外区は厚２．５ｍ、素文で厚２㎜を測る内区との境に僅かな段を持つ。劣化のため不鮮明であるが内区には鈕を巡り対抗する位置で外向きに飛翔する二鳥と、その間に藤状の草花が肉彫り風に表現される。鈕は長８㎜幅６㎜厚５㎜の楕円形を呈し長辺に直交して鈕孔を穿つ。鈕座の表現はない。

片桐孝浩氏のご教示によれば、本鏡は外縁の形状等から平安中期に編年される可能性が高い。

蔵骨器（第２３図３）

比較的寸詰まりな体部でやや肩を張る。体部高１３．４㎝、最大径１８．４㎝、底部径１３cm を測る。器壁は全体に１㎝内外の厚みを持つ。口頸部は基部から打ち欠く。焼成は堅緻で全体に明灰色を呈する。器表全体に薄く釉がかかり光沢を帯び、さらに肩から濃緑色の釉が厚く垂れる。砂粒は目立たない。外面全体は回転ナデで整えるが基底部に一条の接合痕を残す。内面では同様の接合痕を三段以上留める。



第２３図　火葬墓関連資料他（S＝1/4）

佐藤竜馬氏のご教示によれば、形態・焼成など総合的に見て本品は十瓶産須恵器壺で１１世紀代に位置づけられる可能性が高い。

墓壙内出土土師器４点のうち２点である。他２点も法量・形態などこれらと同巧である。

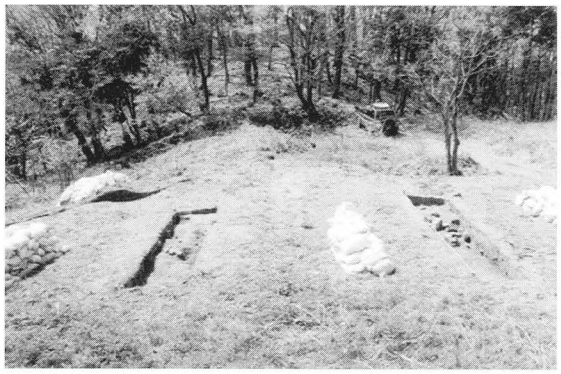
細粒の混入はきわめて少ない。２１図１は口径１０．４㎝深さ２㎝、第２３図２は口径１０．７㎝深さ２．５㎝を測る。底部はやや肉厚で口縁部は強く外傾して比較的まっすぐ延び、端部は丸く収める。底部外面には回転箆切り痕を留める他は回転ナデで仕上げる。これらは法量・形態から、１１世紀後半代と推定される杯と皿の器種土師器杯両者とも黄灰色を呈し、分化以前の過渡的な形態と評価され

る土師器杯C類に相当すると見られる。その点から１０世紀後半～１１世紀前半代に位置付けられる。以上の編年観は佐藤竜馬氏のご教示に拠った。

３．その他

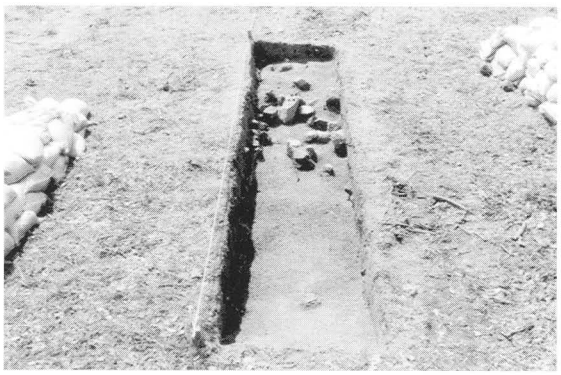
この他、火葬墓周辺の１１～１３トレンチの墳丘裾部あたりから今回図示していないが杯類および鍋もしくは長胴甕と見られる土師器片若干が出土している。今年度検出した火葬墓の共伴資料に近い年代を推測しうるものであるが、そうした資料の散布範囲からこの時期の他の遺構が所在する可能性を示唆するものである。

また前方部前端付近の７～１０トレンチでは昨年度の１・６トレンチ同様に８世紀代後葉に位置づけうる須恵器高台付杯３～４個体分の破片が出土している。うち一点を図化掲載した。（第２３図４）他地点でも同時期と見られる須恵器片ごく少数が見られるが、今のところこの時期の資料は前方部前端付近にまとまる傾向を指摘できる。



図版11　第７～９トレンチ全景（北から）

図版12　第９トレンチ全景（東から）



図版13　第７トレンチ全景（北から）

図版14　第７トレンチ前端区画溝南肩（西から）

図版15　第12トレンチ第三段斜面葺石（東から）

図版16　第11～13トレンチ全景（南から）

写真３　前方部前端調査区・前方部東面調査区１

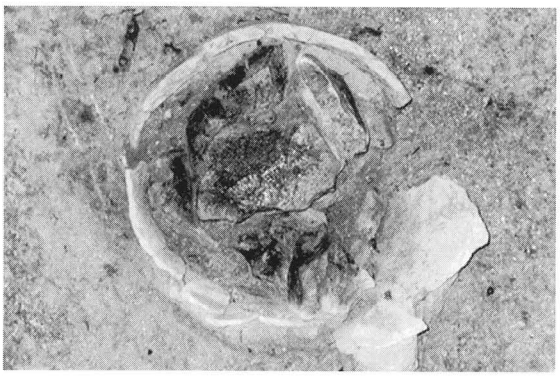
図版17　第12トレンチ第一段斜面葺石（東から）

図版18　第11・13トレンチ第一・二段斜面葺石（東から）

図版19　第11・12トレンチ第一・二段斜面葺石（北から）

図版20　第一段斜面葺石（北から）

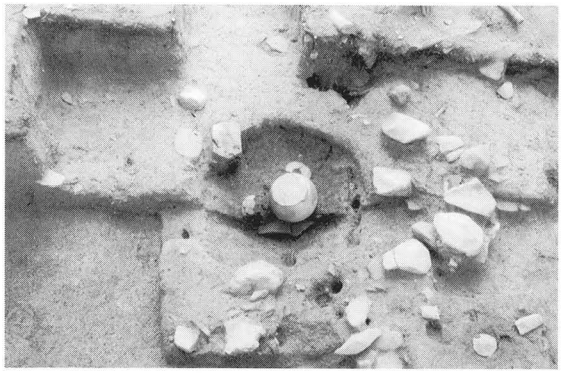
図版21　第11トレンチ第一段斜面葺石屈折部



図版22　第13トレンチ第一段テラス埴輪設置状況

写真４　前方部東面調査区２

図版23　火葬墓壙半裁状況



図版24　火葬墓壙掘下状況

図版25　火葬墓壙完掘状況

図版26　火葬墓壙完掘状況

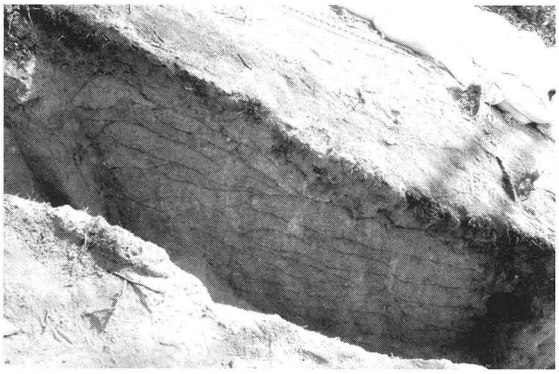
図版27　第11トレンチ火葬墓検出位置（丸印の部分）

写真５　前方部東面　火葬墓

第３トレンチ拡張区

図版28　第３トレンチ拡張区全景（西から）

図版29　第３トレンチ拡張区盛土断割状況（東から）



図版30　第３トレンチ拡張区墳丘上半部の盛土

第14トレンチ

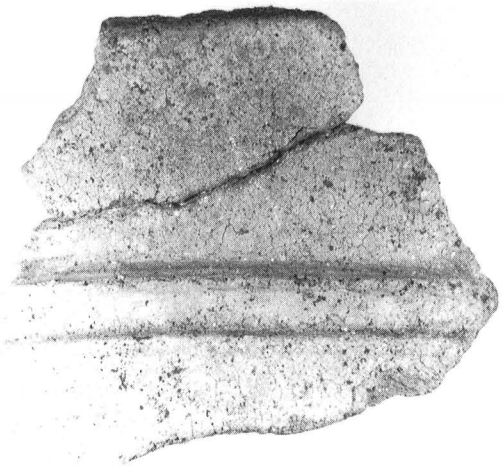
図版31　第14トレンチ全景（西から）

図版32　第14トレンチ第二段斜面葺石・樹立埴輪（南から）

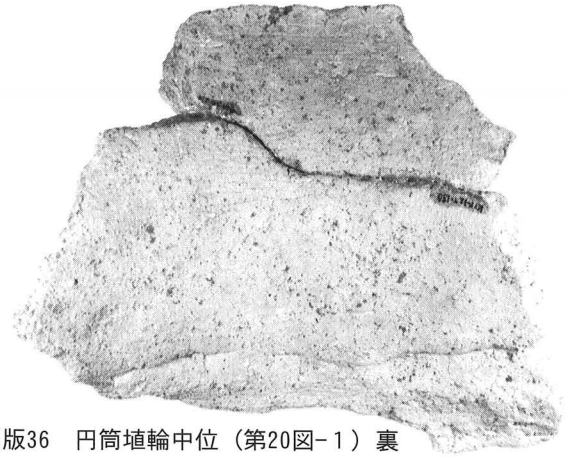
図版33　埴輪設置状況

図版34　第14トレンチ第一・二段斜面葺石（西から）

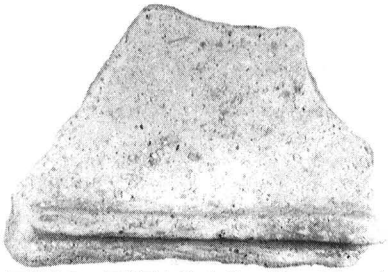
写真６　第３トレンチ拡張区・第14トレンチ



図版35　円筒埴輪中位（第20図-１）表



図版36　円筒埴輪中位（第20図-１）裏

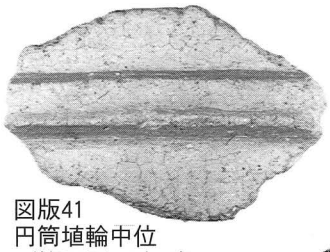


図版37　円筒埴輪中位（第21図-３）表

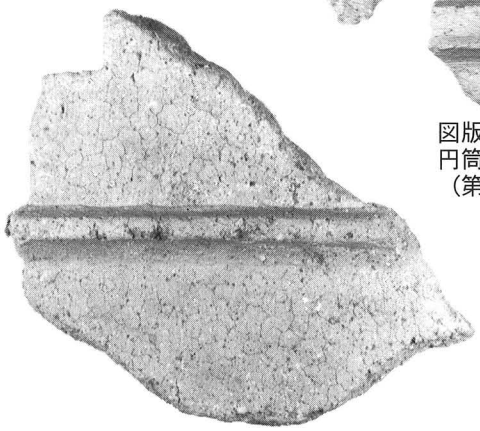
図版38　円筒埴輪中位（第20図-３）表

図版39　円筒埴輪中位 表

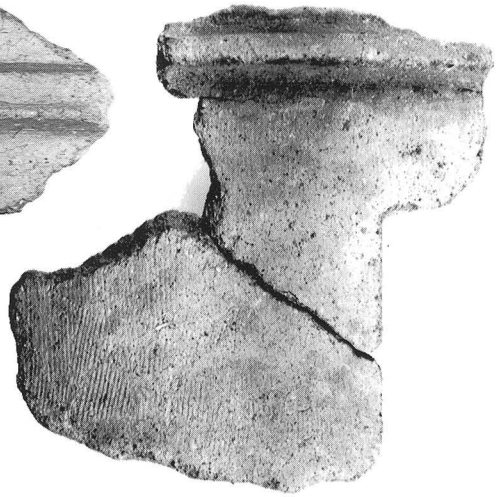
図版40　円筒埴輪中位 表



図版41
円筒埴輪中位
（第21図-１）表

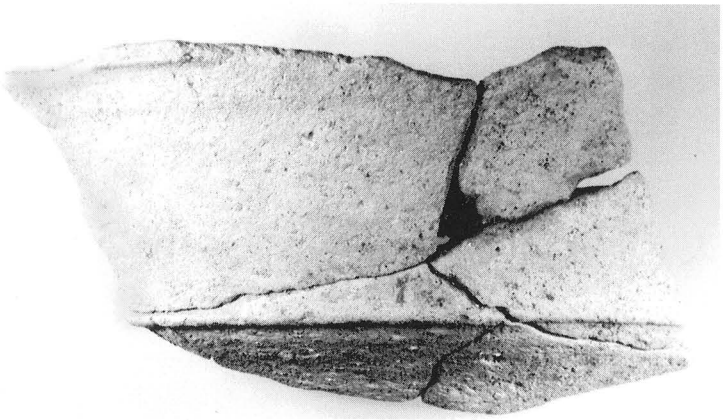


図版42　円筒埴輪中位（第20図-４）表

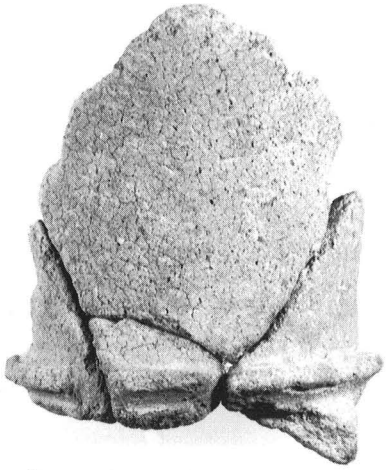


図版43　円筒埴輪中位（第20図-５）表

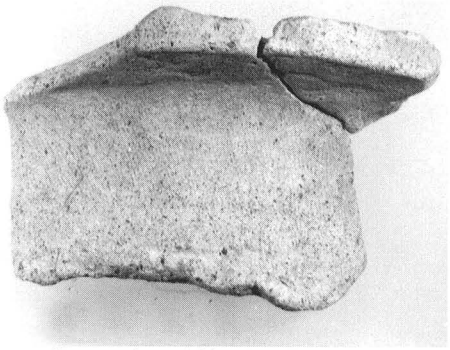
写真７　出土遺物１：円筒埴輪



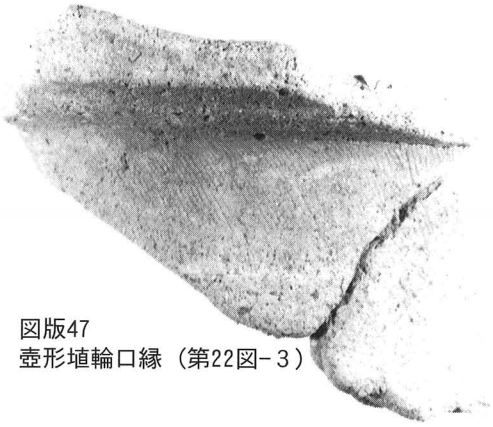
図版44　壺形埴輪口縁（第22図－１）



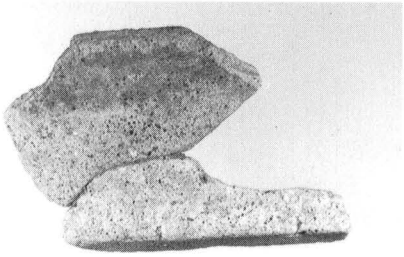
図版45　壺形埴輪頸部（第22図－５）



図版46　壺形埴輪口縁（第22図－４）

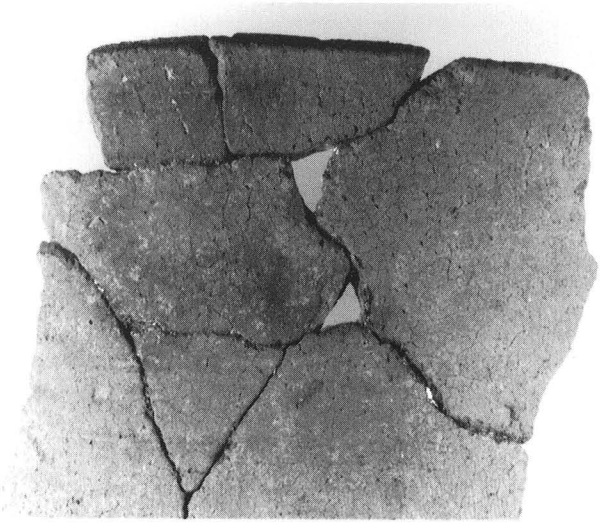


図版47
壺形埴輪口縁（第22図－３）

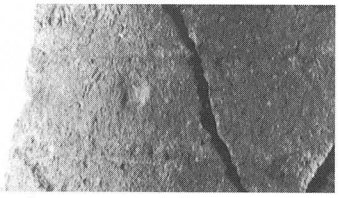


図版48　壺形埴輪口縁（第22図－２）

図版49　壺形埴輪底部（第21図－５）



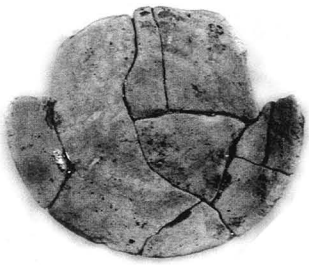
図版50　円筒埴輪口縁（第20図－２）



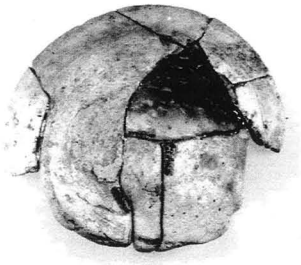
図版51　円筒埴輪口縁（第20図－２）拡大

写真８　出土遺物２：壺形、円筒埴輪

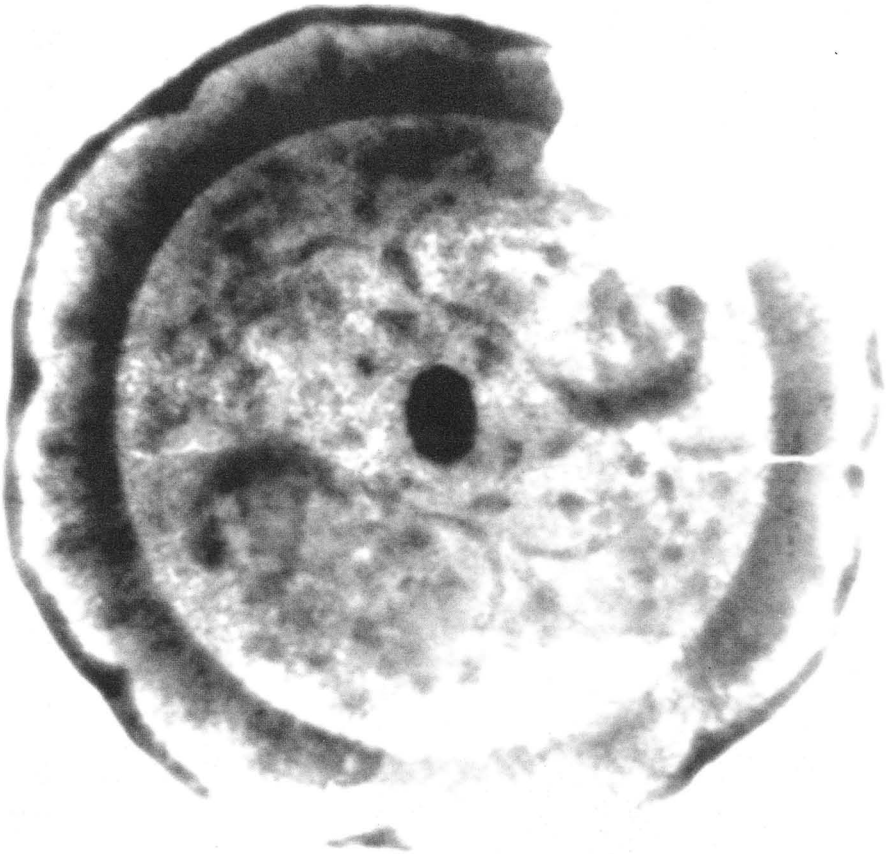
図版52　蔵骨器（第23図－３）



図版53　墓壙内出土土師器皿（第23図－２）表



図版54　墓壙内出土土師器皿（第23図－２）裏



図版55　八稜鏡

写真9　火葬墓関連遺物

第６章　平成１５年度快天山古墳確認調査概要

調査期間　　平成１５年６月２３日～平成１５年８月３１日
調査面積　　７９．４㎡

第１節　くびれ部調査区の概要

１．１５トレンチ：くびれ部西面　（第２４図　写真１０）

設定の意図：一昨年調査の２トレンチおよび昨年調査の１４トレンチで検出していた前方部西側面の段築・葺石との関係に留意しつつ、くびれ部西面の構造を確認することを目的として設定し、調査を行った。

設定位置：２トレンチの推定第二段斜面葺石基底ライン、１４トレンチの第一・第二段斜面葺石基底ラインの検出位置を考慮し、かつ現状の見かけ上のくびれ部位置と東面１１・１２・１３トレンチの所見を勘案して設定した。くびれ部における第一・第二段斜面基底ライン屈折部の確認を期待したものである。地点と規模は墳丘主軸想定ラインと直行方向、すなわち２・１４トレンチに併行して主軸推定ライン上のＫ７杭の西９ｍ南１ｍを東北隅として東西延長１１ｍとなる。当初幅２ｍで設定したが、調査進行中に葺石などの検出状況に応じて東半５ｍ部分については幅３ｍに拡張した。このため、本トレンチの最終的な調査面積は２７㎡となる。なおもっとも後円部頂に近いトレンチ南東隅の地表高７１ｍ弱、西北隅では約６６ｍと調査区全体で５ｍの比高がある。

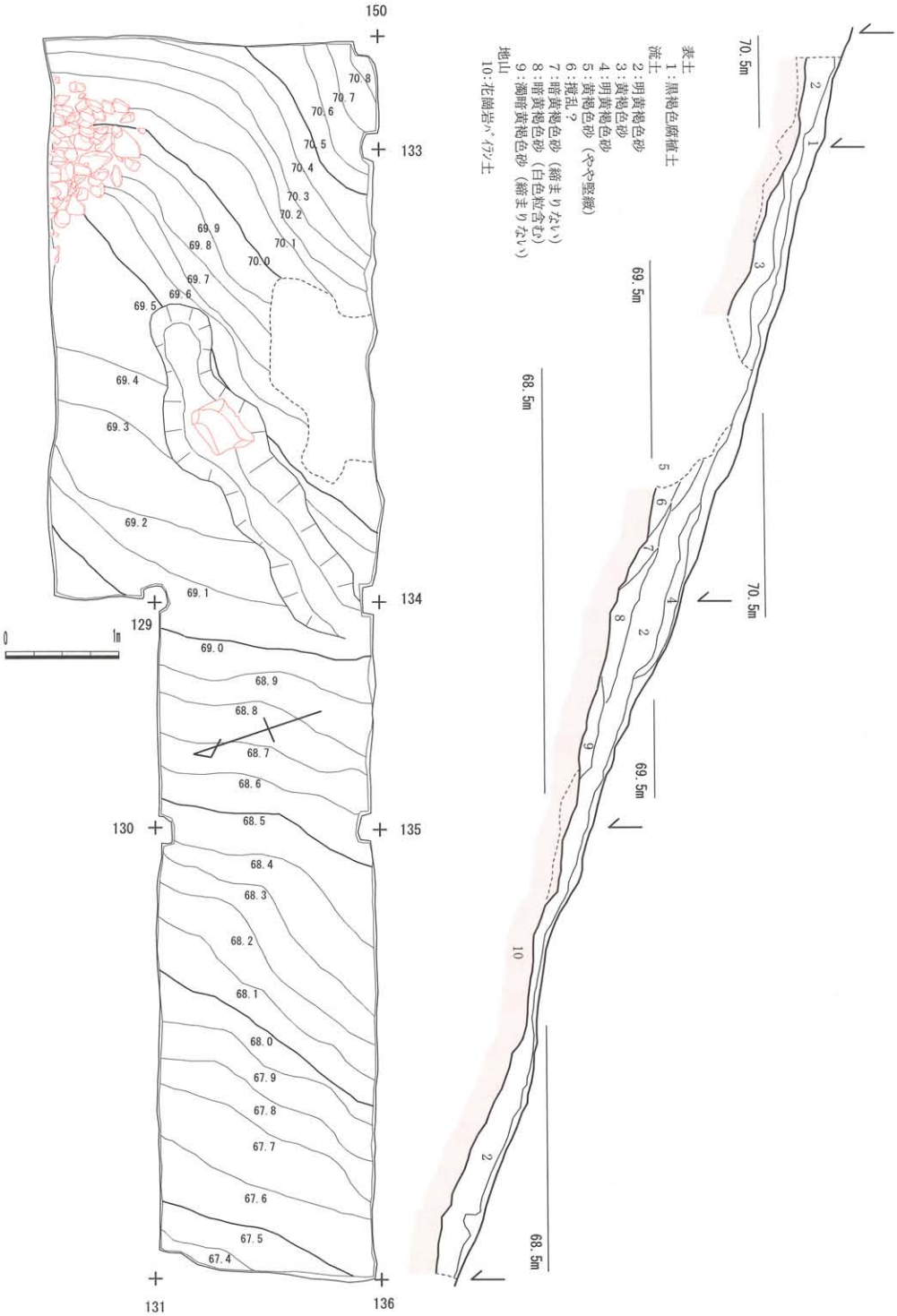
成果：トレンチ西半部の延長６ｍ分、標高６９ｍ以下の部分は１９５０年調査の報告で埴輪列の存在を指摘している地点に接するが、すでに緩やかに連続する斜面に均されている。形状から畑地に開墾されたものと見られる。このため、期待した第一・第二段斜面葺石や下段テラスはすでに削平され、痕跡もとどめない。この部分では地山直上まで比較的近年に堆積したと見られる締まりのない粗砂が続き、その間に若干の埴輪片と葺石材を検出しただけである。したがってこの地点で墳丘裾を確認することはできなかった。

調査区東半部では上段テラスの一部と、第三段斜面くびれ部の屈曲点と思われる部位を確認した。上段テラスは現状では標高６９～６９．４ｍに位置し最大幅１．４ｍが残存する。しかしその下端は上に述べた改変部に接するので、本来の規模を示すとは言い切れない。テラスは後円部墳丘に沿うように緩く弧を描きながら北東－南西にトレンチを斜行しつつ延びる。テラス上面には第三段斜面から崩落した葺石材が分厚く堆積し、比較的大型の埴輪片多数が混在する。一部は上段テラスに樹立されたものであろうが、転落石の上位に折り重なる破片も多いので後円部頂部・上位を含めて斜面上方から流入した破片も混在すると推測する。この地点で原位置に樹立された円筒埴輪の痕跡は確認していない。

さて、第三段斜面葺石は調査区北縁から延長０．９ｍ最大幅１ｍがかろうじて残存していた。配列と位置関係から前方部斜面側の葺石と推測されるものである。周辺の形状からちょうどこの残存葺石が欠落する箇所が後円部との屈折部に相当するだろう。連続する後円部斜面側では葺石はほぼ完全に脱落していた。なお葺石の脱落した上段テラスと後円部

斜面の境に緩く弧を描いて連続する不定形で浅い掘り込みを検出した。樹根撹乱の可能性も完全には否定できないが、検出した落ち込みの中程に、葺石基底石に似つかわしい辺５０㎝大の大型石材がはまり込む。これを原位置と見なせば連続する浅い掘り込みは葺石基底列の堀方と推測することも可能である。

前方部側斜面に残存する葺石は高さ０．７ｍ分最大８段分が観察される。上位部分が位置をとどめながらもテラスに接する基底部分は脱落している。残部は標高６９．５ｍ～７０．２ｍの位置にある。拳大～人頭大の亜円礫を不揃いに組み、現状の勾配は３３度と他



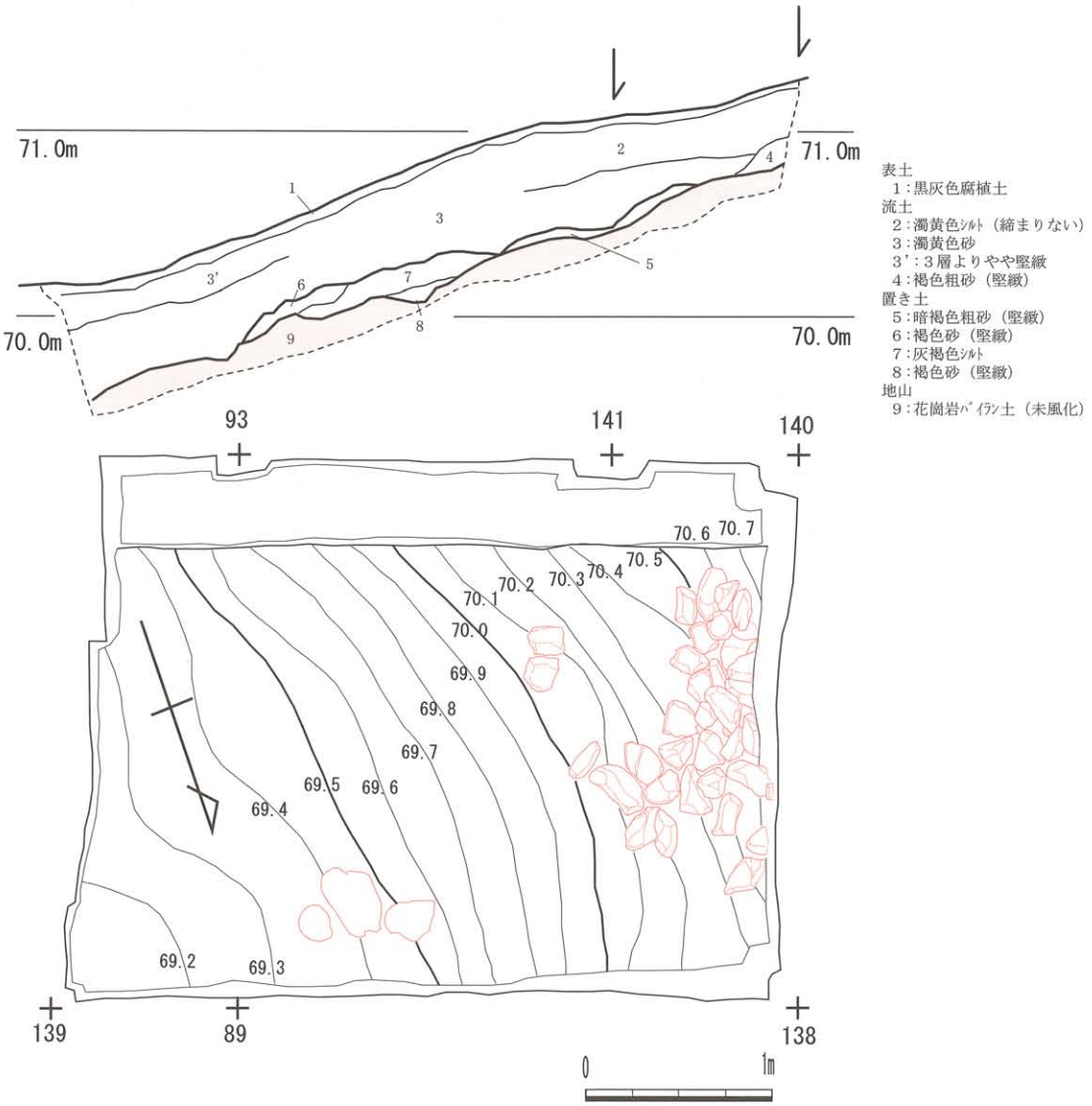
第２４図　１５トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60）

部位よりかなり傾斜がきつい。もっとも局所的な検出であるのでこの勾配置を積極的に評価することは難しいだろう。

以上から、西面くびれ部（第三段斜面基底）の位置は後円部中心点の南１９．８m、墳丘主軸ラインの西１０．８m付近と推測する。またこれにしたがえば後円部中心点からの直線距離は２２．５mを測ることになる。なお本トレンチで検出した墳丘は完全に地山を削り出し整形したものである。後円部頂に最も近いトレンチ東南隅で中心点から水平距離約１９．５m、標高７０．９mを測るが、ここまで盛土は広がっていないものと判断する。

２．１６トレンチ：くびれ部東面（第２５図　写真１１）

設定の意図：昨年の１１・１２・１３トレンチでは断片的ではあるが、前方部東面の第一・第二・第三段斜面葺石基底部およびその間に設定された上下二段の平坦面を検出することができた。さらに後者では計５本の樹立埴輪基底部を確認した。また墳丘基底ラインに限っては１１・１２トレンチ東寄りで、相当に緩やかではあるが曲折部分を検出した。本トレンチは、こうした成果を承けて墳丘東面におけるくびれ部の構造を確認する目的で設定し



第２５図　１６トレンチ平・断面図（S＝1/40）

たものである。特に第二・第三段斜面基底ライン屈折部の検出を期待した。

設定位置：上記の目的にそって１１トレンチの南に連続して、墳丘主軸想定ラインの東９ｍを西縁に東西４ｍ南北３ｍで設定した。トレンチ西南隅は墳丘中心点K１０杭の東９ｍ北１７ｍとなる。

成果：当初予想に反して、外表施設を含めた墳丘表層の流出は著しく、明瞭な形で東面第三段斜面の屈折部を確認することができなかった。しかし先年の１２トレンチなどの調査所見と本トレンチで検出した墳丘面の形状とから、おおよそ調査区南西隅から北辺中位に斜交する形で本来の第三段斜面屈折部位置を推測することができる。また非常に残りが悪く不明瞭だが、調査区東北隅に上方に比べかなり傾斜の緩い部分がある。隣接調査区の所見と併せて、この部分が上段テラスを反映するものと思われる。後円部墳丘に規制されて緩く弧を描き北西－南東に延びるように見える。この緩斜面部分（推定上段テラス部分）には転落石材・大型埴輪片が夥しく堆積する。この部分の標高は６９．２ｍ～６９．４ｍを測る。以上から墳丘勾配や傾斜方向、さらに前年度の所見を合わせ、一応東面くびれ部位置（第三段斜面基底）は後円部中心点の南２０ｍ、墳丘主軸の東１１．２ｍと推定しておきたい。また墳丘中心点からの直線距離は２０ｍとなる。ちなみにこの数値は、標高値を含め、前節で推測した１５トレンチ検出西面くびれ部位置（第三段斜面基底）とかなり整合的なものである。

これより上位の第三段斜面部と推測する墳丘（後円部側）の斜面勾配は２５度を測る。また斜面中位に設定した調査区でありながら、墳丘面は現地表下０．４～０．６ｍに埋没している。堆積土量の多さは墳丘崩落の甚だしさを反映するものといえるだろう。この点と関連して流土中に包含される葺石材はテラス上部の堆積を除けば全体として多くないことが気に掛かる。墳丘あるいは周辺の再利用と関連して古い時期に除去された可能性も考慮すべきではあろうが、後円部斜面を含め墳丘上位部分の葺石被覆の充実度を検討する材料の一つである。

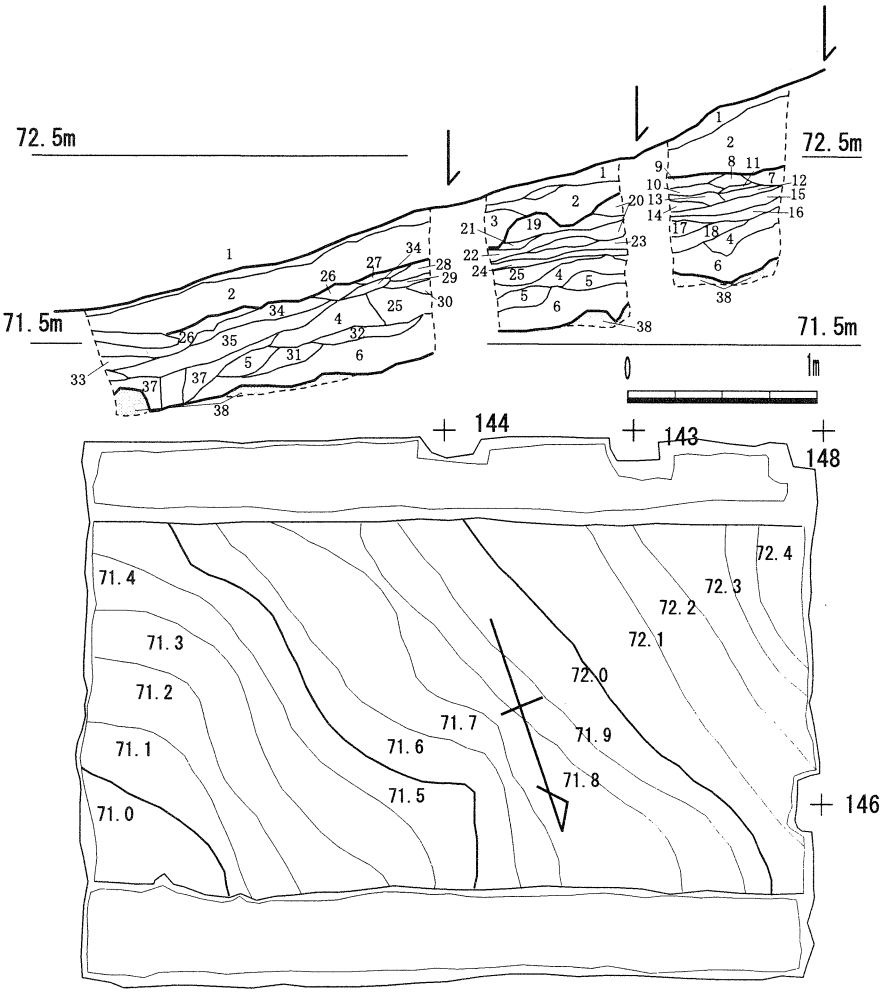
さて、本調査区に隣接する１２トレンチでかなり良好に第三段斜面葺石の遺存を確認したが、ここではほとんどが脱落している。わずかに調査区西辺中央部に接するように局所的に残存する。南北最大１．７ｍ東西１ｍで三角形状に残り、人頭大以上のやや大振りの円礫を主体とする。配列はかなり粗雑であるが、残存状況からみてもすでに多少ずれ込んでいるかもしれない。標高７０．１～７０．７ｍ　高さ０．６ｍ最大五段分となる。この他推定テラス部に接する位置に１．２の大型石材がある。葺石基底石の可能性がある。

１７トレンチの所見を承けて本調査区でも南辺に断ち割り区を設定して墳丘築成状況を追跡した。明瞭な花崗岩バイラン土壌の地山面直上に、肌理が細かく堅緻で多少の炭灰細粒の混入を推測させる暗色土が層厚５～１５㎝で断続的に広がる。上部の締まりのない明らかな流土層とは区分できる土質である。細片を含め本層には全く遺物を混入しない。１７トレンチ他で検出した盛土層の様態と異なるし確認位置もかなり低くなるが、墳丘斜面の形状補正や葺石配列に伴う置土の可能性を考慮しておきたい。

３．１７トレンチ：後円部北東斜面上位（第２６図　写真１２）

設定の意図：昨年の３トレンチ拡張区では後円部頂から西面の墳丘築成状況、とくに盛土

範囲とその様態を把握することができた。本トレンチでは後円部東北面方向、つまりくびれ部に向かう盛土の広がりを確認することを第一の目的とした。さらに地表面観察などから望み薄ではあったが、西面の３トレンチ拡張部を含めてこれまで確認できていなかった後円部斜面外表施設の痕跡を検出することをも期待した。



表土　　流土
1 黒灰色腐植土　2 濃黄色粗砂層
盛土
3 褐色粗砂礫
4 黒灰色土（炭・灰片を含む）ﾌﾞﾛｯｸ＋地山土ﾌﾞﾛｯｸ　5 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土ﾌﾞﾛｯｸ　6 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土ﾌﾞﾛｯｸ（風化進む）
7 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）　8 黄灰色土　9 黄灰色ｼﾙﾄ＋黒色土　10暗灰色土（炭・灰片を少量含む）
11: 黒灰色土（炭・灰片を含む）　12: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）　13: 白色粒を多く含む暗灰色ｼﾙﾄ
14: 黒灰色土（炭・灰片を含む）＋赤褐色砂礫　15: 黒灰色土（炭・灰片を含む）＋褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ
16: 黒灰色土（炭・灰片を含む（堅緻）　17: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）
18: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）＋褐色ｼﾙﾄﾌﾞﾛｯｸ　19: 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土ﾌﾞﾛｯｸ　20: 白色粒を多く含む暗灰色ｼﾙﾄ
21: 黒灰色土（炭・灰片を含む）　22: 黄灰色ｼﾙﾄ　23: 黒灰色土（炭・灰片を含む）　24: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）
25: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む　締まり弱い）　26: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）　27: 黒灰色土（炭・灰片を含む）
28: 白色粒を多く含む暗灰色ｼﾙﾄ　29: 黒灰色土（炭・灰片を含む）　30: 黒灰色土（炭・灰片を含む 堅緻）
31: 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土ﾌﾞﾛｯｸ（風化進む）　32: 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土ﾌﾞﾛｯｸ（細粒）　33: 黒色土（炭・灰片を多量に含む）
34: 黒灰色土（炭・灰片を含む）35: 白色粒を多く含む黒灰色土（炭・灰片を含む）　36: 黒色土（きわめて堅緻）
37: 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土地山に酷似するが濁る
地山
38: 花崗岩ﾊﾞｲﾗﾝ土（局部的に風化の度合異なる）

第２６図　１７トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/40）

設定位置：前方部頂平坦面の標高とほぼ等しい後円部東北斜面の上位に位置する。１６トレンチの南に併行して２ｍの間隔で南北（主軸方向）３ｍ、東西４ｍの調査区を設定した。墳丘主軸想定ラインの東８ｍを西辺とし、Ｋ７杭の東８ｍ南６ｍが本トレンチ西北隅となる。

調査区は後円部東北斜面の傾斜方向に斜交する形となるので、南西隅が最も高く、東北隅は１．５ｍほど低くなる。

成果：本調査区周辺の地表面観察では後円部墳丘南半部と異なり、明瞭な畑地開墾の形跡が読み取れなかったにもかかわらず、テラス、葺石などの外表施設は全く検出できなかった。また埴輪などの遺物もほとんど出土しない。残存墳丘面の上部に薄く堆積する流土層

にもほとんど転落石材などを含まない。

本トレンチの調査では表層付近の明らかな流土を除去した段階でトレンチ南西部、つまりより後円部頂に近い斜面上方より部分で地山土とは多少異なる土質の広がりが見出されたため、トレンチの南北辺に小規模な断ち割り区を設定して詳細確認を試みた。その結果、トレンチ南半では０．４～０．５ｍの厚さで盛土を確認した。しかし前方部寄りで低い北辺までは及んでいない。トレンチ西南隅で標高７２ｍ以高、東南隅で７１．１ｍ以高が盛土となる。つまり先年の３トレンチと同様に旧地形の上面を大きく均すことなく、自然的な起伏をとどめたままその上部に盛土を積み上げる。この所見に基づけば、後円部墳丘東北方向では盛土の範囲は中心点から１７ｍ以上２０ｍ未満となる。

盛土層は後円部西斜面３トレンチの構成と同様に、風化花崗岩片を多く含む地山土ブロック、肌理が細かく比較的堅緻な淡黄色土、炭灰を練り込んだと見られるきわめて堅緻な黒灰色土の三者を概ね互層に積む。各層は厚さ５㎝内外と薄く層長も０．５～０．８ｍと比較的細かい単位となる。もっともトレンチ西半部、斜面上方部分ではこの中でも各単位は比較的細かく交互にかつ緻密に積むが、東半部では単位がやや大きくやや粗雑な感がある。こうした地点による盛土築成状況の微妙な差異は先の３トレンチでも観察した点である。なお検出した盛土面の勾配は約２４度を測る。

第２節　くびれ部調査区出土遺物の概要

１．快天山古墳関係遺物（第２７～３３図　表１　写真１３～１７）

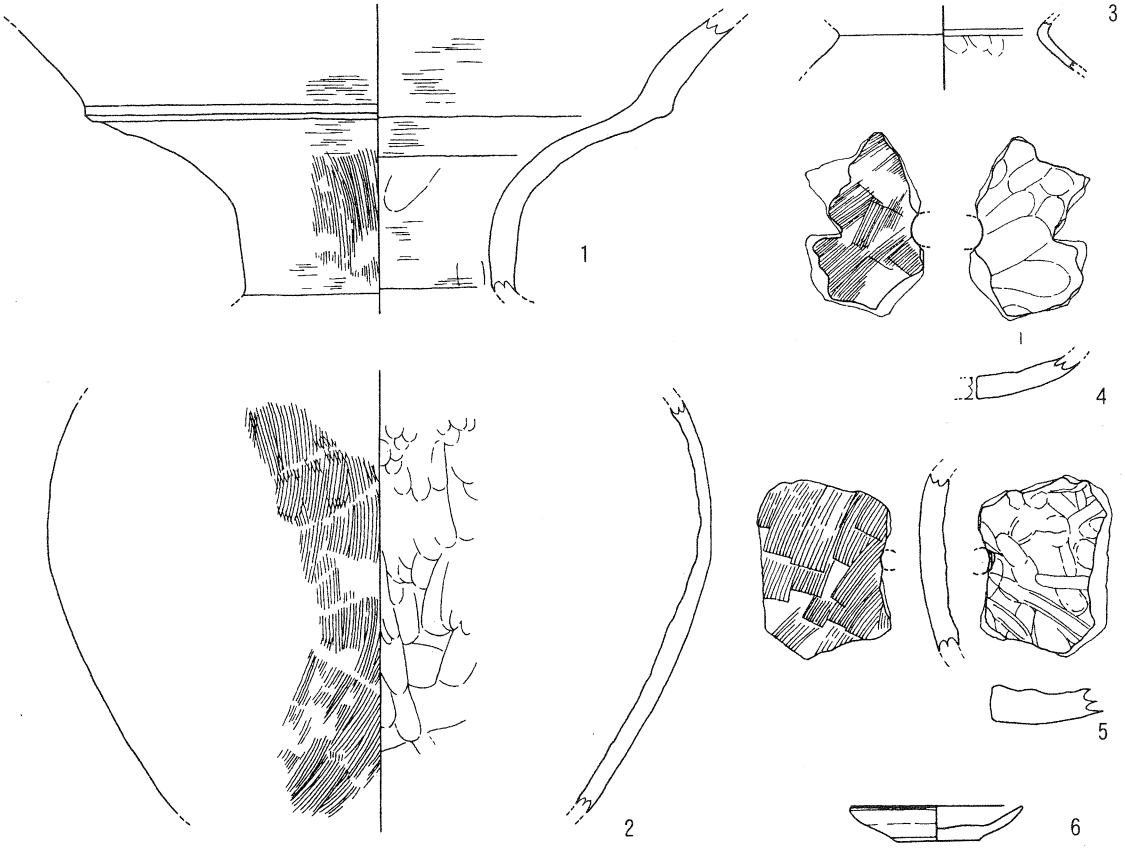
今年度の調査では１８ℓコンテナで約８箱分の遺物が出土した。ただし樹立状態をとどめた資料もなく全体が細片化しているため、接合作業で旧状の復元を試みたが部位・寸法などの判明した資料は多くない。以下ではこれらのうち、１５トレンチ１６点　１６トレンチ１７点を中心に報告する。わずかな細片の出土にとどまった１７トレンチ他の資料は掲載していない。随って今回報告資料の大多数は東西両くびれ部の上段テラスに流入・堆積した資料群と言うことになる。上段テラスに本来樹立・配列された埴輪などに加え、後円部上方から転落した資料を相当数含むものと思われる。

また詳細な破片数の比較は行っていないが、隣接地点でありながら昨年度の前方部東面資料に比べて壺形埴輪がやや少ない印象を受ける。埴輪以外では小型甕などの小片若干を見るだけで既往調査と同様に土師器各種はごく微量である。また後世混入資料では平安期に下るものと思われる土師質小皿がある。これまでも各所から奈良時代後期～平安期の土器細片出土　昨年度検出した火葬墓をはじめとする古代における再利用の一端を示すものといえよう。

壺形埴輪（第２７図）

一昨年度調査で出土した壺二重口縁部片に比べかなり大型厚手の口縁部片が目立ったことから、昨年度概報では朝顔形埴輪の存在について再検討すべきことを示唆した。しかし今年度調査でもその確証が得られなかった。またこのことに加えて既出土資料よりかなり厚手で、曲面の具合などから口縁部に見合った大型の体部を想定しうる破片が新たに出土した点を重視すれば、やはり朝顔形埴輪の存在は認めがたいと考える。この点昨年度概報で示した見通しを撤回しておきたい。

大型二重口縁部片の第８図１は頸部上半から外反を強めて緩やかに口縁部に至る。口縁立ち上がり部は強く外反して分厚い。端部を欠失するがさほど長く延びないように見える。体部片第２７図２は最大径位置の高いやや長胴に復元したが、小片のため傾き・体径は確定的ではない。外面に赤色顔料の付着を見る。第２７図４・５は径１０～１５㎜大の焼成前穿孔の一部を残すので壺形埴輪底部片と推定した。穿孔手法と形状は一昨年度調査資料と同様である。しかし器厚と曲面の具合から大型の体部を想定しうるものである。１・２は黄白色系の色調・胎土を有するが、４・５は粗砂粒の目立つ橙色ないし褐色系の色調を呈する。



第２７図　壺形埴輪（Ｓ＝1/4）

小型甕（第２７図）

小片のため詳細は不明であるが、小型の土師器甕と推測する。この他にこうした埴輪以外の小型器種細片若干が出土しているがいずれも器種などは特定できない。焼成・胎土から快天山古墳築造時期の所産と推測する。

土師質小皿（第２７図）

15トレンチの上段テラスに流入堆積した埴輪片・葺石材に混在して出土した小片である。立ち上がりはわずかに内湾気味に長く延びるので、土師質小皿としては古相のものであろう。底部外面に回転箆切り痕を残す。

円筒埴輪（第２８～３３図）

今次調査では口縁部資料を比較的まとまって得ることができた。また中位段の大型片で透かし孔配置や突帯間隔に関するデータを多少補強することができたが、以前として円筒埴輪の全形を復元することは困難である。

円筒埴輪の諸要素については、少数例ではあるがこれまでの長方形透かし孔と相違する形状を確認した他は、概ね既知データと異なる部分はない。ただし、今回報告する東西両くびれ部（概ね上段テラス以上の墳丘上半部）出土資料では、これまでとは異なり、黄白色系の胎土・色調を有し内面箆ケズリを多用する個体が目立って少ない。この点は今後の詳細な検討を要するが、今回報告資料に後円部墳丘転落資料が少なからず含まれると推測されることを重視すれば、興味深い傾向といえるだろう。

口縁部（第２８図）

円筒埴輪の最上段口縁部の口径は４０cm弱～４５cm前後を測る。大小２タイプがありそうだが現状では断定しがたい。先端部はいずれも強く外反して短く延びる。多くは最上段高５cm内外と短いが第２８図６はやや長い。この部分に透かし孔を穿つものはない。口縁端の内外いずれかをわずかにつまみ出す傾向があるが目立ったものではない。外面は一次縦ハケの後に横ナデを加えるがその充実度は差異が大きい。もっとも第２８図５のように外面横ナデを欠くものは今のところ例外的である。また第２８図２のように調整横ナデが第二段以下に及ぶ例も少ない。口縁部内面には横ハケを加える。中位段資料でも同様であるが、突帯の断面形状は見かけ上変化に富む。しかしいずれも上下側面および頂面を強くなでつけて器体との密着を図っており、微妙な力加減で突出度や細部形状に差異が生じているようだ。第２８図５では最上段突帯が剥落するが、貼付部分に刺突痕とおぼしき不定形な小さい凹みが観察される。

中位段（第２９～３２図）

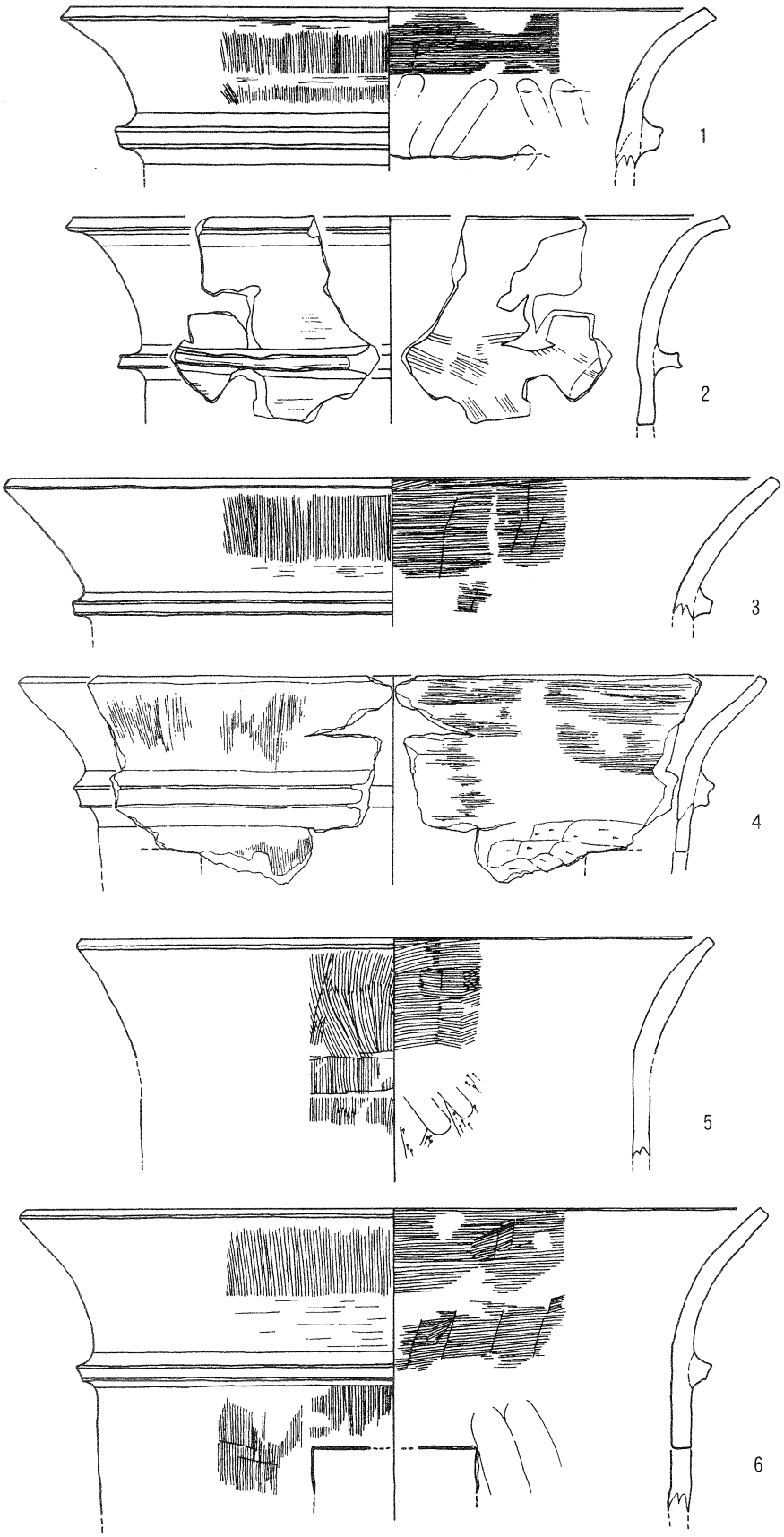
突帯間隔、つまり一段の高さを計測できた若干例では１１～１３cmとかなり規格的である。また円筒埴輪中位部の径（突帯部分で計測）は３３～４３cmまでの幅があるが、部位による変異を考慮すれば口径や底径と矛盾するものではない。

透かし孔は長方形を基調とするが、第２９図３、第３２図５では長方形と三角形透かし孔が共存する。これまでの調査でも小片でハケ調整の方向などから三角形透かし孔の可能性がうかがわれる資料若干が存在したが、明確な三角形透かし孔例は今次調査資料ではじめて確認した。現状では詳細な分析を行っていないが９割以上は長方形透かし孔であろう。また第３１図４では円弧の１／３弱をとどめた透かし孔を見る。半円形の可能性が高い。今次調査資料でも透かし孔は四方／段が多そうである。また一昨年の調査資料では交互配置を確認しており、今次資料でも第２９図４、第３０図４、第３１図１などは同様であるが、第２９図３・４、第３２図５では明らかに縦列配置となる。交互配置と縦列配置の比率は確認例数が乏しく明らかではない。

突帯の形状は口縁部で述べたように一定の差異を含むが概ね台形様で器体との接合は丁寧である。第３１図１のように小型のものや、第３２図１のように細身で突出度の高いものは多くはない。なお第３１図４では突帯貼付位置に明瞭な方形刺突を見る。

中位段の外面調整は一次調整の縦ハケばかりで横ナデ他の二次調整はない。また概ね５条／cm前後の比較的細かなハケ調整が多い。一方、内面調整は今次資料では縦方向あるいは斜位の指ナデ調整が多く、箆ケズリを施す例は少ない。また第３０図１のように局部的に内面に横ハケ調整を施す例も多くはない。

第３２図５では細い箆描沈線で表現した線刻文がある。二ないし三条の平行線から構成

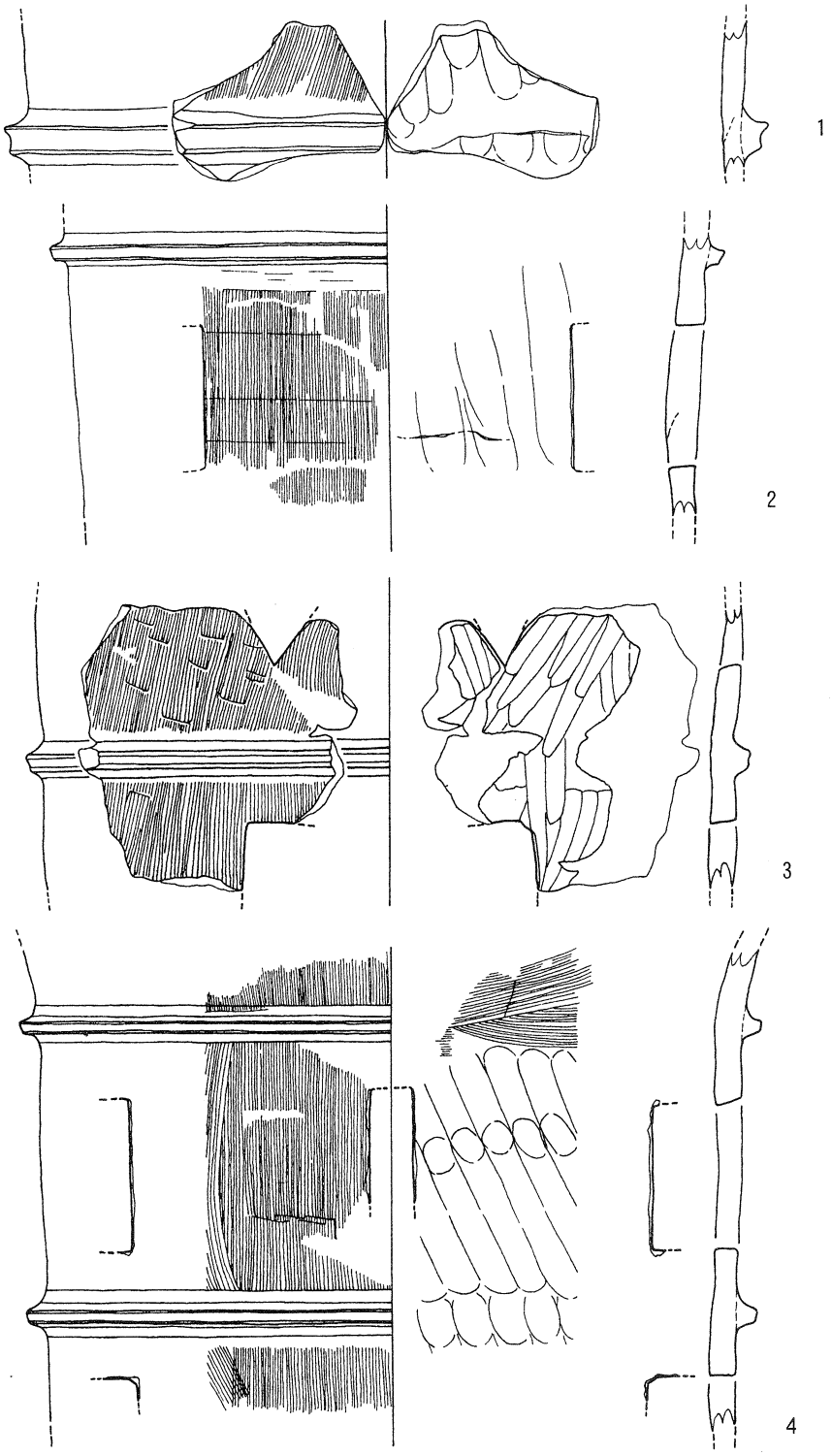


第２８図　円筒埴輪１（Ｓ＝1/4）

される弧帯文の一部とも見えるが全体の構図は不詳であるし、表現もかなり粗雑である。昨年度資料に続き円筒埴輪線刻文は二例目となる。

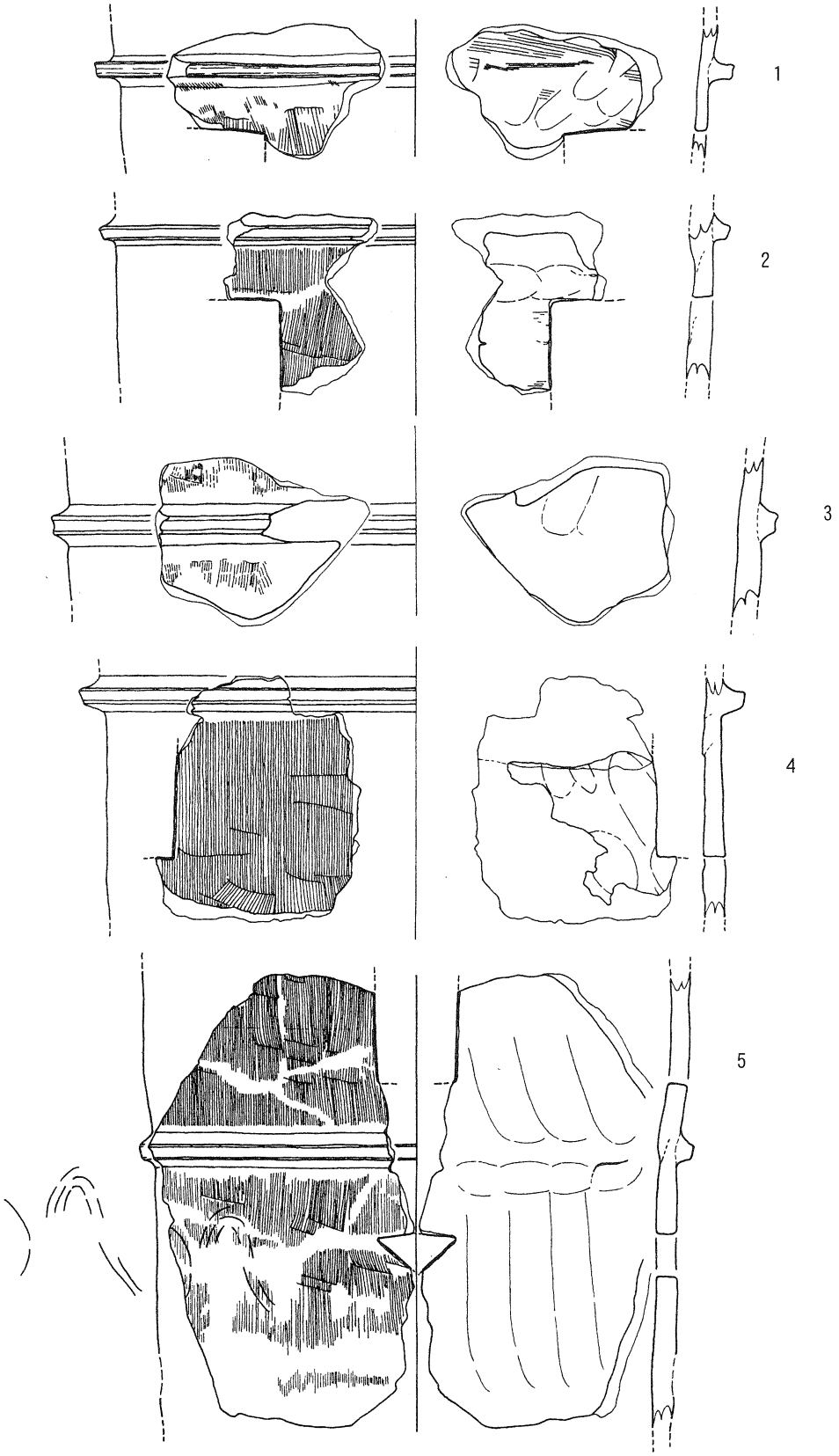
底部（第３３図）

計測した底径データでは２４～４２cm大と他部位よりも差異が大きいが、計測例数が少なく積極的な評価は難しい。また以下に述べるように、おそらく自重の負荷による歪みが



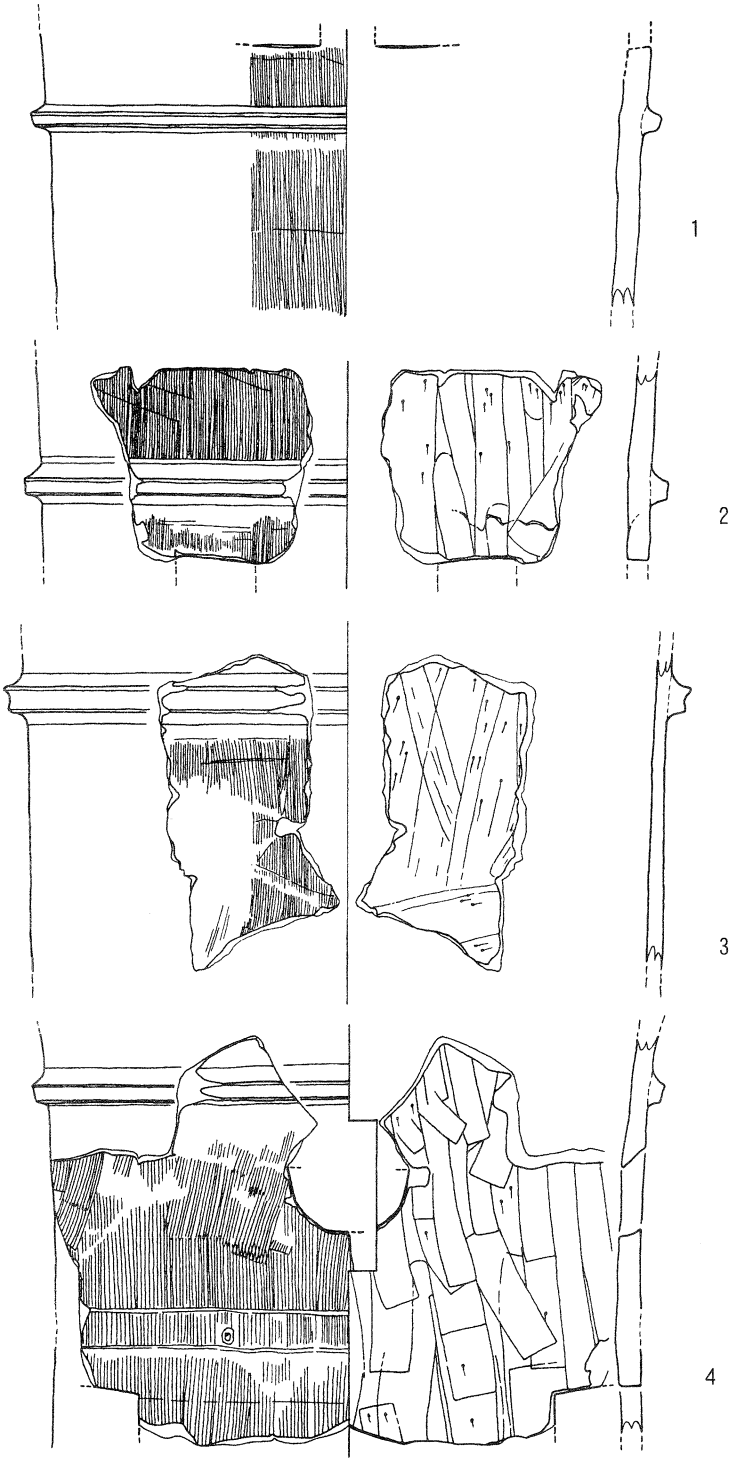
第２９図　円筒埴輪２（Ｓ＝1/4）

個体差を増幅しているものと推測する。また最下段高は計測し得た唯一例では１７cmを測り、他にも１５cm以上と推測しうる例が認められるので、中位段の１．５倍内外の高さを

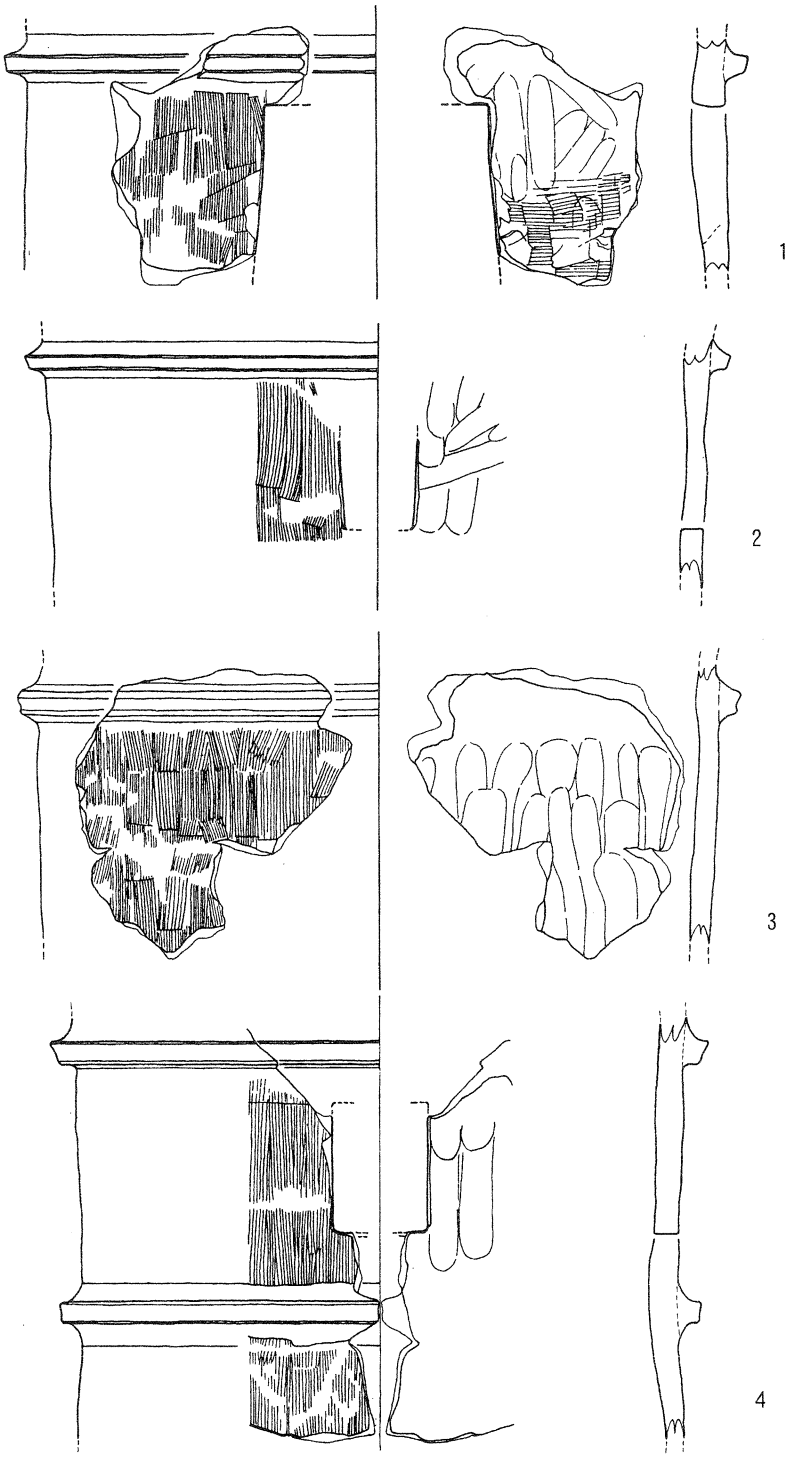


第３０図　円筒埴輪３（Ｓ＝1/4）

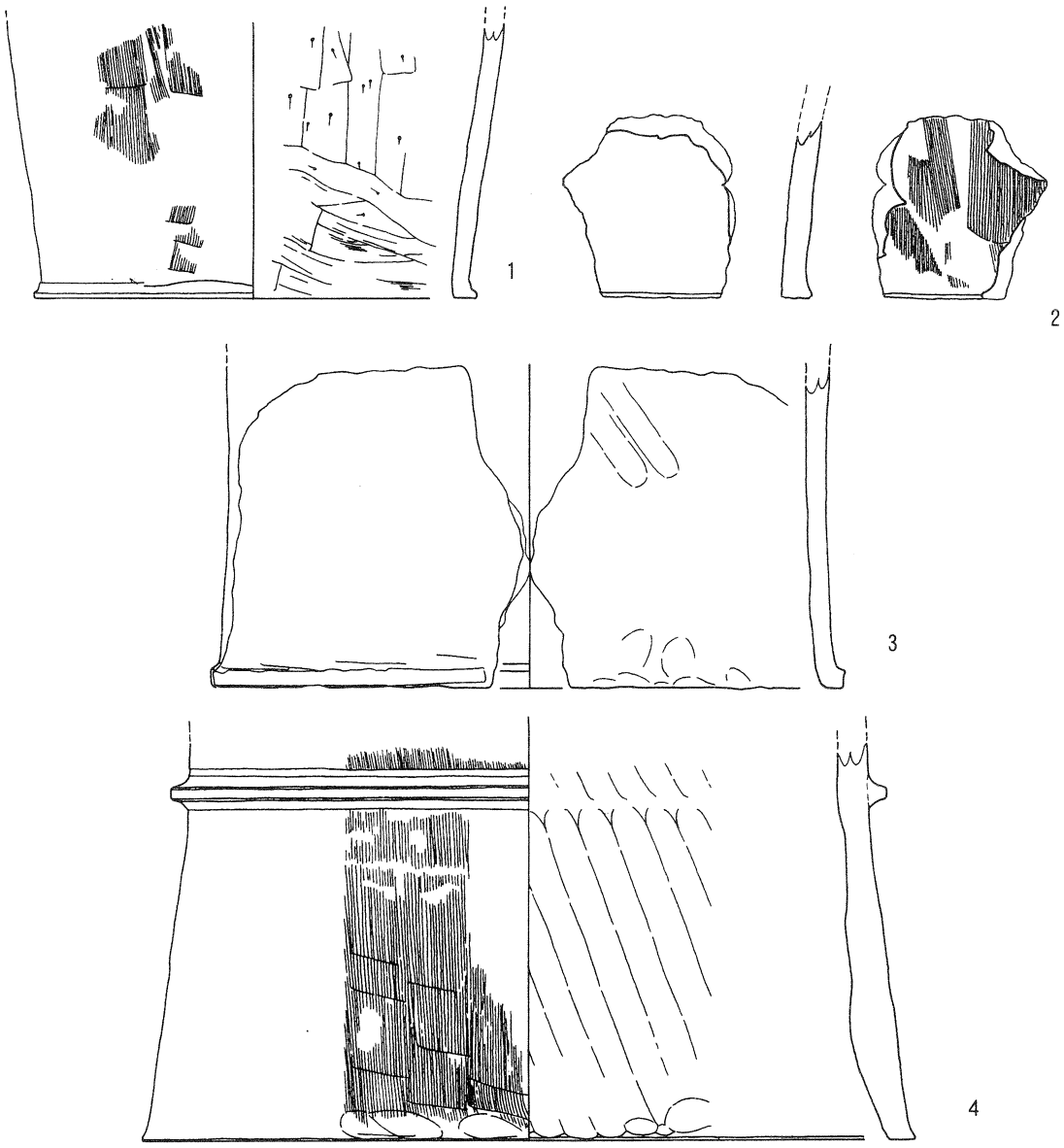
持つものと思われる。下端は自重で潰れるものが多い。外面は縦ハケ調整を基調とし、内面は斜位もしくは縦位の指ナデが多い。内面にケズリ調整を加えるものは第３３図１だけである。また同資料では内面下端に横ケズリを加え、同図４では外面下端に連続的な指押さえ痕を観察するが、裾部の変形・歪みの補正を意図したものであろうか。



第３１図　円筒埴輪４（Ｓ＝1/4）



第３２図　円筒埴輪５（Ｓ＝1/4）



第３３図　円筒埴輪６（Ｓ＝1/4）

第３節　平成１４年度調査成果補遺

平成１４年度の３トレンチ拡張部（後円部西面）および、１４トレンチ（前方部北半西面）については、すでに同年度概報で概要を示したが、調査実施時期との関係上、成果を詳細に図示する余裕がなかった。ここで３・１４トレンチ成果を図示すると共に、該当部分の概要報告を再掲しておきたい。

１．３トレンチ拡張部（第３４図）

設定の意図：後円部墳丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畑地開

墾の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した３トレンチ東端から墳頂平坦面西縁までの間（３２杭～１１２杭間）に、東西延長１５ｍ幅２ｍで３トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅緻に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも３トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凹凸が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅緻な盛土面が検出できたが、墳丘下半では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から１０．８ｍ（中心点から１７．８ｍ）まで標高７０ｍ以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んでも後円部墳丘では４ｍ内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているように見えるが、本来的には今少しは盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えているが、現状では上記したように局部的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からややまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確実に原位置をとどめると判断されるものが全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

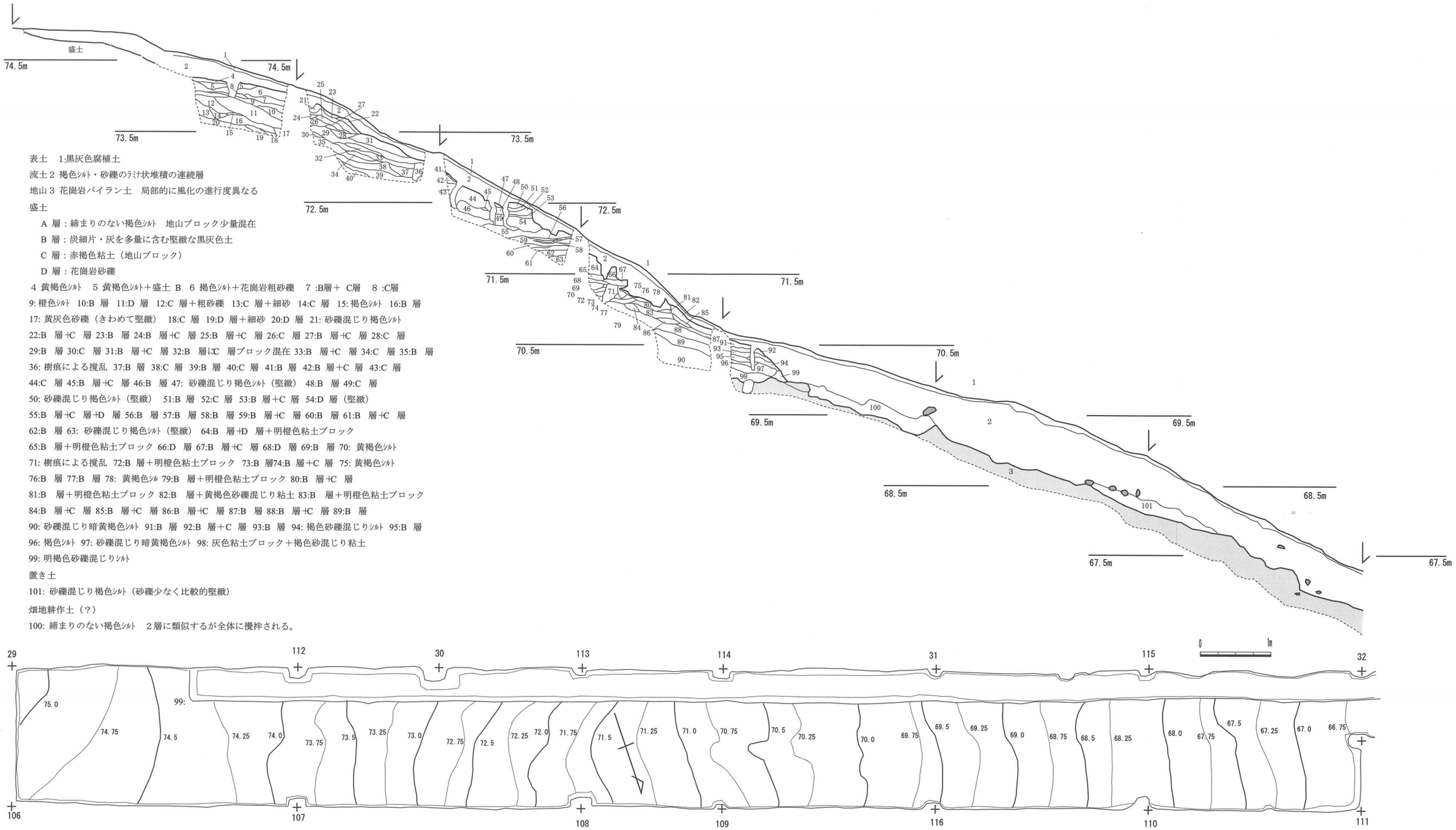
さて確認した盛土層の大部分ではａ炭片を多く混入する砂礫混じり黒灰色粘土、ｂ明橙色粘土、ｃ多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の３者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩バイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局部的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅緻に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層に敷かれた置き土とは全く異なっている。

なお、昨年度の３トレンチ東端で地山直上で盛土層の可能性がある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので、訂正しておきたい。

２．１４トレンチ（第３５図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存すること期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と７トレンチで確認した前方部前端区画溝との中間地点にほぼ相当する主軸上に設定した１１８杭の西９ｍを南東隅として幅２ｍ東西延長１２ｍの



表土　1:黒灰色腐植土

流土２ 褐色ｼﾙﾄ・砂礫のﾗﾐﾅ状堆積の連続層

地山３ 花崗岩バイラン土　局部的に風化の進行度異なる

盛土

A 層：締まりのない褐色ｼﾙﾄ　地山ブロック少量混在

B 層：炭細片・灰を多量に含む堅緻な黒灰色土

C 層：赤褐色粘土（地山ブロック）

D 層：花崗岩砂礫

４ 黄褐色ｼﾙﾄ　５ 黄褐色ｼﾙﾄ＋盛土 B　６ 褐色ｼﾙﾄ＋花崗岩粗砂礫　７ :B層＋ C層　８ :C層

9: 橙色ｼﾙﾄ　10:B 層　11:D 層　12:C 層＋粗砂礫　13:C 層＋細砂　14:C 層　15: 褐色ｼﾙﾄ　16:B 層

17: 黄灰色砂礫（きわめて堅緻）　18:C 層　19:D 層＋細砂　20:D 層　21: 砂礫混じり褐色ｼﾙﾄ

22:B 層＋C 層 23:B 層 24:B 層＋C 層 25:B 層＋C 層 26:C 層 27:B 層＋C 層 28:C 層

29:B 層 30:C 層 31:B 層＋C 層 32:B 層にC 層ブロック混在 33:B 層＋C 層 34:C 層 35:B 層

36: 樹痕による撹乱　37:B 層　38:C 層　39:B 層　40:C 層　41:B 層　42:B 層＋C 層　43:C 層

44:C 層 45:B 層＋C 層 46:B 層 47: 砂礫混じり褐色ｼﾙﾄ（堅緻）　48:B 層 49:C 層

50: 砂礫混じり褐色ｼﾙﾄ（堅緻）　51:B 層　52:C 層　53:B 層＋C 層　54:D 層（堅緻）

55:B 層＋C 層＋D 層 56:B 層 57:B 層 58:B 層 59:B 層＋C 層 60:B 層 61:B 層＋C 層

62:B 層 63: 砂礫混じり褐色ｼﾙﾄ（堅緻）　64:B 層＋D 層＋明橙色粘土ブロック

65:B 層＋明橙色粘土ブロック 66:D 層 67:B 層＋C 層 68:D 層 69:B 層 70: 黄褐色ｼﾙﾄ

71: 樹痕による撹乱　72:B 層＋明橙色粘土ブロック　73:B 層74:B 層＋C 層　75: 黄褐色ｼﾙﾄ

76:B 層 77:B 層 78: 黄褐色ｼﾙ 79:B 層＋明橙色粘土ブロック 80:B 層＋C 層

81:B 層＋明橙色粘土ブロック 82:B 層＋黄褐色砂礫混じり粘土 83:B 層＋明橙色粘土ブロック

84:B 層＋C 層 85:B 層＋C 層 86:B 層＋C 層 87:B 層 88:B 層＋C 層 89:B 層

90: 砂礫混じり暗黄褐色ｼﾙﾄ 91:B 層 92:B 層＋C 層 93:B 層 94: 褐色砂礫混じりｼﾙﾄ 95:B 層

96: 褐色ｼﾙﾄ 97: 砂礫混じり暗黄褐色ｼﾙﾄ 98: 灰色粘土ブロック＋褐色砂混じり粘土

99: 明褐色砂礫混じりｼﾙﾄ

置き土

101: 砂礫混じり褐色ｼﾙﾄ（砂礫少なく比較的堅緻）

畑地耕作土（？）

100: 締まりのない褐色ｼﾙﾄ　２層に類似するが全体に撹拌される。

第３４図　３トレンチ平・断面図（S=1/60）

調査区を設定した。昨年度設定した２トレンチと１８ｍの間隔で並行し、トレンチ北壁は前方部前端区画溝から約１２．５ｍ南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を４ｍ幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前方部前半部ではおおよそ標高６９．５ｍ以高の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

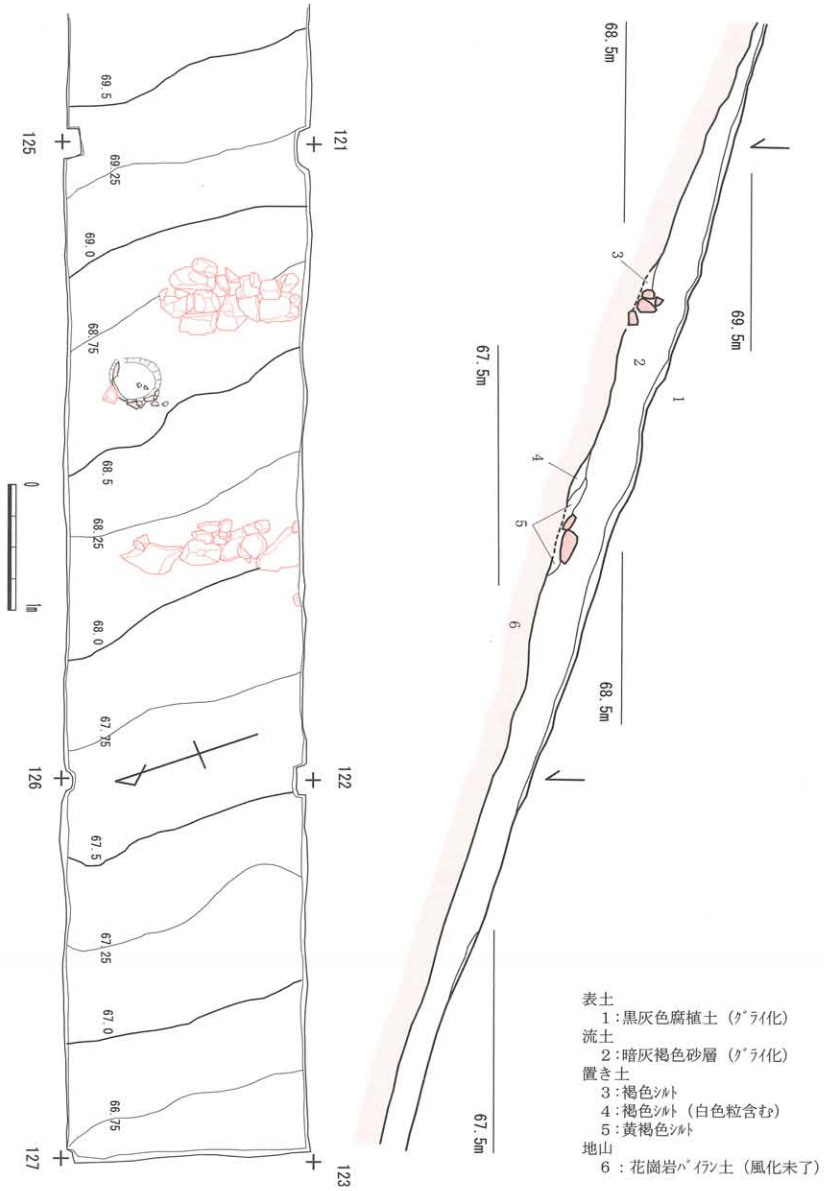
成果：したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高６９．５ｍ以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

第一段石列

主軸から水平距離１６．４ｍでほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から１．５ｍほどが遺存する。基底レベルは６８．０～６８．１ｍとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅５０㎝大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね２０～３０㎝大の段を形作る。

第二段斜面葺石

主軸から水平距離１４．４～５ｍでほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出した。トレンチ南端から約１．２ｍほど遺存し基底レベルは６８．６５～６８．７５ｍと、第一段石列と同程度にわずかに北に向かって迫り上がる。基底石は第一段石列よりやや小振りな人頭大の大型石材を概ね横向きに並べ、その上には小児頭大～拳大の礫を斜めに差し込むように重ねる。最大５段分幅６０㎝ほどが残存する。なおこの地点では第一段石列を含め使用石材は安山岩自然礫ばかりであっ



第３５図　１４トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60）

た。

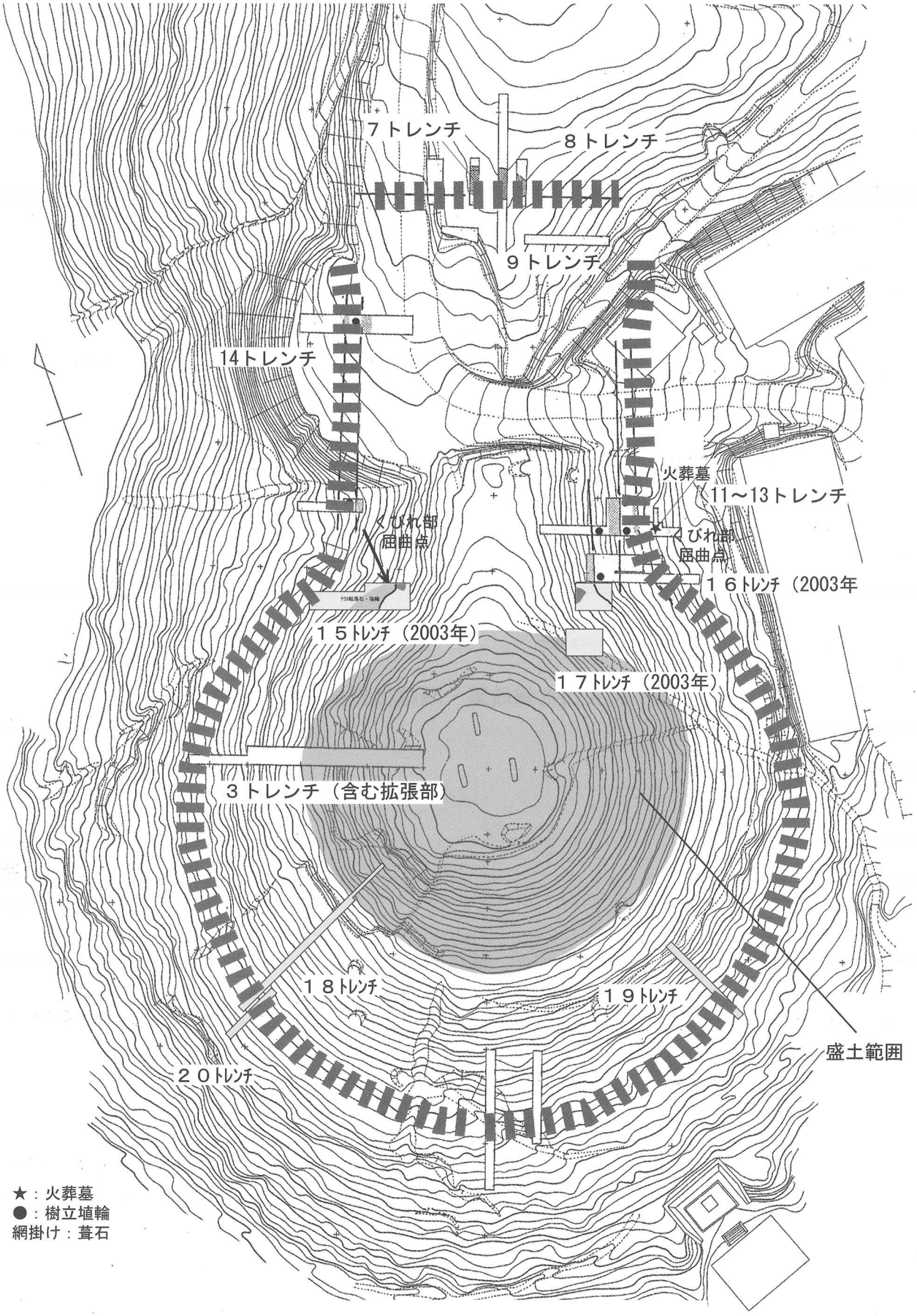
下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅１．５m比高０．４mほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレンチ北半で第二段葺石基底と２０cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り窪めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小礫を詰めていない点も相違している。

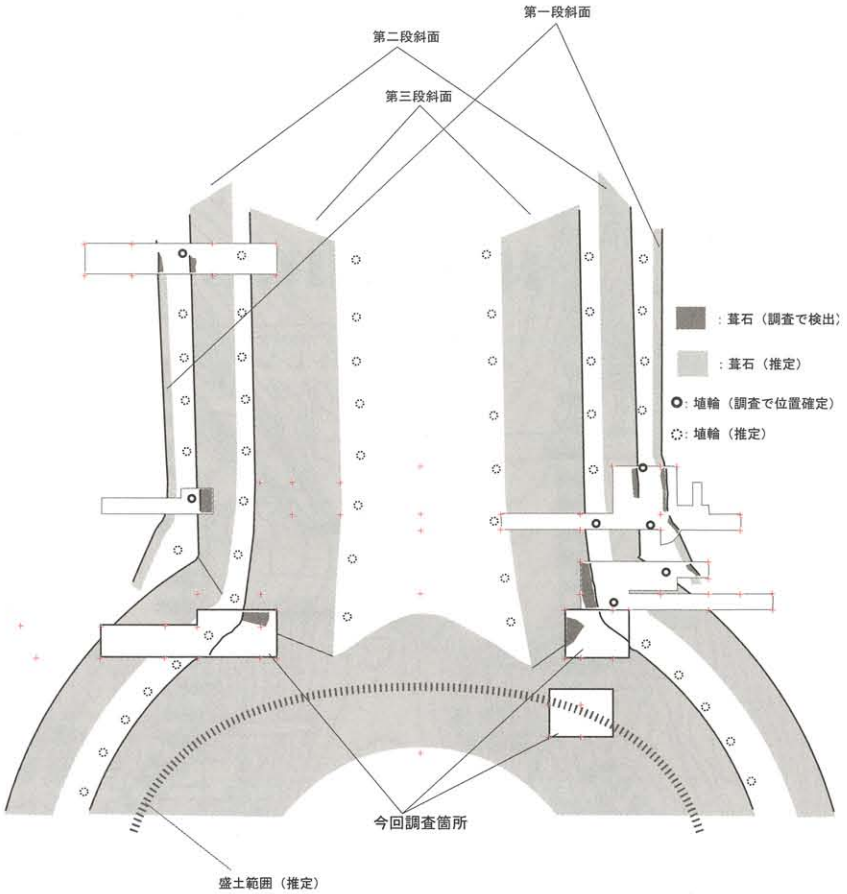
円筒埴輪片の他、壺形埴輪体部片などが出土しているが量は多くない。

挿図番号	遺物番号	出土地点	器種	残存部位	径	段高	透かし孔		外面調整	内面調整	色調		胎土	備考
							形状	配列			外面	内面		
5	1	15T	壺形埴輪	口頸部	口:38cm＋α				頸部縦ハケ口縁横ハケ後横ナデ	頸部縦指ナデ後口縁横ハケ後横ナデ	黄灰色	黄灰色	2～3mm大の石英多い	
5	2	15T	壺形埴輪	体部					縦ハケ	下半縦ケズリ上半指オサエ	黄灰色	黄灰色	2～3mm大の石英多い	赤色顔料塗布？
5	3	16T	小型甕？	肩～頸部	頸:10cm				一部横ハケ	体部指オサエ口縁部横ハケ	黄橙色	黄橙色	1mm未満の石英・赤色粒	
5	4	15T	壺形埴輪	底部					ハケ	指オサエ	黄橙色	黄橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒細粒多い	焼成前穿孔径15mm
5	5	16T	壺形埴輪	底部					ハケ	指オサエ	淡橙色	淡橙色	2～4mm大の石英、長石、赤色粒含む	焼成前穿孔径10mm？
5	6	15T	土師質小皿	底部～口縁	口:4.6cm				横ナデ底面回転篦切り	横ナデ	淡橙色	淡橙色	水漉し粘土	
6	1	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:38.8cm	6.2cm	?	?	縦ハケ後一部横ナデ	口縁部内面横ハケ	明橙色	明橙色	1～4mm大の石英・長石多い、赤色粒含む	
6	2	15T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:39cm	6.2cm	長方形	?	縦ハケ後丁寧な横ナデ	突帯裏面付近粗い横ハケ後全体横ナデ	明橙色	橙色	1～2mmの石英・長石・赤色粒	
6	3	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:46cm	5.6cm	?	?	縦ハケ後突帯付近横ナデ	緻密な横ハケ	明橙色(黒斑？)	淡橙色(黒斑？)	2mm大の石英・長石・赤色粒	
6	4	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:44cm	5.6cm	長方形	?	最上段縦ハケ後横ナデ第二段一次縦ハケ	最上段横ハケ第二段ケズリ	黄褐色～黄橙色	黄褐色(黒斑)	1～2mmの石英・長石・赤色粒	
6	5	15T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:45cm	6.2cm	?	?	全体一次縦ハケ突帯貼付部分軽く横ナデ	縦ケズリ後最上段横ハケ	明橙色	明橙色	1～2mmの石英・長石・赤色粒	
6	6	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:44.1cm	8.4cm	長方形	?	全体一次縦ハケ後最上段下半横ナデ	第二段縦指ナデ後最上段横ハケ	橙色(黒斑)	黄橙色	2～3mm大の石英・長石多い、赤色粒含む	
7	1	16T	円筒埴輪	中位段	体:41cm		?	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	黄白色・淡橙色	黄白色・淡橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	二種の胎土併用か？接合単位で発色異なる
7	2	16T	円筒埴輪	中位段	体:36.6cm		長方形	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	明橙色	橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒多い	
7	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:39.2cm		長方形・三角形	縦列	一次縦ハケ	縦指ナデ	淡橙色	暗橙色	2～3mm大の石英・長石・赤色粒多い	
7	4	15T	円筒埴輪	最上段～第三段	体:40.2cm	13.2cm	長方形	縦列	一次縦ハケ	縦指ナデ・最上段横ハケ	明橙色(黒斑)	明橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒多い	
8	1	15T	円筒埴輪	中位段	体:39.2cm		長方形	?	一次縦ハケ	指ナデ後一部横ハケ	明橙色	明橙色	1～2mmの石英・長石・赤色粒	
8	2	15T	円筒埴輪	中位段	体:37.6cm		長方形	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	明橙色	暗褐色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒多い	
8	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:38.2cm		?	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	黄橙色(黒斑)	橙色	2～3mm大の石英・長石多い、赤色粒含む	
8	4	16T	円筒埴輪	中位段	体:35cm	11.4cm	長方形	交互	一次縦ハケ	縦指ナデ	淡橙色	暗橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	
9	1	16T	円筒埴輪	中位段	体:33.4cm		長方形	交互	一次縦ハケ	指ナデ後一部横ハケ	明橙色(黒斑)	暗橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	
9	2	15T	円筒埴輪	中位段	体:34.2cm		長方形	交互	一次縦ハケ	縦ケズリ	明橙色	明橙色	1mm大の石英・長石・赤色粒	
9	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:36.6cm		?	?	一次縦ハケ	縦ケズリ主体で一部横ケズリ	淡橙色(黒斑)	明橙色	2mm大の石英・長石・赤色粒	器壁薄い
9	4	15T	円筒埴輪	中位段	体:33.6cm	11cm	円？	?	一次縦ハケ	縦ケズリ	明橙色(黒斑)	明橙色	2mm大の石英・長石・赤色粒	突帯貼付位置方形刺突
10	1	15T	円筒埴輪	中位段	体:38.4cm		長方形	?	一次縦ハケ	指ナデ後一部横ハケ	明橙色(黒斑)	明橙色	1mm大の石英・長石・赤色粒	
10	2	16T	円筒埴輪	中位段	体:37.8cm		長方形	?	一次縦ハケ	横指ナデ	明橙色(黒斑)	暗橙色	2mm大の石英・赤色粒	
10	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:43.4cm		?	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	淡橙色(黒斑)	明橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	
10	4	16T	円筒埴輪	中位段	体:39.4cm		?	?	一次縦ハケ	縦指ナデ	明橙色	暗橙色	2mm大の石英・赤色粒	10-2と同一個体の可能性
10	5	15T	円筒埴輪	中位段	体:33cm	11.2cm	長方形・三角形	縦列	一次縦ハケ	縦指ナデ	淡橙色	暗橙色	1～2mmの石英・赤色粒多い	箆描線刻文
11	1	15T	円筒埴輪	最下段	底:24.2cm				一次縦ハケ	縦ケズリ後最下部横ケズリ	明橙色	橙色	1～2mmの石英・赤色粒多い	
11	2	16T	円筒埴輪	最下段					外面剥落	縦ハケ	淡橙色	暗橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	
11	3	15T	円筒埴輪	最下段	底:34.2cm				外面剥落	内面剥落	濁黄色	濁黄色	2～4mm大の石英・長石、赤色粒非常に多い	
11	4	15T	円筒埴輪	最下段	底:42.2cm	17cm			一次縦ハケ	縦指ナデ	淡橙色	明橙色	2～3mm大の石英・長石、赤色粒多い	

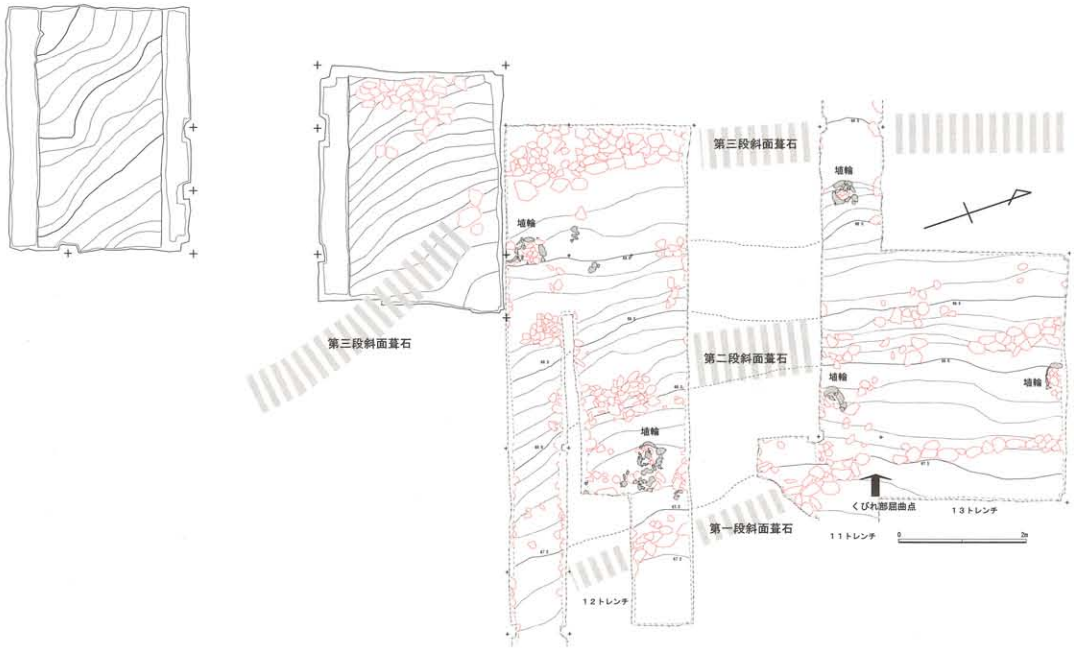
表１　遺物観察表



第３６図　快天山古墳調査区配置図



第３７図　快天山古墳段築・埴輪復元推定図（前方部）



第３８図　前方部東面調査区平面図

第４節　後円部調査区の概要

１．１８トレンチ：後円部南西面（第３９図　写真１８）

設定の意図：快天山古墳の後円部は、主体部のある後円頂部を中心に南半部は畑地として利用されていた。また、かつては葺石として葺かれていたと思われる石材が、現地表上に散在していたり、用悪水路の縁石として利用されていることもあり、墳丘施設の残存については、あまり期待できないと考えていた。一昨年度の調査で墳丘南端に４・５トレンチを設定したが思わしい成果があがっていなかった。これは墳丘主軸上で設定したもので、地形測量図からも判るように後円部でも特に改変を受けていることが予想される箇所であった。そこで、後円部南半部の中でも比較的残りが良いと思われる部位で再度墳端及び墳丘構造等についての確認調査を実施することにした。

設定位置：一昨年度の調査で３・４・５トレンチを後円部に設定し、施設や墳丘基底部を特定でき得る成果は確認できなかったが、傾斜変換点を検討することによっておおよその墳端ラインについて推定することが可能となった。

そこで、検討を重ねた結果、後円部墳頂のＫ１０杭から墳丘主軸ラインを南から西に４５度振ったラインに調査区を設定することにした。

設定箇所は、推定される墳端ラインを２ｍ程度越す辺りから内側へ１０ｍ余りとした。しかし、墳端と推定されるポイントに巨木があったことから、下部は、その巨木までとし、後述する２０トレンチを、巨木を避けるように南側に平行に設定することになる。

当初は、Ａ１４杭からＡ４杭までの１１ｍの延長であったが、調査の進行に伴い上端部をＡ３杭まで５ｍ延長し、その後トレンチ幅を半分にして更にＡ２杭までの５ｍを延長した。

結果的に１８トレンチは、後円部中心のＫ１０杭から１５ｍ～３６ｍ地点の延長２１ｍ、地表標高で７２．３２ｍ～６４．８９ｍの比高７．４３ｍとなった。トレンチ幅は、０．８ｍを基本とした。総面積は１４．８㎡であった。

成果：調査を進めた順を追って状況を述べると、まずＡ４杭～Ａ１４杭の１１ｍ区間であるが、地表観察で分かるとおり、従来畑地として利用されていたことに伴う畝の痕跡をＡ１１杭より上部でくっきりと残している。この畝形状はそのまま地山に現れており、畑地への開墾が墳丘にまで及んでいることが確認できた。

地山の直上には、Ａ４杭～Ａ６杭まではやや暗い灰黄色の粘性を帯びた土の堆積が見られた。その上部は同色系ではあるが濁りの強い土が２０㎝程度の厚みで地表面まで堆積していた。これは、畑地として使用されていた当時の耕作土であると読み取ることができる。この耕作土はＡ１４杭のところまで同様の堆積を見せる。また、その下層の暗灰黄色粘質土も同様に堆積を見せているが、トレンチ中程のＡ６杭～Ａ９杭の間で様相を変える。

Ａ７杭を中心に近世以降の掘削痕が見られるが、丁度それを挟むような土層が確認できた。これは、黄褐色の地山に程近いものであるが、白色砂粒を多く含んでおり上述している締まりのない堆積層とは明らかに性質を異にするもので、かなりの締まりを見せていることから盛土として考えた方が相応しい。同様のものは昨年度調査した３トレンチでも確認されている。これは地山を削り出して造形した墳丘の部分的に旧地形が不足する部分や細かい整形段階に置土として用いられたものと考えることができる。そう考えるとこの部

位に何らかの施設のための造作が成されたことが想定できるが、皮肉にもその中央に近世以降の掘削が及んでいることや、その上部や周辺部が開墾によって旧地形を留めていないことが考えられることによって、それが何であるのかをこの部位だけで判断するまでには至らない。

Ａ１０杭より下部では開墾以前の堆積層が確認できる。特にその各堆積に遺構が伴うものでもなく、どの時代にどのような堆積をしたのかは判断できない。

旧地形を比較的留めていると考えられるＡ１０杭～Ａ１４杭間の地山傾斜を観察すると、Ａ１２杭の下部で傾斜角が１９度から３４度へときつくなっていることから外表施設の痕跡の可能性を残す。

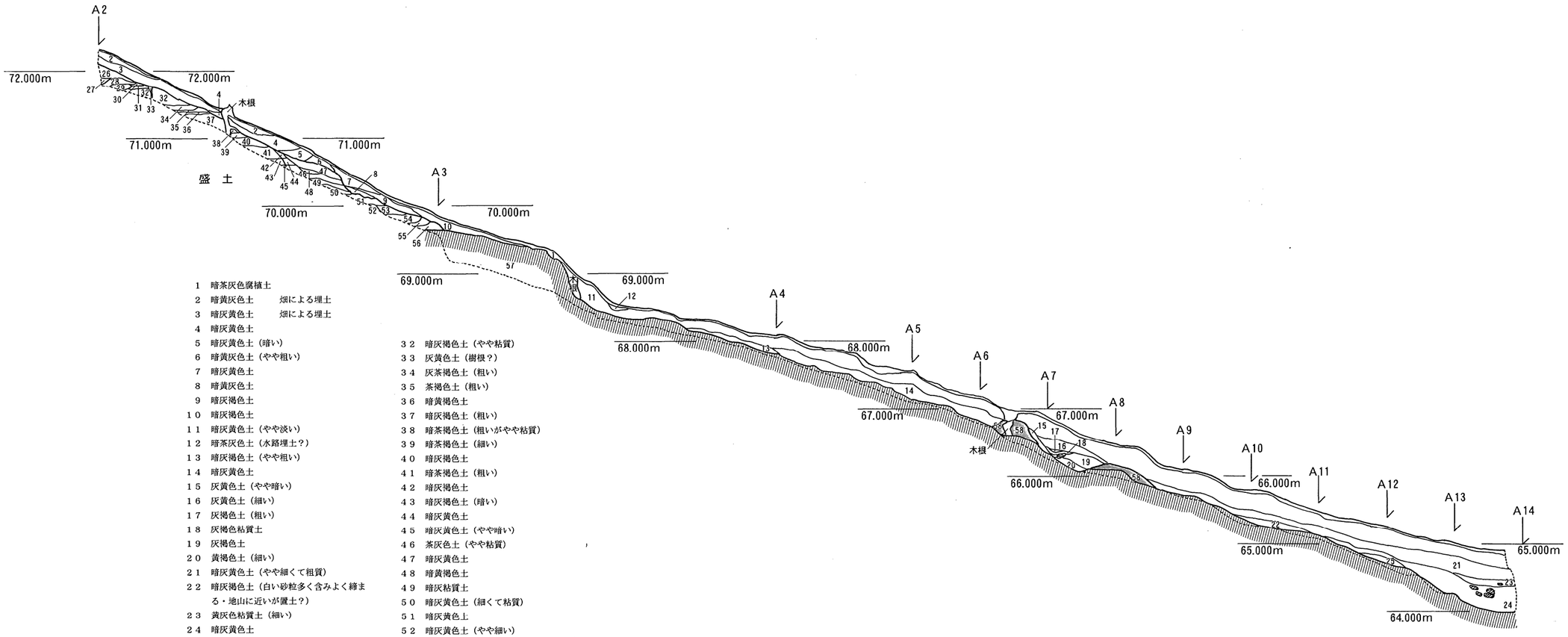
また、Ａ１３杭～Ａ１４杭の間には土壙状の窪みがあり埴輪片を含む礫が堆積していた。埋土の中に埴輪片を含んでいることから快天山古墳築造当時のもではなく後世のものと考えることができるが、遺物は埴輪片と礫のみであることから時期の特定はできない。

唯一遺構と捉えることができるものは、上述した傾斜変換点から５０cm内側のポイントを中心に浅いピットを検出した。埋土はやや淡い灰黄色土で僅かに１点であるが円筒埴輪片（第４２図１）が混入している。このことから、この遺構は円筒埴輪の据付壙である可能性を考えることができる。

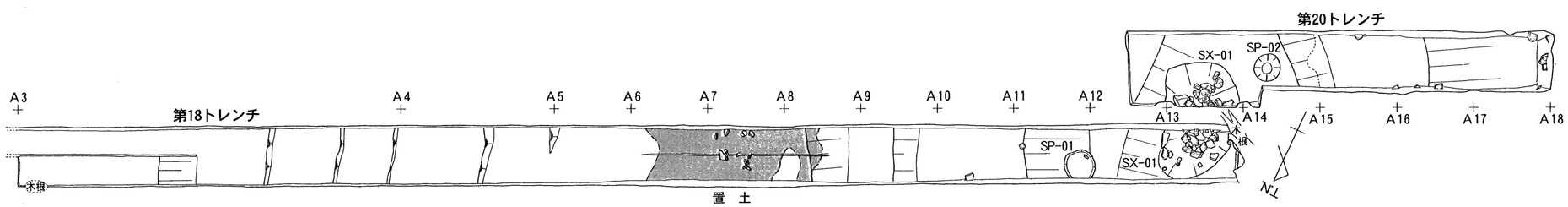
このトレンチで検出した出土遺物は、全てがＡ６杭より下部でのものであり、耕作土下の堆積層に含まれていることから、開墾以前に元位置から流出していたものと考えられる。また、そのほとんどが砕片化しているが形状を留めているものも含んでいることから元位置に近いところでの散在と考えられる。また、これらの遺物は数箇所に集中して出土している。Ａ７杭周辺の置土付近とＡ１２杭のピット周辺及びＡ１３杭～Ａ１４杭間の土壙部に集中していることからその付近で遺物を伴う外表施設（テラス面・円筒埴輪列）の存在が予想される。

Ａ３杭とＡ４杭の中間に大きく段になっている箇所があるが、これは掘削によってできたものと考えることができるが、地形測量図を観察するとその段下の平坦部が後円部斜面で円弧を描くように延びていることからトレンチをＡ３杭まで拡張した。この結果、この平坦部も下部同様耕作土直下が地山となっており、墳丘の施設を想定させるものは見つからなかった。更に段上は、地山直上に堆積土が無い状況となっており、この掘削がそれ程古くないことが明らかになった。

ここで注目するのがトレンチ先端のＡ３杭直下である。この部分でほんの僅かであるが、盛土状の比較的締まった土層を地山直上で検出した。これを受けてトレンチを上部に５ｍ、Ａ２杭まで拡張した。この結果、標高６９．６４ｍから上部は盛土で構築されていることが判った。この盛土は、その全てが水平に盛られており、３トレンチで確認されたものと同様に粘性の強いものや比較的粗いもの、また炭や灰を多く練り込んで強化したものを交互に敷き詰めていったもので非常に堅緻な盛土である。制約上、地山まで掘り下げて広い範囲での調査が不可能であったため、どのような単位で盛土が構築されていったのかまで確認することはできなかった。



1　暗茶灰色腐植土
2　暗黄灰色土　　畑による埋土
3　暗灰黄色土　　畑による埋土
4　暗灰黄色土
5　暗灰黄色土（暗い）
6　暗黄灰色土（やや粗い）
7　暗灰黄色土
8　暗黄灰色土
9　暗灰褐色土
10　暗灰褐色土
11　暗灰黄色土（やや淡い）
12　暗茶灰色土（水路埋土？）
13　暗灰褐色土（やや粗い）
14　暗灰黄色土
15　灰黄色土（やや暗い）
16　灰黄色土（細い）
17　灰褐色土（粗い）
18　灰褐色粘質土
19　灰褐色土
20　黄褐色土（細い）
21　暗灰黄色土（やや細くて粗質）
22　暗灰褐色土（白い砂粒多く含みよく締まる・地山に近いが置土？）
23　黄灰色粘質土（細い）
24　暗灰黄色土
25　暗灰褐色土
26　暗灰褐色粘質土
27　暗灰褐色粘質土
28　茶褐色土（やや粗いがよくしまる）
29　茶褐色粘質土
30　茶褐色粘質土（やや暗い）
31　黄褐色土
32　暗灰褐色土（やや粘質）
33　灰黄色土（樹根？）
34　灰茶褐色土（粗い）
35　茶褐色土（粗い）
36　暗黄褐色土
37　暗灰褐色土（粗い）
38　暗茶褐色土（粗いがやや粘質）
39　暗茶褐色土（細い）
40　暗灰褐色土
41　暗茶褐色土（粗い）
42　暗灰褐色土
43　暗灰褐色土（暗い）
44　暗灰黄色土
45　暗灰黄色土（やや暗い）
46　茶灰色土（やや粘質）
47　暗灰黄色土
48　暗黄褐色土
49　暗灰粘質土
50　暗灰黄色土（細くて粘質）
51　暗灰黄色土
52　暗灰黄色土（やや細い）
53　暗灰褐色土
54　暗灰褐色土
55　茶褐色土
56　暗灰褐色土
57　暗灰褐色土（粗い）：地山
58　灰黄色土（粗くて地山っぽいが、白い砂粒を多く含みよく締まる）：置土



0　1　2m

第３９図　１８トレンチ平・断面図（S=1/60）

２．１９トレンチ：後円部南東面（第４０図　写真１９）

設定の意図：１８トレンチの設定と同様に畑地として利用されていた快天山古墳の後円南半部において、墳端及び墳丘構造を解明するための調査区として１９トレンチを設定した。これについても地形測量図の検討や現地での検討を踏まえて、比較的残存状況が良好であると考えられるポイントに設定することとした。

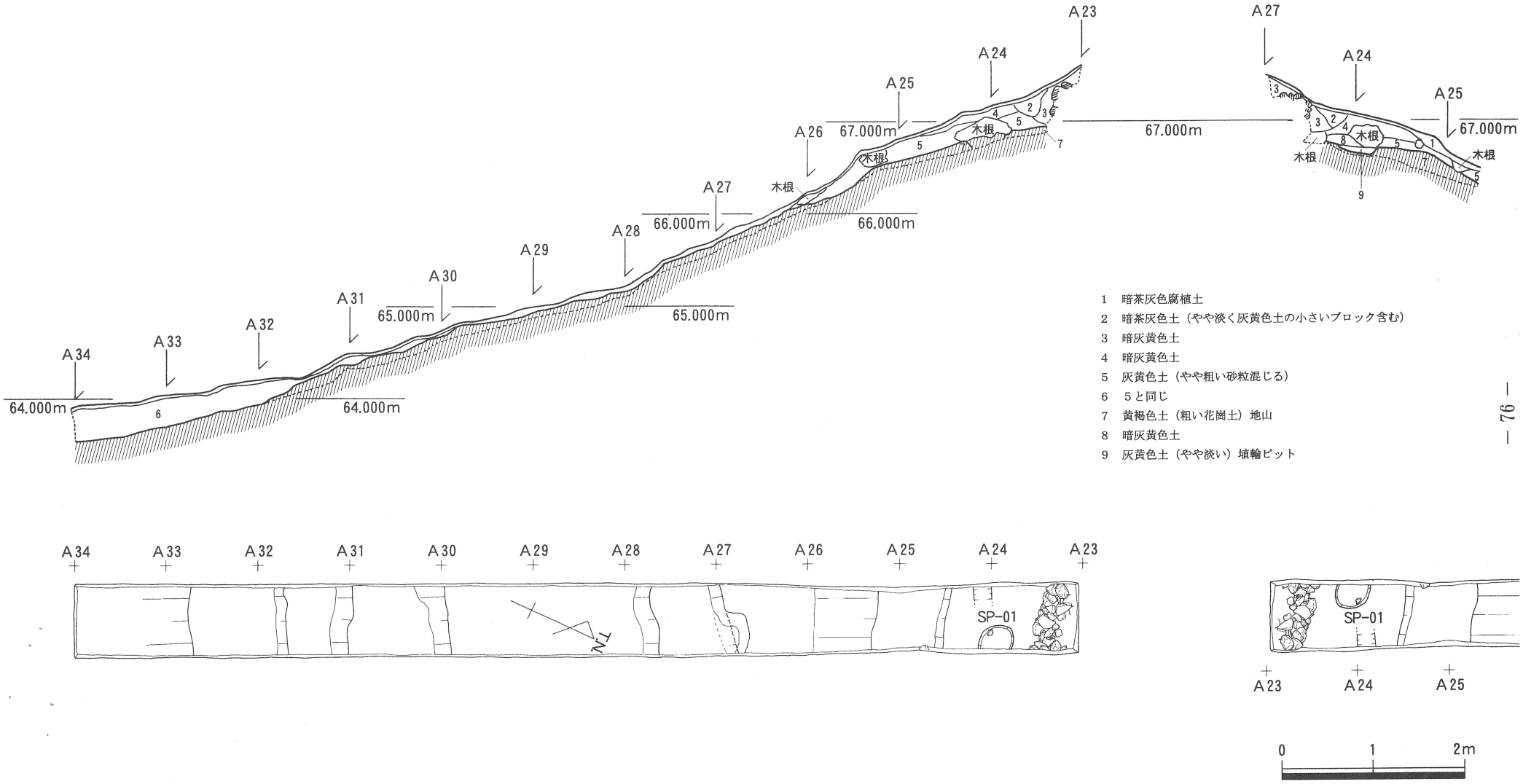
設定位置：１８トレンチ同様に後円部における墳端及び墳丘構造を確認するための調査区であるので、後円部の南半部、墳端部付近での調査区設定とした。検討の結果、墳丘主軸に対して１８トレンチと対象となるよう後円部中心のＫ１０杭から墳丘主軸ラインを南から東に４５度振ったラインでの調査区設定とした。

設定箇所は、これまでに検討してきた推定墳端ラインの２ｍ外側から９ｍ内側までの延長１１ｍとした。後円部中心のＫ１０杭からは、２７ｍ～３８ｍの位置で、地表標高は６７．６２ｍ～６２．９０ｍの比高４．７２ｍとなった。トレンチ幅は０．８ｍとしたので面積は８．８㎡となった。

成果：１９トレンチの地表形状を大まかに見ると最上部のＡ２３杭付近は、用悪水路が設置されている。そのすぐ下に道がありＡ２５杭を越す辺りまで少し平坦（２０度）になる。そこからＡ２８杭までの間が急勾配（２６度）になりＡ２８杭からＡ３１杭までが再度平坦（１４度）になる。そこで僅かに急勾配（３０度）の箇所があり、その後は緩い勾配（８度）で特に変化は見られない。

地山まで掘り下げた結果、現在の地表形状に整形されたのが古くないことがわかった。細かく見ると、Ａ２６杭～Ａ３０杭間については、腐植土直下が地山で堆積土が皆無の状態であった。Ａ３１杭より下部には堆積層が見られるが厚みが３０㎝前後ある割には分層できないことから、何らかの要因で一気に堆積したものと考えられる。その最下部すなわち地山直上からは瓦器椀が出土しておりそれ以降の遺物は含まれないことから、少なくともこの部位は、中世期以降は旧状が保たれているものと考えられる。この堆積層下の地山形状を観察すると、高さ３５㎝程度の段が確認できるＡ３２杭を基底部としてＡ３１杭までの区間が２６度の勾配を持ちその上部が１２度と緩やかになる。この平坦部の途中から地山上部の堆積層が無くなり当時の状況を探ることはできないが、同様の勾配でＡ２８杭まで３ｍ程続く。Ａ２８杭からＡ２５杭辺りまでが再び勾配がきつくなり角度で示すと３３度ということになる。その上部は、トレンチ東面の土層を見ると勾配が７度と平坦になる。ここで注目するのは、この平坦部に埴輪片を包含する径４０㎝程度の浅いピットを検出したことである。この辺りは、上述したように用悪水路や道で改変を受けているが、その改変した下部に僅かながら堆積土が残存しており、その下部に包蔵されていたのである。

ピット内の埋土はやや淡い灰黄色土で先に述べた１８トレンチで検出した埴輪据付穴の痕跡の可能性を持つ遺構のものと同系統のものである。このことからこの平坦部は墳丘テラス面である可能性が考えられる。本来であればこのまま上部にトレンチを掘り進めばよいのであろうが、Ａ２３杭の下にある用悪水路に石材が積み上げられており、これを取り外すことによってその機能が失われることが予想できたので拡張はしなかった。調査中も雨天後には、この辺りで水が多量に染み出てくるという状況であったため一刻も早く現状に復する必要性もあった。



1　暗茶灰色腐植土
2　暗茶灰色土（やや淡く灰黄色土の小さいブロック含む）
3　暗灰黄色土
4　暗灰黄色土
5　灰黄色土（やや粗い砂粒混じる）
6　５と同じ
7　黄褐色土（粗い花崗土）地山
8　暗灰黄色土
9　灰黄色土（やや淡い）埴輪ピット

第４０図　１９トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60）

なお、一瞬葺石と思わせる用悪水路に用いられている多量の石材については、安山岩で拳大～やや大きいものがほとんどであり、くびれ部の調査で検出した葺石のものと酷似している。本来的には葺石として使われていたものであると思われる。

この用悪水路で石積みが成されている範囲は、後円部南東部で、後円部を４分の１周程の区間で、西から東へ下る勾配で敷設されている。

３．２０トレンチ：後円部南西面（第４１図　写真２０）

設定の意図：後円部南西方向に１８トレンチを設定したが、墳端付近と想定される箇所に巨木がありトレンチを延ばすことが妨げられる状況にあった。しかしながら、当所については墳丘規模を考えるうえで重要なポイントであるため、１８トレンチに並行するトレンチを設定し、墳端確認調査を継続する必要性があった。そこで状況を検討した結果、１８トレンチの南側に、新たなトレンチを設定することが適当と判断し、調査区を設けた。

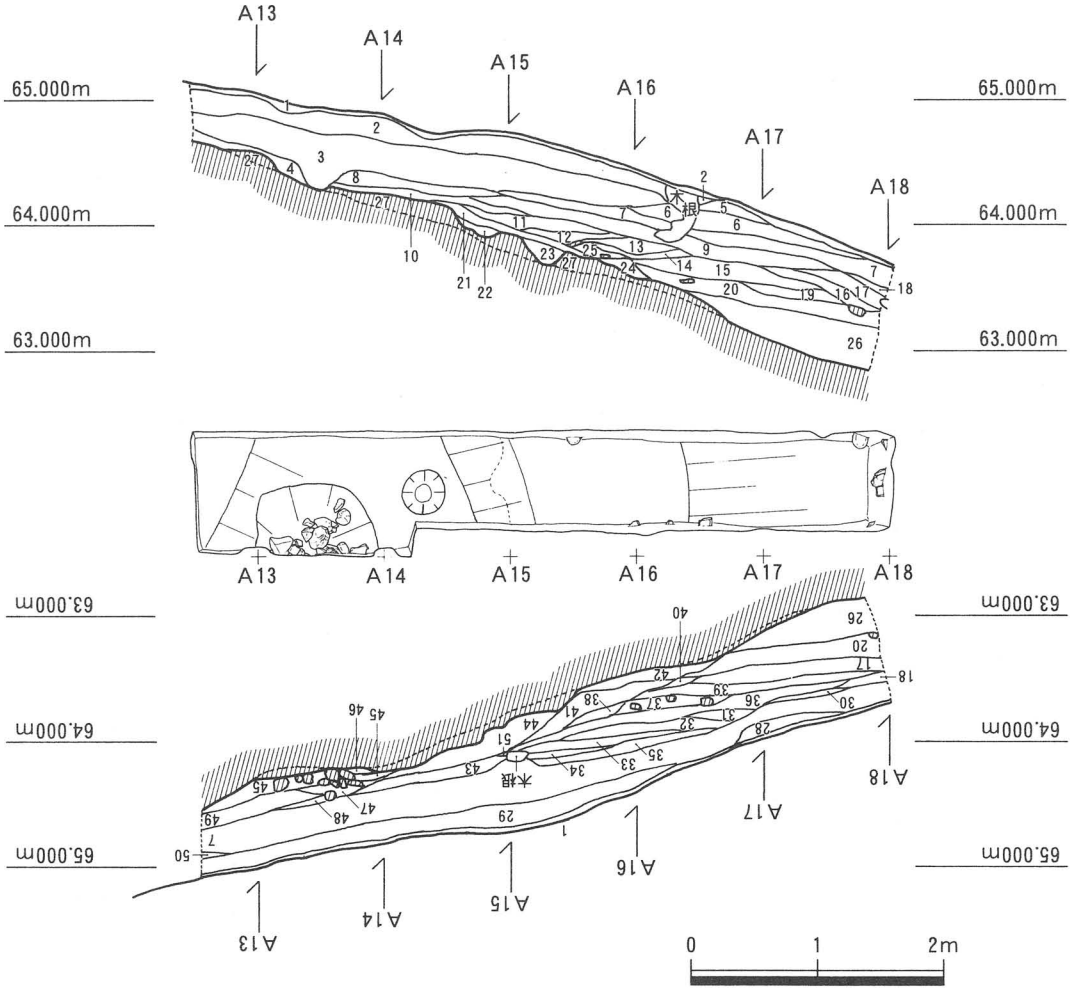
設定位置：１８トレンチが、後円部中心Ｋ１０杭から３６ｍのＡ１４杭で巨木にあたることから、その南側に並行して設定した。Ａ１３杭～Ａ１４杭間は１８トレンチと重なるようにし、Ａ１８杭までの５ｍの延長であったが後に内側に０．５ｍ拡張した。

結果的に後円部中心のＫ１０杭から３４．５ｍ～４０ｍ、地表標高で６５．１５ｍ～６３．６９ｍの比高１．４６ｍであった。トレンチ幅は、１８・１９トレンチと同様に０．８ｍとし、面積は４．８㎡であった。

成果：１８トレンチの裾部付近の拡張トレンチとして設定した調査区で、１８トレンチの裾部付近と併せた結果として、まず１８トレンチＡ１２杭～Ａ１３杭間で見られた地山の傾斜変換点が同様にＡ１３杭より上部で見られる。また、この急傾斜になった部分を更に掘削する土壙（ＳＸ－０１）が確認できた。これは、１８トレンチで確認できたものと併せると南北１．５ｍ×東西１．０ｍ程の不定形のもので、中央部付近に集中して拳大の礫が堆積している。その殆どが地山に到達していないことから何らかの要因によって埋土と同時に堆積したものと考えられる。また、１８トレンチ側同様、この埋土中には埴輪片も含まれており、堆積している礫も本来葺石として利用されていたものとして考えると、この土壙は快天山古墳以降に作られたものと推察できる。

快天山古墳の施設について明確にできる成果は、他の調査区同様見られないが、トレンチ両側壁及び底面の観察において不定形の浅い落ち込みを確認することができる。遺物が伴わないことから、それが何であるのかの判断はできないが、今回くびれ部で実施した１５トレンチで確認できた不定形の浅い落ち込みと類似するものと考えると、葺石基底部付近の人頭大よりやや大きめの礫を据え付けるための痕跡と推察することもできる。検討してきた中でもこの地点が後円部墳端付近に該当することについて強く否定することもできないと思われる。

また、このトレンチにおいても出土遺物に集中性が見られる。まず一箇所は、快天山古墳以降に作られたと思われる土壙（ＳＸ－０１）である。これは礫と一緒に埋土と共に包含されたものと考えられる。もう一箇所は、このトレンチにおける堆積層は前述した浅い落ち込みを挟んで６０～７０㎝から９０～１００㎝へと厚くなるが、その深くなる辺りから各土層が薄く幾重にも堆積を見せる土層のうち、その上半層である。また、平面的な分



1	暗茶灰色腐植土	14	黄灰色土（やや粗い）	28	茶灰色土（耕作土？）	40	灰黄色土（細くて粘質土）
2	灰黄色土（やや濁る）３より暗い	15	灰黄色土（粗いがやや粘質）	29	灰黄色土（やや濁る・７よりやや暗い）	41	灰褐色土
3	灰黄色土（やや濁る）	16	灰黄色粘質土	30	灰黄色土（やや粘質）	42	灰褐色土（やや粗い）
4	灰黄色土	17	灰褐色土	31	灰黄色土（粗い）	43	灰橙色土（細い）
5	灰黄色粘質土（やや暗い）	18	灰黄色粘質土（細い）	32	灰黄色土（やや粗い）	44	灰黄色土（やや濁る）細い
6	灰黄色粘質土	19	灰褐色土（粗い）	33	灰褐色土（細い・やや粘質）	45	灰褐色土（礫多く含む）
7	灰黄色土	20	灰黄色粘質土	34	灰黄色土	46	灰褐色土（やや粘質）
8	灰黄色土（やや粘質）	21	灰黄色土（やや粘質）	35	灰橙色土（細い）	47	灰黄色粘質土
9	灰褐色土	22	灰褐色土	36	灰褐色土	48	灰褐色土（やや粘質）
10	灰褐色土	23	灰黄色土	37	灰褐色土（やや粘質性有、礫含む）	49	灰黄色土（やや粘質）
11	灰黄色土（やや褐色がかる）	24	灰褐色土	38	黄灰色土	50	灰黄色土（やや濁る）７よりやや暗い
12	灰褐色土（やや粗い）	25	灰褐色土（サクサク）	39	灰黄色土（細い）	51	灰褐色土（やや粗い）
13	灰黄色土（やや粘質）	26	灰黄色粘質土				
		27	灰褐色土（地山・粗い）				

第４１図　２０トレンチ平・断面図（Ｓ＝1/60）

布範囲もＡ１５杭～Ａ１６杭間に集中している。これは前述した不定形な浅い落ち込み付近ということになり、何らかの関係があるのかも知れない。また、遺物は殆どが円筒埴輪片で葺石に使用されていたと思われる礫も、多量に同層中に含まれる。

第５節　後円部調査区出土遺物の概要

１．快天山古墳関係遺物（第４２図　写真２１）

この調査区では２８ℓコンテナで１箱の遺物が出土した。今回調査したくびれ部調査区と比較すると対称的な少なさである。また、その殆どが細片しており原形を留めているも

のは１割にも満たない。また、元位置に残されていたものもなく、流出した後のものであるため接合できるものもなかった。

以下では、数少ない資料のうち１８トレンチ５点、１９トレンチ１点、２０トレンチ１点についての報告をする。

また、直接快天山古墳に関係するものではないが、近世まで各時代を通じてこの土地が利用されてきたことを覗わせる土師質土器片、須恵器片、瓦器片等も少量ではあるが出土している。

壺形埴輪（第４２図５）

１８トレンチＡ１１杭～Ａ１２杭間の埴輪据付壙（？）直上で出土しており、本墳の出土遺物の大半を占める円筒埴輪片に比べると極端に少ない壺形埴輪片の一つである。二重口縁で頸部及び端部は欠失しており詳細は掴めないが、頸部から強く外反し、強く立ち上がり口縁部に至ると思われる。口縁中間部で径１７cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には０．５～１mm程度の砂粒を含む。また、調整は外面・内面共に横ナデである。

円筒埴輪（第４２図１～４・６・７）

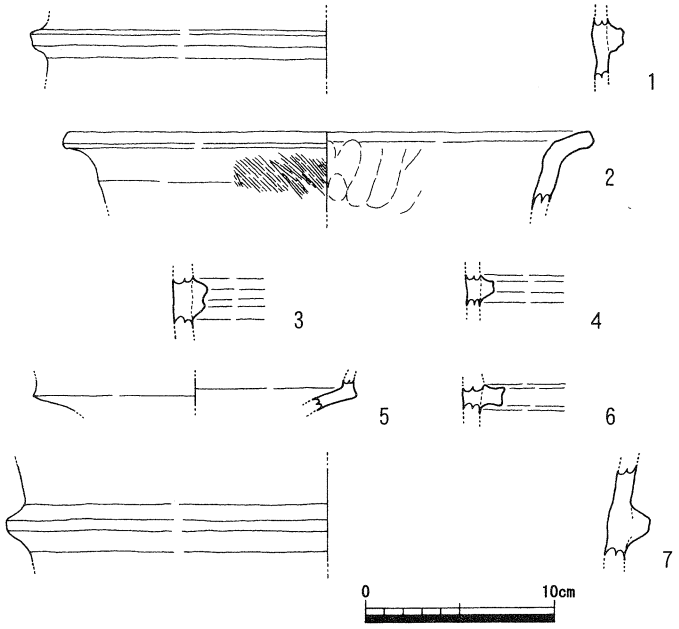
今回の調査で出土した遺物のうち形状を留めているもののほとんどが円筒埴輪の突帯部分であった。

１は、１８トレンチＡ１１杭～Ａ１２杭間の埴輪据付壙（？）の埋土中に含まれる本トレンチ唯一の遺構に伴う遺物である。

体部で径３１．４cmとくびれ部で出土したものと比較すると少々小振りである。焼成は良好、色調は淡橙黄色、胎土には２～４mmの長石を含む。また、調整は外面・内面共に強い横ナデであり突帯取付け時に接着点を内外から強く圧着させているようで突帯上部下部共に円筒部が薄くなっている。

２・３は、でＡ６杭～Ａ９杭間の置土上で出土している円筒埴輪片である。２は、口縁部で径２８cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には０．５～１mm程度の砂粒や１～２mmの長石を含む。また、調整は、内面は強い縦ナデ、先端部は内外共にナデ整形、湾曲部は縦ハケで、一部横ナデで消されている。体部は縦ハケ後横ナデである。３は、体部で径は不明、焼成は良好、色調は淡茶色、胎土には０．５～１mm程度の砂粒を含む。調整は、内面は摩滅により不明だが外面は横ナデである。

４は、１８トレンチ最下部で検出した土壙上の地表に程近い耕作土からの出土である。耕作



第４２図　壺形・円筒埴輪（Ｓ＝１/４）

土に含まれることから位置的には元位置から大きく動かされている可能性も否めないが、形状を留める貴重な資料である。円筒埴輪の体部のタガ部分であり、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には０．５～１㎜程度の砂粒や１～２㎜の長石を含む。調整は、１同様に内面・外面共に強い横ナデで突帯接着時に強く圧着させられている。

６は、１９トレンチ最下部、Ａ３３杭～Ａ３４杭間の地山直上で出土した円筒埴輪片体部タガ部分である。地山直上ということから、最も近接する施設（テラス面・円筒埴輪列）からの流入と考えられる。焼成は良好、色調は淡橙色、胎土には０．５～１㎜程度の砂粒を含む。調整は、内面は残存部分が非常に少なく不明であるが、外面は１８トレンチの遺物と同様に突帯の上部下部共に体部に接合する際の、強い横ナデとなっている。

７は２０トレンチＡ１３杭～Ａ１４杭間の土壙（ＳＸ－０１）の石溜中に同胞されていた円筒埴輪体部で残存部分で径３４㎝である。焼成は良好、色調は淡灰黄色、胎土には０．５～３㎜程度の砂粒を多く含む。調整は、内面・外面共に摩滅が激しく不明である。

図版５６　推定第二段テラス遺物出土状態（西から）

図版５７　推定第二段テラス遺物出土状態（東から）

図版５８　第二段テラス遺物出土状態（西から）

図版５９　第三段斜面葺石遺存状態（西から）

図版６０　第二段斜面葺石（西から）

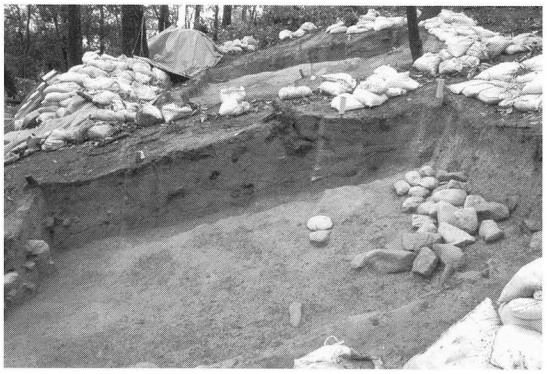
図版６１　第二段斜面葺石と基底石堀方？

図版６２　第二段斜面葺石（南から）

図版６３　第二段斜面葺石（上から）

写真１０　１５トレンチ

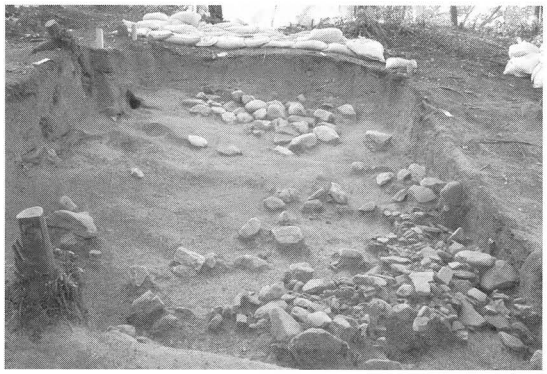
図版６４　第三段斜面葺石残存状況（東から）



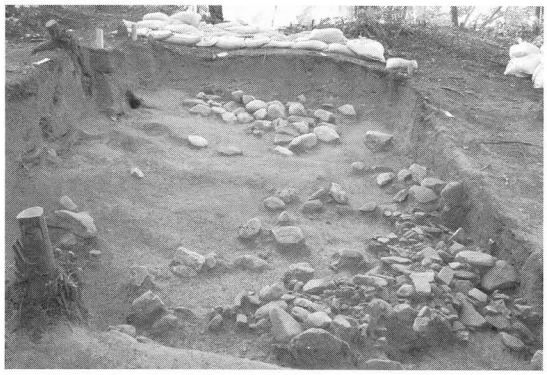
図版６５　第三段斜面葺石（北から）

図版６６　第三段斜面葺石（東から）

図版６７　第三段斜面葺石（南から）



図版６８　推定第二段テラス遺物出土状況（東から）



図版６９　第二段テラス遺物出土状況（西から）

図版７０　第二段テラス遺物出土状況（東から）

図版７１　第二段テラス遺物出土状況（南から）

写真１１　１６トレンチ

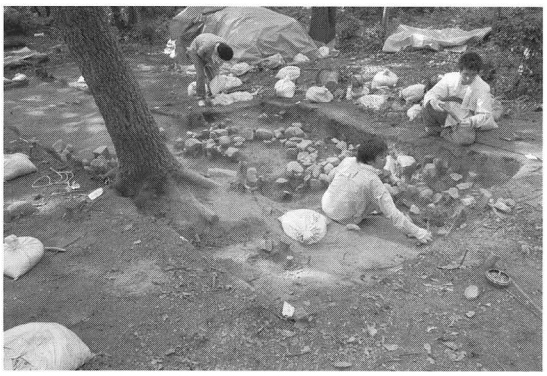
図版７２　１７トレンチ全景（東から）

図版７３　１７トレンチ南壁土層全景（北東から）

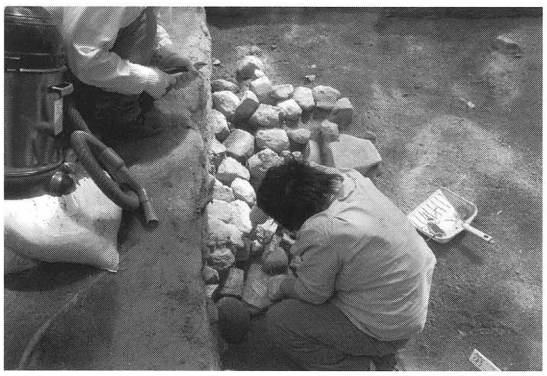
図版７４　南壁土層：中央部（北から）

図版７５　南壁土層：西部（北から）

図版７６　南壁土層：東部（北から）



図版７７　１７トレンチ遺物検出作業

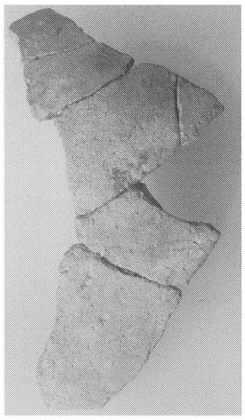


図版７８　１７トレンチ葺石実測作業

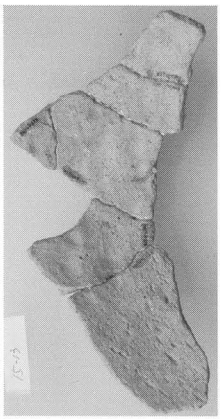
図版７９　調査説明会風景

写真１２　１７トレンチおよび調査風景

図版８０　壺形埴輪（第２７図－１）

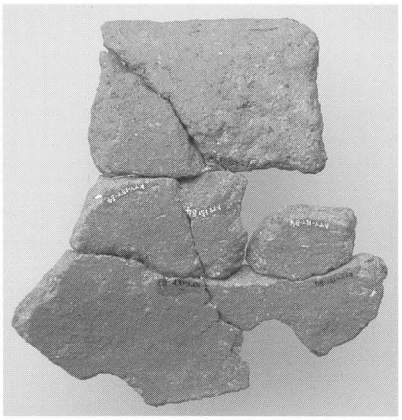


図版８１
壺形埴輪（第２７図－２）表

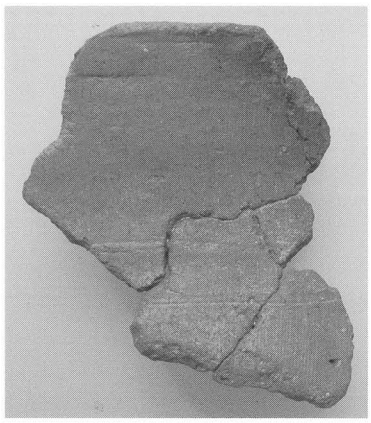


図版８２
壺形埴輪（第２７図－２）裏

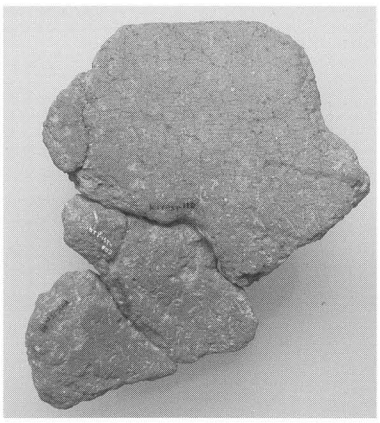
図版８３　円筒埴輪口縁部（第２８図－２）表



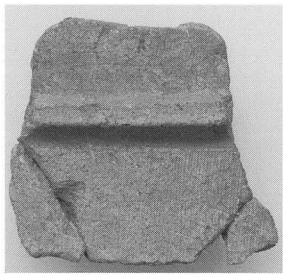
図版８４　円筒埴輪口縁部（第２８図－２）裏



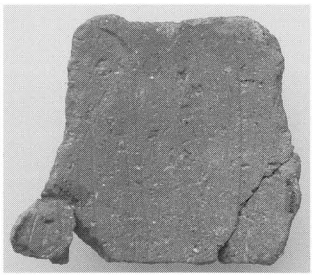
図版８５　円筒埴輪口縁部（第２８図－５）表



図版８６　円筒埴輪口縁部（第２８図－５）裏

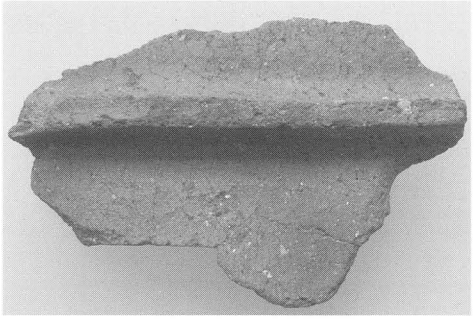


図版８７　円筒埴輪中位（第３１図－２）表

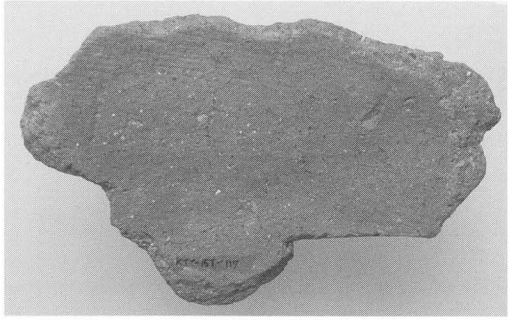


図版８８　円筒埴輪中位（第３１図－２）裏

写真１３　１５トレンチ出土埴輪

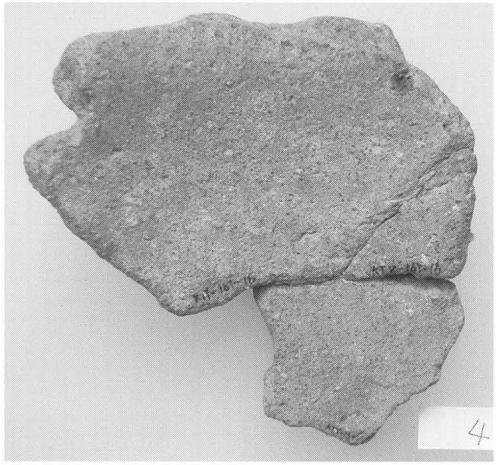


図版８９　円筒埴輪中位（第３２図－１）表



図版９０　円筒埴輪中位（第３２図－１）裏

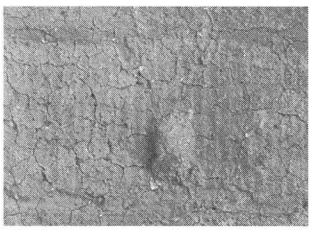
図版９１　円筒埴輪中位（第３０図－３）表



図版９２　円筒埴輪中位（第３０図－３）裏

図版９３　円筒埴輪中位（第３１図－４）表

図版９４　円筒埴輪中位（第３１図－４）裏



図版９５　円筒埴輪中位（第３１図－４）拡大

写真１４　１５トレンチ出土埴輪２